山ぎろう

第37号　平成18年11月　関東氷上郷友会

おもわず　新しい

NEXTA

人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東　京　支　店　111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル　TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッピイ株式会社

東　京　工　場　121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12　TEL 03-3849-6611
千　葉　工　場　270-0202 千葉県野田市関宿台町2192　TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケイ株式会社

栃　木　工　場　323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938　TEL 0282-62-3321

山ぎろう

第37号

漆喰(しっくい)の疵(きず)も疼(うず)くや蝉(せみ)しぐれ

山ざる　第37号　目次

〈表紙〉可部美智子陶彫〝おまつりだ！〟二〇〇六年作
〈目次Ⅰ〉写真＝徳田八郎衛撮影、俳句＝渡邊隆男
〈目次ⅡⅢⅣ〉写真＝氷上町夫婦橋・佐治川にて（渡邊隆男撮影）
いずくにか帰らん……渡邊隆男　5
平成17年度「ふるさとの会」開催……6
会計報告書……9／祝寿の方々ご紹介……10／懇親会スナップ……12

《ふるさと随想》
丹波の和田と横浜の和田……梅田重二　16
丹波にまつわる人の縁……谷口　捷　18
空白とされている歴史の検証……西畑健一　23
「上久下村」で育った「へちま会」……細川倫夫　24
「平和への願い」切実に……小山とし子　27
氷上の四季……大塚秀弍　29
進んでいた丹波の民主主義制度教育……仲　正　32

《丹波研究》
丹波の生鮮市場盛衰史……徳田八郎衛　36／時空ロマン・白毫寺……日置孝彦　38

《丹波を撮る》～変わる丹波・変わらぬ丹波～ 柏原バイパス沿い／氷上町南御油・北御油
～丹波市内の坂～ 柏原町北山・田路　……撮影・徳田八郎衛　42

《私の職場》定年後に設立した国際特許事務所……高田　守　48
NPO法人「アジアの新しい風」……上　高子　50

《近況・エッセイ》
ところ変われば人もいろいろ……堀　和博　52
ドライブ旅行を楽しむ……今田二三夫　55
かくも愛しき存在……岡田昌子　57
卒寿を祝福されて……木村つた江　60
毎朝のセレモニー……矢尾鐵太郎　62
人と歯並びと―（揣摩臆測）……中村允也　65
花で結ぶ地域の輪から……足立和子　68
キューバと日本の関係……酒井重男　70
私の巡礼……徳義通夫　71
中国の歴史に興味を抱いて……加賀山次郎　73
折々の記(3)……井本義一　76

《旅行記》ニュージーランドの旅……川端教子　85
ハワイ周遊クルーズ四島巡りの旅……生田清弘　88

《丹波通信》いなか暮らしを求める人々……小田晋作　96

《ふるさとトピックス―丹波新聞から―》……99

《BOOKS》……100　《会員だより》……104　《寄附者芳名》……111

《インフォメーション》……112

協賛広告……116／編集後記……128

志を果たして
いつの日にか帰らん
山は青き古里
水は清きふるさと

高野辰之詞　岡部貞一曲

いづくにか帰らん

会長　渡邊隆男

私は数えで来年八十歳、いつの間にか思ってもみなかった老人になってしまいました。そろそろ旅支度にかからなければなりますまい。夕焼け空を楽しんでいるうちに、日は釣瓶落としに沈んでしまいましょう。

カスリのゆかたに竹箒でホタルを追った宵の畦路（あぜみち）、濡れて燦めく天の川、「ハメが出るさかいナ、気ィつけなはれよ」と背中に聞いた母の声は、もうない。あの友もそしてあの舎弟までもが、今はもういない。ふるさとのあの山河はあのままに在っても、私のふるさとは遥か忘却の彼方に霞んでしまいました。

○父母逝きてふるさと遠くなりにけり
　永遠（とわ）のすみかを何処（どこ）に求めん

生涯をかけてコツコツ耕してきた仕事も、このあたりが潮時か、心残りが山ほどあるといっても、それは未練というもの、このあたりでいさぎよくバッサリ区切りをつけましょう。フッキリのつかないときには、いつ死んでもしかたのなかったあの戦争時代を思い出せばよいのです。腹が減って眠れなかったこと、年中重労働で盆と正月しか休めなかったこと、小使い銭などお祭りの日にしかもらえなかったことなど……。あのころを思えばできないことなど何もないはずです。

想えばこの何十年、どえらい変わりようでっセ。父も以前同じようなことを口ぐせのようにいってました。

いま見回すと右も左も戦後の育ちか生まれで、私はまさに浦島太郎。ところが昨今、靖国神社がどうの、A級戦犯がどうのと、とっくの昔に癒えたはずの古傷にさわっては暇つぶしの駆け引きをやっています。そんな井戸端会議か小田原評定はもうエゝかげんにして、日本の政治家はもっと外へ出るべきです。日本は近隣のアジア諸国に対してもっともっと力をそそぐべきです。そして世界に日本の伝統的な美しい心を植えつけましょう。郷友の若い諸賢に期待してやみません。

平成十七年度の「ふるさとの会」は十一月二十六日（土曜日）正午から、東京都千代田区の九段会館桐の間において行われた。会は総会・祝寿会・懇親会の三部からなっているが、本年は祝寿にご招待したかたがたが、全員都合わるくご出席なしとなり、いちまつの淋しさがあった。

総会では会長挨拶のあと第一号議案として理事一名の追加選任に関する件につき審議されたが、全会一致で承認された。新理事に選任されたのは、氷上町出身の上高子氏。自らたちあげたＮＰＯ「アジアの新しい風」の事務局長として活躍されているほか、丹波新聞の東京特派員としても、同紙のコラム「丹波人ｎｏｗ」に、軽妙な筆をふるっておられる。第二号議案は、本会の名称についての理事会決議案に関するもの。氷上郡が丹波市となったのを期に、

辻 重五郎丹波市長の来賓挨拶

本会の名称も丹波郷友会と改めてはいかがかとの提案をうけ、討議の末、多数意見をもって「関東氷上郷友会」とする案を採った。総会では、これも全会一致の賛成をいただき、本会名称は、従来どおり「関東氷上郷友会」を称することとなった。

つづいて谷口理事から会計報告、足立監事から監査報告、つぎに坂上理事から会務報告があり、いずれも全会の承認を得た。

懇親会では、辻重五郎丹波市長、植田憲雄柏陵同窓会長、田晴通丹波郷友会長（旧関西氷上郷友会）および進藤昇兵庫県東京事務所次長に祝辞をいただいた。ことに郷里の首長のご出席は、絶えて久しかっただけに、初代市長として多くの難題と向かい合う多忙な時間を割いて駆けつけていただいたことへ一同感激した。

また、今回は、珍しいお客様もお迎えした。軍事技術史の研究家で品川生まれ、横浜市在住の石井正紀氏である。研究中の秋山徳三郎陸軍中将について、興味深いお話をうかがった。秋山中将といっても、ほとんどのかたがご存じないと思われるが、このかたは、明治二十四年黒井町（当時は黒井村）の生まれで、柏原中学第八回生。在学（四年次）中に陸軍士官候補生試験に合格、福知山工兵大隊、陸軍士官学校、東京大学を経て工兵畑を歩き、終戦時は陸軍中将。戦後は建設会社を起して、昭和三十八年には東京都優良業者表彰を受けられた。秋山氏の事跡については、この九月に出版された石井正紀氏の労作「技術中将の日米戦争」（光人社NF文庫）にくわしい。

楽しい懇親会は乾杯から始まる。乾杯の発声は常岡幹彦副会長。このあと二時間あまり、会場は例年通り丹波弁の飛び交う、会話の坩堝（るつぼ）と化す。

お楽しみは、毎年のことながら、会からの「山の芋」と「黒豆」の贈り物である。この年は、気候にも恵まれ、良い豆が収穫できそうだと、篠山の小田垣商店から知らせが届いていた。（黒豆は例年当年度収穫のものをお届けするので、お手にしていただくのは十二月になってからになる）それぞれ十名のかたがたが、幸運を引き当てて、最良の日を終わられた。

中締めは、藤田純氏にお願いした。一同の健康と会のますますの発展を祈念して、威勢良く一本締めで決めた。

（文責・坂上勝朗）

◉平成十七年度「ふるさとの会」出席者

（順不同・敬称略）

〈来賓〉

辻重五郎　丹波市長

植田憲雄　柏陵同窓会長

田　晴通　丹波郷友会長

恭子　（田氏夫人）

進藤　昇　兵庫県東京事務所次長

西山信彦　同　課長

〈会員〉

○青垣町（3名）

足立和巳　足立静雄　安原三智子

○市島町（9名）

荒木輝雄　井田悦子　木村つた江　近藤勇

高見秀史　鶴田ゆき子　藤田純　藤田徹

丸川宥二郎

○柏原町（8名）

生田清弘　植田茂樹　岡吉明　岡田昌子　小田晋作

常岡幹彦　谷敬三　徳田八郎衛

○春日町（9名）

金出一郎　木呂子恵美子　近藤田治　近藤仁司

富田貞子　広瀬靖典　村上久夫　村上信夫

前田武彦　吉住自由造

○山南町（12名）

池田忍　植木十和子　植田重二　大野義昭

久保春雄　勢川武彦　仲一聡　中居篤子　前田和一

増井　攻　村岡勝美　渡辺貴美子

○氷上町（19名）

足立吉雄　足立謙悟　上高子　上嶋恵二郎

上田道代　臼井小五郎　上野重喜　荻野守　岸本勲

小山とし子　坂上勝朗　祐安夏恵　谷口捷

谷口浩章　辻田昌　仲矢美恵　藤田玲子

本城英明　渡邊隆男

○西脇市・黒田庄町（3名）

大石佐和子　笹倉郁子　広瀬真澄

○特別招待（1名）

石井正紀（秋山中将研究家）

会　計　報　告　書

（平成17年７月１日～平成18年６月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・谷口　浩章
鶴田ゆき子

（単位：円）

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	2,057,781	郵便貯金 741,251円 定額貯金 800,000円 振替貯金 516,530円	出版費	810,492	『山ざる』36号
			通信・印刷費	119,578	総会・役員会案内等
年会費収入	412,000	延 185名	総会費	509,411	総会関係支払
総会費収入	449,000	65名	会議費	240,183	役員会等
役員会費収入	147,000	延 49名	支払手数料	13,135	振替手数料 12,820円 送金手数料 315円
編集会費収入	0				
寄付金	190,150	延 41名	消耗・備品費	75,782	事務用品等
広告料収入	700,000	延 53名	繰越金	2,187,388	郵便貯金 1,387,388円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円
その他	38	利子等			
合計	3,955,969		合計	3,955,969	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成18年７月28日

会計監査　荻野　武　足立和巳

祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる六名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、二名の方から回答頂きましたのでご紹介します。（生年月日順）

①生年月日
②ご出身地
③上京の年月日
④上京の動機
⑤これまでに最も印象に残ることは
⑥祝寿を迎えられてひと言

〈生まれた年＝大正15年・丙寅・1926年〉暮れも押し迫った12月25日午前1時25分、大正天皇が48歳で亡くなり、ただちに摂政宮裕仁（ひろひと）親王が皇位を継承して「昭和時代」に入った。昭和元年生まれは7日間しかなく希少的存在になった。関東大震災後の東京では洋風化が進み、女性の洋装や文化生活への夢が庶民の間に広まった。ハンドバック、パラソル、アッパッパ、断髪などが流行した。

〈満20歳の年＝昭和21年〉戦後の激しいインフレを抑制するため旧円の預貯金を封鎖し、期限つきで新円への切替えを行ったため、旧円は紙くず同然になり、勤労者給与も五百円限りの耐乏生活を強いられた。食糧飢饉が一段と深刻になり、食べ盛りの二十歳は空腹を抱えながら、仕事や学業に勤しんだ。

〈還暦60歳の年＝昭和61年〉「世界一の金持ち国」となった国際都市・東京のオフィスビル需要が活発化、住宅地にも及んで地価が前年比五〇％以上も急騰し、バブル経済へと向かった。

〈古稀70歳の年＝平成8年〉バブル崩壊による不況が長引き、政府は不良債権処理のため六八五〇億円の財政支出で難局をしのいだ。インターネットが普及、ホームページが続々開かれ情報新時代の到来となった。以後、続々とデジタル化が進んだ。

広沢　克江様

①大正15年7月1日
②柏原町（生まれは東京）
③昭和18年4月、進学のため
④昭和26年10月、結婚のため

⑤社会人となって数年間の大阪に在住の頃、休日になると両親の待つ丹波に帰りました。ある秋の夜、柏原駅に着き、ホームを歩いていると、駅構内いっぱいに松茸の香りが漂っていました。発送を待つ松茸が山積みされていたのです。その時、なぜか大変幸せな気持になり、今も蒸気機関車の福知山線と共に懐かしく感銘深い思い出になっています。

⑥私たちの世代は戦争に翻弄されて生きてきました。こんなことが二度と繰り返されぬ、平和な日本でありつづけるよう祈っております。

若森　敏郎様

①大正15年10月6日
②上久下村北太田
③昭和21年4月
④日本国有鉄道教習所専門部入所のため
⑤私は昭和32年以来、水力発電所の建設・保安に、また昭和48年以降はＯＤＡの仕事で多数の発展途上国のインフラ整備の仕事に従事して参りまして、設備竣工の慶びを体験してきましたが、何と言っても南太平洋のど真中バヌアツ共和国での電気・ガス・水道・トイレなしの2週間の生活体験が最も印象に残っています。言葉は通じなくとも現地の人々との温かい心の交流、生活のための知恵は私に数々の示唆を与えてくれました。
⑥お蔭様にて、停年知らずで技術士として、エネルギー全般の仕事をこなせることを有難く思っております。平成18年1月には共著ながら、『エネルギー・リサイクルによる経費削減手ほどき帖』を日刊工業新聞社から発行しました。また、趣味の古典尺八は弟子2人を師範、1人を准師範にしました。2人の新人を准師範試験に合格させるまであと5、6年かかりますが、元気でがんばります。

懇親会スナップ

丹波の和田と横浜の和田

―縁は異なもの、奇なもの―

梅田　重二（山南町）

私は、昭和五年（一九三〇年）氷上郡和田村和田に生まれました。現在は、横浜市戸塚区に居住し、区内の和田地区「和田町内会」の一員であります。丹波には生まれて二十年、横浜にはもう四十年近く居住しております。丹波の和田を出て、神戸・大阪・名古屋・東京と渡り歩き、横浜の和田に落ち着きました。

当地に引越しして参りまして、近隣に「親縁寺」があり、歴史の有る名刹で、お付き合いのあるこの地区の方々の多くが、この寺の檀家であります。私の生家は、和田の「親縁寺」の檀家で、戦中から戦後にかけて、一時期、私の亡父が檀家総代を務めておりました。

丹波の「親縁寺」は浄土宗で、横浜は残念ながら時宗であります。

何年も前から、墓地を求める必要に迫られておりました。養母の御成仏の時期が近づき、浄土宗の寺院墓地を探しておりました。折しも、近隣に「西立寺」があり、風評も良好でありました。平成八年、紹介者を得て、入檀の上、墓地の購入を致しました。入檀料三十万円、墓地使用権百五十万円、墓地石柵料百万円、合計で二百八十万円を必要といたしました。

その際、生家が丹波の浄土宗、親縁寺の檀家である旨申し上げましたところ、和尚さんは驚愕されて「御住職は須田さんでしょう」と申されました。須田御住職とは、鎌倉の光明寺で修行された同期の桜で、二人は、般若湯を愛される無二の親友とのことです。某日、親縁寺と西立寺の檀家の有志が京都を観光され、丹波にも「親縁寺があるよ」と、同じ「和田」という縁で丹波まで足を伸ばされました。そんなこんな因縁で、お寺さんとは懇意にしております。

平成十年に養母が亡くなり、納骨と御戒名が必要となりました。和尚さんは、両親の戒名を見せて欲しいとのことで、持参致しました。一見されて「素晴らしい戒名です。このような戒名を付けるのには、私と貴方とは、未だお付合いが浅い。同様程度の御戒名をお付けするのには、最低でも〇〇万円戴かねばならぬ」とのご託宣でした。これも供養と、御戒名も、墓石も、御仏壇も、全て和尚さんのご推薦に従いました。

昭和五十年、長女が小田原在の旧家の次男に嫁ぎました。婚家の菩提寺も又、浄土宗の西念寺であり、根檀従の一翼を担っておられます。御住職は代々、光明寺の執事（重役）の寺格で、先代は執事長でありました。先代とお話しする機会があり、丹波和田の親縁寺も、横浜の西立寺についても、詳しく御存知でありました。

縁は異なもの、奇なもの。私は田舎者故に、生家の宗教や先祖の教えを大切にして参りました。喜寿を過ぎ、もうそろそろお迎えも近いと存じます。お陰様で、お墓は高台の一等地であり、日照も抜群で、狭いながら未来永劫の住まいを得て、因果応報、一族の者々、安らかに眠らせて頂くことが出来ます。（合掌）

丹波にまつわる人の縁

谷口　捷（氷上町）

最近は目の調子が良くないので、医者からコンピュータを用いることを控えるようにと言われている。本年は遠慮しようと思いながらも、毎年のごとく拙文を載せていただき、「山ざる」誌を汚している。自分自身も、後から読んで、思いを満足に書けていないこと、表現力の貧しさに恥入っている次第である。しかし、先日も私の育った旧幸世村で、すばらしい絵を描いておられる臼井邦昭氏からも、思いがけず便りを頂き「山ざる拝読」という励ましを頂戴した。今回も頑張ってみようと思う。

私の友人で、父上が六十五歳から全国を三万キロ行脚された話『ひとり歩いた白い道』（近代文芸社）の編者であり、いつもその名文に感心している蓮井敏君にご御教示してもらうと、「出来るだけやさしい言葉と短い文で書くことだよ」と言われる。それがまた非常に難しい。最近読んだ数学者藤原正彦著『国家の品格』（新潮新書）には久しぶりに心地良く、共鳴させて頂いた。そしてそこに出てくる言葉〝情緒〟から思いだして、大学出たての頃に愛読したやはり大数学者で文化勲章受賞者岡潔先生の書籍を再び読みながら、世の中のことを私なりに考え、日本工営㈱前社長和田勝義氏主催の「開発と環境」研究会で愚見を述べたりしている。本年初頭に行った国際フォーラムでの〝アインシュタイン日本見聞録〟展で、博士の激賞されている日本人、日本文化が、現在のグローバル化の中で少なくとも丹波において維持継続されることを念じながら書いている。

◆分水嶺縦走

幼少期より周囲の山々を眺め、何時かは頂上を歩いてみたいと思っていながらほとんど諦めていた。しかし東大駒場の近くに㈱ユニックという会社があり、訪れるといつも歓迎して頂けるので、昨年十月に寄ってみた。そして思いがけず実現することとなった。

この会社は、関西電力㈱が黒部ダムを造った時に、

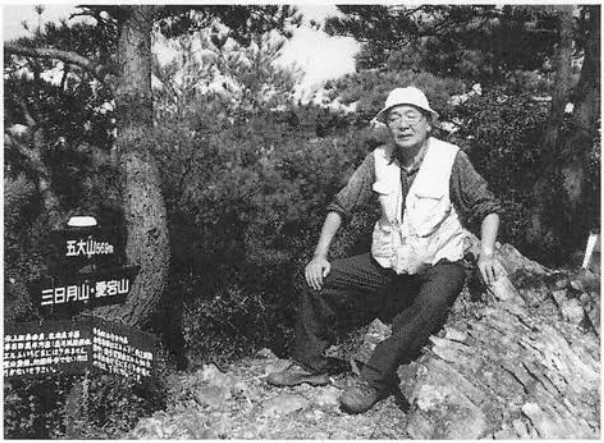
技術陣のトップでもあられた故高野稔工学博士が中心となり設立された。亡くなられて後に黒部に行き、昭和三十八年完工式の写真で、中心にお姿を拝見した。当時、日本ではコンピュータもまだ普及しておらず、民間では最も進んでいた旧小野田セメント㈱に、技術の人達が利用しに来られていた。計算機部門の社員であった私も、後に世界銀行に移られた東大応用数学出身の小川亜夫氏と共にお手伝いをした縁で、設立発起人の末席を汚した。私以外は東大工学部出身の技術者六人であり、その後の人生において、良きにつけ悪しきにつけ大きな比重を占めることとなった会社である。組織というものは優秀で個性もある人達だけでは順調に行くわけではなく、分裂をくり返し、誰とも組しなかった小生は逸早く辞めざるを得ぬようになる。数年を経て退社し、全員が納得する公平な会社はどうすれば良いかを模索することとなる。中立であると言うのは簡単であるが、孤独に耐え、両方からの攻撃にも負けない強さがなければならない。

現在の社長は長谷川賢一君という私より一まわりも若い工学博士であり、京大時代には山岳の経験者である。縦走の話をすると「丹波には西田君の親父さんが亡くなられた時に一度行ったきりだが、一人では危険です。今度の連休に同伴しましょう」と言ってくれた。何かを計画したり経験を話すと、ほとんどの人が無視するのは当然として、黙ってそう思ってくれていたら助かるのに、わざわざそばに来て批評し貶す厚顔な人がいる中で、自分の利害得失を考えず協力してくれる人も現れるから不思議である。彼はまさしく後者の人である。仕事が出来るのは当然として、人間性においてもこういう人でないと組織を維持していくのは難しいし、人がついて来ない。人間かくありたいと思う。

上記高野さんにも、後継者候補は身内にもおられたことだろうし、その人達にとっては非情とも言える決断は流石と思われる。なにはともあれ、彼のお陰で縦走中に間違って進もうとした時も、二万五千分ノ一の地図と磁石を片手に、「そちらではない」という彼の的確な指示で無事だったことを後で感謝することになる。なお、ここに名が出て来た西田君とは、私が退社して後に、どういう縁で入社したかは不明であるが、青垣町出身で、柏原高校卒業後に神戸大工学部を出た

技術者西田寿夫君である。彼の結婚式には、何の情報も与えられないままに、頭数合わせのつもりで気軽に出席して、旧幸世村の同級生田辺君と隣り合い、頭の中がパニックになった思い出がある。

前置きが長くなったが、十月九日念願の縦走開始である。昨晩は南油良の兄の家で泊り、朝六時には車で鴨内まで送ってもらい、旧前山村へ行く峠に向かって登り始める。峠からは縦走である。小学生の頃に登った五台山とか鷹取山そして〝独鈷の滝〟方面といった懐かしい名の案内を見ながら愛宕山、五大山へと向かう。途中でロープのお世話にならないと登るのが困難な所も二ヶ所あったが、関西地区の人が登山に来るのであろう、非常に良く整備されている。しかし、黒井城への水源確保の場所あたりから、三日月山への道がだんだん狭くなる。幼少の頃、母の実家旧前山村へ行く時にしばしば通った油良峠では、案内板に〝北油良〟方面となっている誤りを発見する。私にとっては愛敬だが、不案内の人にとっては唯一の頼りである。〝南油良〟と訂正されることを望む。そこからは、あまり人が通らないのか、杖が蜘蛛の巣避けになる。村の祭りの太鼓の音を下に聞きながら、大石内蔵助ゆかりの〝おりくさんの碑〟がある天王坂に到着する。ここからさらに道なき所を登ると、平坦な分水径となり、午後二時半過ぎに石生の城山に到着した。



最大の難関を過ぎた後で、疲労は最高潮

兄の迎えの車を待つ間、疲れきった身体に色々な思いが過去った。今迄、山登りのすばらしさを感じたことは多くある。山を登る意義は言葉では尽くせない。そのうえ今回は格別である。山頂から眺める土地はほとんど熟知し、それぞれに思い出がある。その眺めの

立体観と、思い出が相まった感動は一際であった。

◆信長の時代

丹波は昔、京都の公家や寺院の荘園であり、政争に敗れた人達の隠遁地で、高い文化や技術を持った人がいると言われていた。その後、どのような縁で織田藩として長く残ったのかと興味を持っていた。最近、小泉首相も感動されたという加藤廣著『信長の棺』を読んだ。教科書の歴史では知ることの出来ないことだが、勝者が自分を良く見せるために敗者を悪く言うのは世の常であり、歴史事実に対して色々な説が生じる所以とかが見事に描かれている。さらにこの時代丹波出身者が大変関わっていたことを知り私も感動した。特に「秀吉の父とか蜂須賀、前野は丹波者であり、美濃の斉藤家は丹波出身である」と知り、明智光秀による抵抗の激しかった丹波制圧後、斉藤利三（春日局の父）が丹波を治めるために興禅寺に来たことは偶然ではないだろうと想像しながら、面白く読ませて頂いた。

この三月には柏原高校の同窓会が北陸であり、友人に会いに行く途中で岐阜に寄る。〝明智の里〟では槙の木が一本ある光秀の母〝お牧の方〟の墓では、「丹波八上城」の文字を見たり、岐阜城では信長の館跡とか〝瞑想のこみち〟を歩いて、大きなリス達に歓迎されながら城に登って来た。光秀はその出所が明確でなく、謎多い人物とされているが、それは勝ち組による記述資料がないのは当然であり、抹消されたのであろう。出身地には少し推量されるものが残っているし、福知山に残っている神社、城を考えると少しは想像出来る。なお、本年ＮＨＫドラマ「功名が辻」では妻〝お槙〟となっているが、私の手許にある資料では〝熙子（ひろこ）〟である。これは「電車で来る人はめずらしい」と、地元の歴史を研究しているタクシーの運転手さんから入手したものである。歴史上で誤解される原因がこういう所にもある。

昨年秋、大学同級生の集まりが伊賀上野で行われた。同級生は色々な所の出身者達であり、小生の提案以来続いているのだが、幹事が交代で自分の出身地で企画するという楽しい集まりである。伊賀上野は忍者で有名だが、芭蕉の生誕地であり、荒木又右衛門の仇討場所〝鍵屋の辻〟もある。織田氏とは争いばかりで、忍

者嫌いの信長に焼き尽くされ壊滅させられている。そして家康の時代には、伊予国今治から移った津藩藤堂氏の支城として、高虎がりっぱな城を築いている。なお、高虎は丹波篠山城の修築も行っている。

同窓会に向かう途中で、私が大学に入って間もなく親友となったが、早く亡くなった津出身の故並河亮介君のことを思い出していた。いわゆる秀才タイプではないが、非常に頭の良い将来は独創的な仕事をするのではないかと楽しみにしていた友人である。旧家の出で、江戸時代からの学者、医者の家系であり、明治天皇の乳母をされた方もおられたと聞いている。彼との強烈な最初の思い出がある。入学してすぐの試験の前日、「これから試験は四年間行うが遊郭はもうすぐ廃止になる。どちらが大切か」と見学に行ったことがある。もちろんお金もなく上ることは出来なかったが、その街を歩いた印象は一生忘れることは出来ない。聞くと見るのは大違いで、小説等で描かれているものに感じたのと比較にならないもので、慄然としたのを思い出す。頭の中だけで考えるのでなく、自分の目で確かめることの大切さを意識した最初である。その彼が何の説明もなく「お前の柏原と自分の津とは深い縁があるようだ」と言ったことがある。その時は彼の家だから、古文書でもあるのだろう程度に聞き流し忘れていた。津に寄ってみるとそれが何だったのか分かるかもしれないと思い、帰りに実行しようと決心していた。津城は藤堂家十二代の前に、信長が伊勢攻めの拠点とするため、弟の信包（かね）に築かせたものであった。後に信包は、秀吉から柏原〝前の織田家〟初代藩主にされている。そして織田家菩提寺である柏原の成徳禅寺にはお墓がある。丹波で人気のあったといわれる明智の後を考えると、なんとなく、施政者の考えが推量される。

このように藩主が移動することにより、多くの家臣それに縁者を伴って来たと思われる。並河君の言おうとしたことがこれだったのかどうか、今は確かめるすべがない。私が西条出身の妻と結婚した時、義父から「それほど交流があったとは考えられないので、どうしてか分からないのだが、愛媛で丹波と親戚があるという人が結構いるのは不思議だ」と聞いたことがある。これもこの時代に起因するのかと想像したりしている。

空白とされている歴史の検証

西畑健一（春日町）

歴史学において、文献資料は時代を溯れば溯るほどその数は少なくなり、またその文献の殆どが勝者の記録として伝えられているもので、その土地に都合の悪い資料は意図的に破棄され、焼却されたりすることもあって、どうしても残りにくい。

つまり記録に留める価直がないと判断されているその資料とは、勝者にとって不都合な文書であり、記録として取り上げたくない事実のほうが、取り上げられた事実よりも多くあったということにもなる。

丹波という地域の主要な文献に現れる歴史を見れば、古く「古事記」に、氷上刀自など天皇家に近い関係の豪族が現れるがすぐ消える。「太平記」に、丹波神池寺僧兵の記事が見え、足利尊氏との六波羅攻めに加わっていることがわかる。戦国期、丹波は明智光秀の領地となり、「信長公記」には八上城攻めの記事が見えるが、氷上城・黒井城・三尾城攻防が散見されるだけであり、勝者の歴史に残されている史料は数少ない。

戦前の皇国史観的な絶対主義への反動から、戦後の歴史学は一時、唯物論による教条的な歴史理論が唱えられたこともあったが、着実な実証的な地方史研究の積み重ねの結果、できるだけ等身大の歴史探求に踏み出し、寺などに伝わる在地の文書や百姓文書とよばれる村方の記録など地方文書（じかたもんじょ）の悉皆調査や中世・近代史にも発掘による実証的な歴史考古学が加わり、地域史としての全体像を把握することにつとめてきた。

丹波は京に近いこともあり、まだまだ中央と関連する多くの史実が埋もれていることが考えられる。たとえば氷上達身寺の丹波仏師の記録など。近世史料においても、資料が、全国的な視野で考察する必要があることもわかってきている。

確定された数少ない事実をつなぎとめて、時間の流れを組み立て、出来得る限り正しく捉え直してゆくことがこれからの歴史学であるといえよう。丹波史の将来は、これからの若い研究者による地道な史料発掘と、すぐれた歴史感覚による壮大な物語的展開に期待したい。

「上久下村」で育った「へちま会」

細川倫夫（山南町）

丹波大山を過ぎてしばらく下ると車窓から川代渓谷の急流が目に入る。以前はもっと水が澄んでいた……、と思っているうちに二つのトンネルをくぐる、列車は山すそを離れ阿草の鉄橋を渡ると左右が広がる直線状の下り坂にかかり家並みが見えてくる。「ヤッと戻ってきた」とホッとし網棚の荷物を手元に置いて我が故郷「上久下村」の下滝駅で車輪が停まるのを今かと待つ。蒸気機関車のダイナミックな振動やトンネル内で窓の隙間から入ってくるあの特有の硫黄っぽいニオイとススに悩まされることは無くなったが、四十五年前横浜へ出て来てから故郷へ帰る度に見る風景や下車直前の仕草は今でも変わらない。

丹波市東端の旧氷上郡上久下村は両側に山が迫りその中央を加古川支流の篠山川（他の呼び方もあったと思う）が流れ、川に平行して道路と線路が走る東西に長細い地形で両側の山に物干し竿を渡せば洗濯物が干せる、と比喩されるほどである。川代堤の桜、渓流に架かる二つの吊橋、掘っ立て小屋のような旧水力発電所がある小さな村は町となり郡は市になったが、豊かな自然と人情厚い土地柄が変わらない「上久下村」が私の故郷である。

昭和二十年の春、最後の国民学校一年生となりその夏に終戦となった。疎開の同級生が数人いたことは覚えているがいつの間にかそれぞれどこかへ戻って行った。弁当を持って来られず昼になるとそっと教室を出ようとする子に自分のものを少し分けてあげる……、そんな時代であった。同級生の数は多少のプラ・マイはあるが中学を卒業するまで一学年五十人のままで、ただ一度小学四年？の頃の短期間を除いてはクラス替えがなかった。なぜか男子は女子の半数の十六名であった。そして昭和二十六年の春そっくりそのまま五十人は仲良く上久下中学校生となった。

昭和56年５月「へちま会」、前列中央と昭和38年当時の大久田先生（左上）

多感な中学時代の学年担任は大久田孝先生という多少型ヤブリなそれが故に人間的な魅力がある先生だった（平成十五年十一月に亡くなられた）。旧制柏原中学第四〇回生で昭和十六年に首席で卒業されたと聞く。終戦後のごたごたした世の中では定職を得るのがままならなかったが何とか教職に就かれた。顔相は縦長長方形で色は少し青白く頭髪は少し縮れ気味だったので既に上級生が「へちま」先生とあだ名で呼んでいた。

若くて元気で体格が大きく、そして大酒豪で短気な独身先生には数学と英語を教わったが多くの試練も味わった。今では大問題となるような往復ビンタを何回か頂戴し、女生徒への××ハラ発言も男子がいないところであったらしい。酒にまつわる思い出として、先生が中学卒業直後の私達を薄暗くなった川代公園へ引き連れて行き、日本酒を飲まされ酒談議を聞かされたうえ軍歌?を合唱した。またT君は高校入学の挨拶に訪ねたらコップ酒を勧められたうえ、自転車で川代へ行きフラフラしながらボートを漕がされ先生に「酒に酔うとこうなるのか?」と真面目に尋ねたことがあったという。年が離れた兄貴分タイプだったのも先生の

魅力であった。

「へちま会」は中学卒業時に名付けた五十人の同級会である（残念なことに三名が亡くなっている）。当時はすぐ就職して村を離れる同級生の方が多く、皆んな散りじりになっても十年経ったらまた一緒に集まろう…、と固い絆で結成し二年程はガリ版刷りの会報を出していたがそれも長続きせず、会としての活動は自然消滅してしまった。その後は少人数で時折集まったりしていた。

歳月が経ち四十歳を過ぎた昭和五十六年に地元在住者が全員に声をかけ五月に柏原「喜作」で二十七年振りの「へちま会」を催し大久田先生を交えて笑顔と涙で二十八人が再会した。

当初は三年毎に開催していたが、三年も待てなくなり二年毎とし現在も続いている。場所は下滝松原楼、篠山、宝塚など毎回変え昨年は大阪、三年前は氷上やすらぎ、五年前の春は関東在住の五名が幹事となり浅草や隅田川屋形船を楽しんだ。会えば全員がアッという間に童心に戻ることが出来る「へちま会」には毎回三十名ほどが出席し開催している。六割の高出席率で定期的に開催している同級会は他には少ないのでは……。亡くなられた大久田先生も喜んでくださっていると思う、合掌。

もうひとつ、男子有志の「大峰山修行」がある（申し訳ないが小生は一度も参加していない）。昭和六十三年に地元のM・N・F君がコアとなり毎年一回五～十名近くが参加し、既に二十回も登った人がいる一方で年齢相応に足腰が弱まり参加を諦めた人もいるとのことである。数年前から女性達に稲村岳修行を勧めているが、この男女共同参画修行は実現していない由である。

この素晴らしい仲間意識のルーツは「上久下村」で生まれ大久田先生の「へちま」学級で育った。古希近くになっても皆んなと出会った瞬間に童心に戻れる。来年も元気で多くの「へちま」仲間と会うのが楽しみである。

「平和への願い」切実に

小山　とし子（氷上町）

生まれ育った氷上を後にして、もう半世紀近くになります。上京後はごたぶんに漏れず、子育てと仕事に追われて、故郷をかえりみる暇さえありませんでしたが、ここへ来てようやく年に一、二度の帰丹を楽しめるようになりました。町のたたずまいは、五十年の間に大きく変わり、驚かされることばかりですが、幾重にも重なる山々は、昔のままの姿で迎えてくれます。

ただ、夏の佐治川や葛野川の流れは、川床まで雑草におおわれて、子どもの頃に水遊びをした川原の面影はなく、なにか痛々しい感じに襲われます。また、夕方になるとたくさんのスズメたちがねぐらにしていた、まわりの竹やぶもすっかり姿を消して、にぎやかだった、あのさえずりの合唱も聞くこともできなくなっています。

私の生家は、佐治川のほとりにありましたので、水遊び、魚すくい、セリやヨモギ摘みなど、いろいろな遊びに事欠きませんでしたが、なかでも蛍の飛び交う頃は、子どもたちにとって、ことに楽しい季節でした。蛍を追っかけ土手を走り回って、その成果を友達と競ったものでした。採った蛍は紙袋にだいじに入れて家に持ち帰り、蚊帳の中に放して、寝ながらの蛍鑑賞を楽しみました。私の世代の丹波っ子なら、どなたもお持ちの初夏の思い出ではないでしょうか。

こんなのどかな田舎町にも、いくつか戦争にまつわる恐ろしい思い出があります。それは大東亜戦争（太平洋戦争）も末期のことで、夏の昼下がり、あたりの静寂を突然引き裂いて、戦闘機らしき飛行機が超低空で町の上を何回も旋回し、いまにも機銃掃射が始まるのではないかという、恐怖におののいたことでした。あとで大人たちの話を聞きますと、どうやら、当時成松国民学校（現成松小学校）の東隣にあった「郡是製糸」の工場を偵察に来た敵機の群れだったそうで、こどもの私は、生きた心地もなく、戸のすきまから空を見上げるばかりでした。

もうひとつは、寝苦しい或る夜中のこと、まわりの

騒々しさに目をさまして、みんなが口々に騒ぎながら指差したり、手をかざしたりして見ている、東南の方向を見たときでした。空は真っ赤に染まって、遠景の山々をまるで影絵のようにくっきりと浮かび上がらせています。おそらく、阪神一帯の空爆の夜だったのでしょう。あまりにも強烈な印象だったので、どう表現していいやら六十年以上たった今も、話そうとしても適当な言葉がないくらい暗くつらい思い出の一つになっています。

ほどなく、わが国の無条件降伏で戦火もやみ、田舎町にも静かさが戻ってきました。

そのとき私は国民学校初等科の五年生（いまの小学校五年生）でした。忘れもしません、終戦の翌日はウサギの飼育当番で学校に行くために、県道に出て友達の来るのを待っていました。あたりは物音ひとつなく、しんと静まり返って人っ子一人通りません。雲ひとつない真っ青な中天から太陽の光だけが、私の上に燦々と降り注いでいるなかに、一人取り残されたような不思議な怖さを感じたことでした。あの不気味さはいったいなんだったのだろうと、思い出すたびに心にひっかかります。

その後六十一年。私たちの国は戦争から遠ざかり、いろいろな問題はあるとしても、経済的には豊かになりました。故郷も山々の姿のほかは大きく変わり、さらに変貌を遂げようとしています。巨大なショッピングセンターが出現した反面、味わいのあった町並みは、あの終戦のときの町の静けさと同じに、なにかパノラマのような死の町に化したのではないかと思えるほど、にぎわいを失ってしまいました。

このなかでも、必死の町おこし、村おこしに取り組

んでおいでの方々も少なくないと聞いていますが、その方々をはじめ、市民のひとりひとりが力を結集して、どうか美しい故郷、人情豊かな故郷の創生を実現していただきますよう祈ってやみません。

世界中ではまだ戦火に追われている多くの人たちが、いつ巡ってくるとも知れない平和を求めて、悲痛な叫びをあげています。そんな報道に接するたび、どうすることもできない自分の無力が悔やまれますが、せめて毎日の暮らしの中に、平和への祈りを欠かさずつとめたいと思います。

「平和ほど、尊きものはない。
平和ほど、幸福なものはない。
平和こそ、人類の進むべき、
根本の第一歩であらねばならない」

（池田大作著『人間革命』）

という言葉を、しっかり胸に秘めて、たとえ非力でも一人一人の祈り実現するために、たゆまぬ努力を惜しまなければ、争いの火種をいくぶんでも減らすことができるのではないでしょうか。

こんなことを切実に思っているきょうこの頃です。

氷上の四季（小学生時代・昭和21～27年）

大塚秀弍（氷上町）

私が生まれた市辺から生郷小学校までは二㎞余だった。道路の両側はほとんど田畑で、少し奥に低い山が迫っていた。市辺を出る付近に瓦屋が二軒あり、学校に近い横田に文房具屋とパン屋がそれぞれ一軒あり、店らしいのは、その二軒だけだったように思う。

男女別の集団登校で、男は近くの神社に集まり、参道で鬼ごっこをして登校時間まで過ごした。目隠しをした鬼が誰かを捕まえるのであるが、時には鬼が探している間に、みんなで登校を始めて、鬼を置き去りにすることもあった。勿論、近くで待つのだが、置き去りにされた下級生の鬼が泣き騒ぐのが面白かったので

ある。

通学路で見かけるのは馬に引かれた荷車で、主に材木を運んでいたように思う。登校の時刻は、石生や柏原に向かっており、下校時刻は反対に成松や幸世の方角に向かっており、僕等の登下校と方向が同じだった。僕等は荷車の後ろにぶら下がり、少しでも楽をしようと試みるのだが、たいていは馬主に見つかり怒鳴られる。それでも、スリルを求めて懲りずに試み、上手に隠れて乗った。

冬は荷馬車の上で一斗缶で焚き火をしていたが、馬車主に誘われ一緒に焚き火を囲むこともあった。あの当時の冬は寒く、毎日のように雪やみぞれが落ちていたように思う。また下校途中、瓦焼きの大きな窯の焚き口で一休みして暖をとった。朝、荷台に猪を縛って走る自転車を見かけるのも、この季節だった。

冬のご馳走は、赤味噌で大根と一緒に煮るボタン鍋だった。ペリッとした猪肉の歯ごたえは忘れられない。また、山鳥や雉を持ち込む猟師がいて、僕が毛をむしり、父が捌いて鍋にして食べた。餡が包まれた餅と大きなかんなで削った「かき餅」が冬のおやつで、夕食後、父と二人で箱火鉢の引き出しから取り出した「かき餅」に砂糖醤油に付けて焼きながら食べるのが楽しみだった。

春は徒歩通学が一番楽な季節で、校庭は桜の花が美しかった。それでも遠足は鐘ヶ淵の花見だった。家では、裏のそう広くもない畑の農作業が忙しい季節だった。野菜や花作りが好きな父は作業服の上に白衣を着て診察していたように思う。近所の人が摘んできた茶を庭で蒸しお茶作りもした。父と家の屋根に登り、樋に巣くった雀の巣を取り、周辺の水田を眺めるのも楽しかった。

田植えが始まる頃、学校は休みになり、僕ら非農家のこどもは農家に田植えの手伝いに行った。カレーライスといくらかの小遣いが楽しみだったように思う。学校でも苗代の害虫を捕り、農協に買い取ってもらい学校図書館の図書の購入に当てていたように思う。夜になると、毎日のように蛍狩りに行き、蚊帳の中に放して楽しんだ。

夏は毎日のように激しい雷だった。下校途中、夕立に遭うと生きた気持ちがしなかった。ようやく家に着

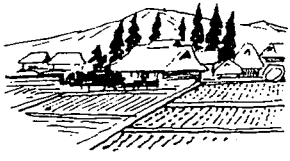
くと、座敷に寝ころび、凄い雷鳴を聞きながら、とぎれなく光る稲妻を眺めた。そんな時、たいてい長い停電が続いた。それでも夏は楽しかった。下校途中で畑のトマトを失敬したり、水路のザリガニをつり上げたり、遊びながら下校した。

午後になると、佐治川へ水泳に行った。隣村との間にあった吊り橋からのダイビングは、度胸試しとして上級生に強いられたが、事故になった記憶はない。近所の川で鰻を釣ったり、魚を捕ったり、遊びに退屈することはなかった。捕ってきた鰻は父か、夏休みで帰郷していた姉が捌き、蒲焼きにして食べた。

暑い午後、家で一番涼しい座敷で父と母と三人で昼寝をしていると、アイスキャンデイ売りの鐘と売り声が聞こえてきて、僕が買いに走った。今のように冷凍保存技術がなかったので、今にも棒から溶け落ちそうになっていた。井戸に吊した西瓜の味とともに忘れられない。夏のご馳走は畑でとれる野菜とともに、佐知川でとれた小魚の煮物であった。漁師が持ち込んだ小魚を山椒の実とお茶の葉で母がぐつぐつ煮込んだ。骨まで柔らかく美味しかった。夜は道に出した床几で星空の下、将棋を指して遊んだ。

秋は台風の季節で、丁度色づき始めた柿の実が庭中に散らばった。嵐の中、電柱にしがみつきながら面白がって登校したこともあった。家では、何度か家の周りの土塀が倒れた。

秋の遊びは山だ。山栗をとり、渋皮をちゃんと取らず生で食べると、口の周りが赤くかぶれ、かゆかった。休日、朝早く山に行くと松茸やシメジがたくさん採れ、焼き松茸、すき焼き、余りは佃煮にして食べた。時には虫食いの松茸で食中毒になったこともあった。楽しい想い出はつきないが、紙面の都合で一端、筆を置くことにする。



進んでいた丹波の民主主義制度教育

仲　正（山南町）

丹波（現山南町和田）に私の家族が東京から疎開してきたのは終戦より約半年前の昭和二〇年春（私が満3歳になったばかりの時）であった。昭和三三年一月の高等学校一年生の三学期に東京の都立高校に柏原高校から転校するまでの一三年間の記憶は不思議なことに、六四歳の今の私の記憶の中でもより鮮明である。

日本が民主主義国であることを疑う人は今では誰もいないであろう。しかし、民主主義制度について明確な教育経験を持つ人は、現在の日本国民の中でも多くはないのではないかと思われる。第二次世界大戦戦後、世界における共産主義体制の広がりを警戒する米国は、その占領下の日本に個人の自由と人権の保障を原則とする民主主義制度と民主主義制度と表裏一体の個人の財産所有と自由な経済活動を保障する自由市場経済制度の採用を義務付けた。私が小学校に入学した昭和二三年（一九四八年）から昭和三〇年代前半までは日本の義務教育を中心にした教育の中では民主主義制度の浸透に重点が置かれた時期であったようである。

◇

昭和三〇年代前半までに、氷上郡（兵庫県）においては、小学校で生徒自治会の基本的なルールを教育され、中学校では生徒の完全自治による生徒会が各学校で組織され、立候補を基本とする役員選挙、討議と多数決による意思決定のルールを生徒が実践し、生徒の権利と義務と引き換えに、総会等の討議への学校や教師の直接参加や介入は禁止されるのが常識となっていた。

柏原高校の生徒総会では、校長以下の教師が発言権のないオブザーバーとして出席する前で、数人の学生が発言を求め、特定教師の体罰を厳しく糾弾し、欠席しているその教師に代わり校長が矢面に立たされている光景が今でも思い出される。

小中学生を対象に、学校外では子供会が組織され、ここでも子供の自治的な活動が行われていた。また中

学校では定期的に弁論大会が開催され、私も下手ながら参加したことを思い出す。

より優れて進んだ教育を期待して柏原高校から東京の都立高校に転校した私は、東京の学校のシステムの整備や教育内容が田舎の柏原高校より前近代的で遅れていることに驚かされた。特に驚いたのは、丹波で当時は既に軌道に乗っていた生徒の自治会活動が軌道に乗っておらず、私が転校した都立高校では未だ生徒会規則もなく、生徒会はあるものの生徒総会も開かれたことがない有様であった。当時の氷上郡（恐らく兵庫県）の民主主義制度教育は東京より各段に進んでいたのである。

◇

余談ではあるが、柏原高校の学力の教育水準も東京の学校に引けを取らなかったと推測される。当時、疎開のためか柏原高校には優秀な教師が集まっていたようであり、私の都立高校の同級生は、私が教わっていた柏原高校の国語の先生が東京で出版した参考書を持っていた。私はその先生が参考書を出版していたことすら知らなかったが。たしか、柏原高校には当時、私は教わったことがなかったが、古文研究者として著名な先生がおられると聞いたことを思い出すし、私が教わった先生方の中には、ユニークな人柄が多く、授業時間の何分の一かは時事放談に割かれ、面白くかつ知識の広がりを感じたと記憶している。

◇

転校間もなく、高校二年生になった私は偶然推薦されて選挙で生徒会副会長に選ばれ、生徒会規則整備と定期的な生徒総会の開催のレールを引き、生徒会役員を後輩に委ねた高校三年生の時には、総会議長を頼まれ、生徒の暴発を恐れる学校を安心させる形で第一回の定時生徒総会を実現させることが出来た。これは丹波での経験があったから出来たことである。ちなみに、生徒会規則づくりには当時の柏原高校の生徒会規則を大いに参考にさせてもらった。

当時、この都立高校では柔道六段の体育教師が生徒部長として、生徒の非行取締りを担当していたが、学校側は、生徒会や生徒総会が学校や教師に反発する手段となることを極端に恐れていた。また生徒会の役員たちも小学校や中学校における自治会活動経験が非常

に乏しく、生徒自治活動よりも政治的活動に興味を持つものが少なくなかった。私と同時に役員となった当時の生徒会長は、生徒の自治会活動よりも日教組の活動支援に大きな関心を持っていた。

こうした状況は、他の東京の高等学校でも似たり寄ったりであった。これは、戦前の教育制度（特に私学制度）を引き摺り、東京都が義務教育における民主主義制度教育を怠った結果であると推測される。しかし、昭和三〇年代後半からの日本経済の急速な成長の中で、知識教育が重視され、義務教育における民主主義制度教育が拡充され発展することは、東京においてはそれ以後もなかったと思われる。はたして丹波（兵庫県）においても昭和三〇年代後半からの事情は同じだったであろうか。

◇

私は日本企業へ就職後に、米国の多国籍企業専門コンサルタント会社に転職し、その後独立し、三〇年以上の間、外国の政府制度及び政策や産業を専門とするコンサルタントをしてきた。その間、欧米先進諸国や発展途上諸国の政府制度を調査研究する機会も少なくなかった。旧ソ連諸国や発展途上諸国の民主化及び市場経済化の動きも見てきたが、民主主義制度や市場経済制度は、国民の多くが経験も知識も乏しい状態で、いきなり与えられても機能したり発展するものではないことを痛感させられた。民主主義制度の基本原則の実現を目標に制度を常に改善し、適切に国民（特に次の世を担う子供や若い世代）を教育することを怠れば、〝与えられた〟民主主義制度は、その前の非民主主義制度に容易に逆戻りしてしまう例がほとんどである。これは自由市場経済制度についても当て嵌まるようだ。

一般国民の歴史的努力の結果として〝生み出された〟民主主義制度や自由市場経済制度には、行政、立法、司法制度の中に、制度の改善システムや制度についての教育システムがビルトイン（内蔵）され、年月を経るに従う制度の改善と進化の継続が期待される（その典型が米国）。しかし、敗戦や経済破綻に対する経済援助と引き換えの国際的圧力の下で新政権が採用した民主主義制度や自由市場経済制度は、一般国民にとっては突然〝与えられた〟民主主義制度や自由市場経済制度であり、当然のことながら、制度の改善シス

テムや制度についての教育システムはビルトインされておらず、年月を経るに従う制度の劣化と退歩の危険を伴っている。

◇

ちなみに、現在では世界で民主主義制度を採用している国は多いが、一般国民が〝生み出した〟民主主義制度を持つ国は米国、英国及びフランス等で少数といえる。はたして、第二次世界大戦後六一年を経た今日、敗戦で〝与えられた〟日本の民主主義制度及び自由市場経済制度は、米国を典型とする一般国民の歴史的努力の結果として〝生み出された〟制度に追い付き、その改善システムや教育システムをビルトインするまでに成長出来たであろうか。

いずれにしても、最も長い民主主義制度の歴史を持ち、且つその完成度が最も高いと見做される米国を含め、どの国においても、民主主義制度及び民主主義制度と表裏一体の自由市場経済制度はエンドレスの改善及び制度教育を必要としており、その完成は永久にないものであることが覚悟されるべきであろう。

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますよう願い上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、〝丹波のきずな〟の強さを思います。

（山ざる編集部）

丹波の生鮮市場盛衰史

徳田　八郎衛
（柏原町）

最近、医者不足で救急病院としての対応が難しくなってきた柏原病院ですが、かつては老舗の日赤を凌ぐ、郡内一の優良病院でした。設備も人材も……そこへ転属してくる同年代の医師に、「丹波での勤務、ご苦労様です。一番お困りなのは何でしょうか」と尋ねたことがあります。一番多い指摘が、図書館がないという非文化的環境でした。無理もありません。織田藩PRの歴史博物館と田捨女の像さえさえあれば満足している町ですから……。「せっかく野菜の産地に住みながら、市場がないために地元で採れた青物が一旦、阪神間の市場へ出荷され、そこからデモドリしてきて店頭に並ぶものだから鮮度も落ちるし値段も上がる。これも悲しいことですね」

実は、青物市場欠如は歴史的な特性なのです。石生のように舗装道路や銀行のある、一見、市街地のような集落でも国道に面した家屋の背後は畑だから、どの家にも自家菜園がありました。八百屋があっても、扱うのは主に果物や他の地域で採れる野菜でした。柏原ぐらいの町になると菜園のない家も転勤者も多いから何でも揃う八百屋があったけれど、青物は契約農家からの納入で賄えるから市場の必要はありませんでした。今では状況が変化し、柏原バイパス沿いに（正しくは、バイパス開通以前から）丹波市立の地方卸売市場があり、地元で早朝収穫された青物を主に扱っています。

この会話は四十歳ぐらいの時ですが、六十代になってから橋本竜太郎前総理に会ったのが縁で、またもや流通についての好奇心が騒ぎ出します。「私は兵庫県人です」「徳田さん、恥かしい話ですが、私は通産相になり、そして阪神大震災を体験するまで、兵庫県が流通において重要な位置を占めているのを知らなかったのです。神戸が半身不随となっても国道9号線は無事だ、山陰線も無事だ。それなら境港で採れた水産物は円滑に運ばれるかと思ったが、これが大間違い。神戸の市場が麻痺すると全面ストップなのです」

インターネット取引とまで行かなくても、あれほど業界のオンライン化が進んでいた一九九五年でもセリ売りを行う場所が必要だったのかと改めて認識した次第です。そこで手近な、旧氷上郡の流通史を研究し始めたのですが、どこの町にもある歴史研究会に尋ねても、あのお堂の仏像が…、明智光秀の丹波侵攻の際に…、という伝統的な歴史研究が大半で（だけ、とは申しませんが）、生活史や流通史は興味の対象ではないようです。もし奇特な研究者をご存知ならご紹介ください。

食肉市場もありましたが、新鮮な食材の迅速な配布で一番重要だったのは魚市場だったと思われます。江戸時代の魚の流通も興味ある話題ですが、鉄道が開通した後、昭和初期になると市島、黒井、成松、柏原、谷川の五箇所に魚市場が存在しました。海から駅まで列車で運ばれ、さらに成松などへは貨物自動車で運ばれ、セリを経て自転車の荷台で村々の魚屋が持ち帰ったのでしょう。では鉄道開通直後の日露戦争の頃は、どうだったのか、まだ頑丈な自転車が登場しなかったから大八車（俗称、荷車）で魚屋へ運ばれたのか、製氷業も並行して発達したのか、興味は尽きません。

戦時中は魚も統制品となってセリは無くなり、黒井と成松だけに魚市場、実質的には魚の受け渡し場所、が残りました。誇り高い「氷上郡の首都」柏原からも成松まで配給品となる魚を受け取りに行くとは気の毒なことですが、それだけ成松に実力があったのでしょう。戦後の昭和二五年には五箇所に回復しましたが、石生で食料品店を営む徳田恭男氏（小生の高校同期生）の記憶によると、まだ自動車時代も到来していないのに横田、そして目と鼻の石生にも市場が誕生したそうです。現在の規制緩和を先取りした群雄割拠の時代のようですが、そこには杉本さん、芦田さんという実力者の存在があったとか。

この方々は、かつての赤井、久下、足立といった丹波豪族に匹敵する人々です。そして明智勢の侵攻に対し祖先が華々しく闘い、最後に屈伏したように、都市資本の進出には様々な対応を取りますが、最後には組み込まれていきます。七つの王国、いや市場も消滅しました。残っているのは、これらが集約化された丹波市立地方卸売市場です。これだけは何とか永続してほしいものです。

時空ロマン・白毫寺

日置孝彦
（氷上町）

わがふる里の丹波市が船出して、十一月で二年になる。月日の経つのは早いものであることを感じるのは私一人だけなのだろうか。大多数の人達は、時の移り過ぎ行くさまを感じとることは極めて自然なことだと思われる。

私達の先人は「年々歳々年新たなり」とか「年々歳々花あい似たり」といった的確な表現を説き明かしている。私はいま、丹波市の生い立ちを静かに見守ってきた歴史的シンボルともいえる、御寺があることに気がついたのである。慌しい日常生活の中では、忘れ去られているのが現実そのものであることを思い知らされた。

忘却とは、忘れ去る事なりと言われている。いにしえの事柄に関心を持つ人々の意識は希薄になっているのが事実であるのかも知れない。実際のところ自分を含め、地元の丹波市でも忘れ去られていることが多いのではないだろうか。

遠い記憶から甦ったその御寺は白毫寺である。どこにあるのかといえば、市島町（旧美和村白毫寺）に伝えられている。白毫寺といえば千古の歴史を伝えているので、大方の人は御存知のことと思われる。白毫寺まではJR福知山線「市島駅」下車、タクシーで約十分。車では舞鶴高速道の春日インターから一般道に入り、福知山方面へ十五分と交通案内されている。

それでは白毫寺はいつ頃創建されたのだろうか。寺伝によれば、飛鳥時代の文武天皇の慶雲二年（七〇五）、法道仙人が山を開いたとされている。天竺（インド）伝来の薬師如来像を御本尊とした。その像は眉間の白毫から瑞光を放っていたので白毫寺と名付けられたと伝えられている。法道仙人の行実については明らかではない。

ここで喚起しておきたいことがある。それは白毫寺

が創建された八年後の和銅六年（七一三）に丹波國が誕生したということである。今から一三〇一年前の大昔の夢路を辿る旅をしたいという衝動にかられる思いである。

そこで日本の成り立ちを理解しておかなければならないと思われる。本来、日本の國は神話の國づくりによって生まれて来たものであることは誰しも教えられてきた。古くは倭（やまと）と称されていたが、大八州（おおやしま）、葦原中國（あしはらのなかつくに）とか秋津島（あきづしま）などとも称し、定まっていなかったことが伺える。遣唐使の國書に「日出ずる処の天子、日没する処の天子へ書を送る」と記されていたとも伝えられている。日本の國号が認められるようになったのは遣唐使になってからのことである。

ところで白毫寺は、藤原京（現在の橿原市とその周辺地域）があった時に創建されたものであったことがわかる。藤原京は第四十一代持統天皇によって造営されたわが國最初の本格的な宮都といわれている。事実、持統天皇は、持統八年（六九四）に藤原京に遷都している。

それから三年後、文武元年（六九七）には草壁の皇子の子、軽（珂瑠）王子が十四歳で皇太子となった。しかも同年、持統天皇の譲位を受けて天之眞宗豊祖父（アマノマムネノトヨオジ）天皇と称して、この藤原京で即位したのが第四十二代文武天皇である。

この文武天皇の生い立ちを遡れば、祖父は大海人皇子という。第三十八代天智天皇の弟である。祖母は持統天皇である。兄の天智天皇が没した翌年には、天智天皇の子、大友皇子が即位したかは不明であるが、「大日本史」には皇子の皇位を認めているので、明治天皇から明治三年（一八七三）に弘文天皇と追諡された。このことから類推すれば、恐らく大友皇子は、皇位を継承して第三十九代弘文天皇に即位していたことが考えられる。

兄の天智天皇の没後、天智天皇の子、大友皇子と叔父の大海人皇子との間に皇位継承を巡る権力闘争が起きた。これが世にいう「壬申の乱」である。壬申の年に起きた皇位継承を巡る内乱は、大友皇子―弘文天皇の自害という結果で終息した。一方、天智天皇の弟、大海人皇子が勝利し、天淳中原瀛真人（アマノヌナハラオキノマヒト）天皇と称して第

四十代天武天皇に即位することになる。

大海人皇子は兄の天智天皇の皇女と結婚するが結婚した時期は、天智天皇の晩年ではなかったのか。その理由は、壬申の乱で行動を共にし、夫が天武天皇即位と同時に皇后になっている。夫の天武天皇没後は即位せず、実子の草壁皇子が皇太子になったのでその育成に心血を注いだ。しかし、実子の草壁皇子が病死するや自ら高天原広野姫（タカマノハラヒロノヒメ）天皇と称して即位したのが第四十一代持統天皇である。先に述べた文武天皇の祖母に当ることが明らかになった。

歴史上、壬申の乱は表向きには皇位継承問題ということになっている。しかしながら、その本質まで言及されてこなかった。そこで根本的な原因を追求する必要があると思われる。当時の状況を判断すると、天智天皇と弘文天皇の親子は、中央集権国家体制の整備に着手したのに対して、大海人皇子が専制君主による律令国家の建設を推進するという国家体制の対決だった。壬申の乱はいうなれば大海人皇子の勝利によって天武天皇が登場し律令国家に舵をきり、わが国の将来の方向を決定付けた意義は大きい。

一方、壬申の乱の主役を演じた天武天皇の孫は文武天皇という不思議な縁で結ばれていたことが知られる。因みに文武天皇は、藤原不比等の女、宮子を妃に迎え首皇子（第四十五代聖武天皇）をもうけたことで知られるが、結婚の時期は明らかではない。文武天皇の祖父、天武天皇の律令国家体制建設の意志は、孫の文武天皇が即位して四年後、十八歳の時実現されることになる。

それは律令法であった。文武天皇の命を受けた刑部親王、藤原不比等らが律六巻（十二編）、令十二巻（二八編）に撰録した。わが国では最初に律と令が一緒に編纂された法規に関する書物である。これを「大宝律令」という。大宝元年（七〇一）に令が、翌二年（七〇二）には律がそれぞれに施行された。律と令に分けて二年にわたって施行されたことが伺い知れる。大宝元年の「大宝令」には、外国使臣に「明神御宇日本天皇」の語を用いると定められていることがわかる。更に大宝二年には遣唐使が実際に用いて「日本使臣」と称していたことが伝えられている。

このように日本の國号が中国に承認され、律令法に

よる国家制度の確立した時期でもあったということが理解されてくるのである。

その後、文武天皇が二十二歳の治世の時、白毫寺が創建されたことも伺い知れるのである。白毫寺が創建される以前から和銅六年（七一三）に丹波國が誕生するまでは、大和政権の直轄地であったのではないだろうか。朝廷の直轄地、即ち天朝の領地と認識され、天朝領域は天領と呼ばれた地域だったと考えられなくもない。

近世、江戸幕府の直轄地の俗称として「天領」という呼称を用いたことは一般によく知られている。白毫寺は丹波市最古の御寺ということになる。わが國には存在しなかった宗教である仏教が古代の日本社会を統一する大きな原動力となったことが理解されるであろう。

殊に仏教は支配層のものという考え方から天皇家や皇族、貴族等それぞれ寺院を創建していったと考えられる。当時の民衆は、寺院の建立や仏像造立に奉仕することこそが最高の功徳を積むと信じられていた。

順調に船出していたと思われていた矢先の慶雲四年（七〇七）文武天皇は、重い病気となり、母に譲位の意志を伝え、二十四歳の若さでこの世を去った。

早速、母である天智天皇の第四皇女、阿閉（陪）皇女が日本根子天津御代豊國成姫（ヤマトネコアマツミシロトヨクニナリヒメ）天皇と称し、即位したのが第四十三代元明天皇である。元明天皇が即位して三年後の和銅三年（七一〇）三月、藤原京から平城京（奈良県北部、現在の奈良市）へ遷都し、奈良時代の幕明けとなって行くのである。丹波國は古い文献が極めて乏しいので再吟味を要する。今回、往時の温もりを幾らかでも理解していただくことが出来れば望外の喜びである。

変わる丹波・変わらぬ丹波

風雪に耐えて

左：柏原町田路

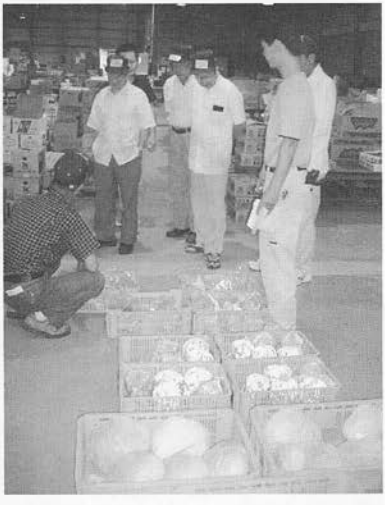
下：氷上町北御油

柏原バイパス沿いの温泉が葬儀場に変身

本誌でも紹介した温泉は無念、廃業。跡地にはセレモニーホール「ネムールの森」が開業

丹波を撮る

国道柏原バイパスに近い丹波市立地方卸売市場（氷上町石生）は健在です。



朝の5時に収穫された青物が6時過ぎにはセリにかけられ、その日のうちに店頭に並べられる。

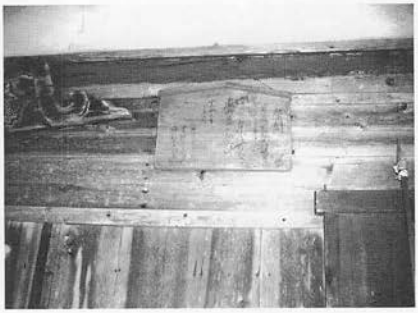
撮影：徳田八郎衛

氷上町南御油・北御油

南御油の公民館

明治22年建築の旧家

丹波を撮る

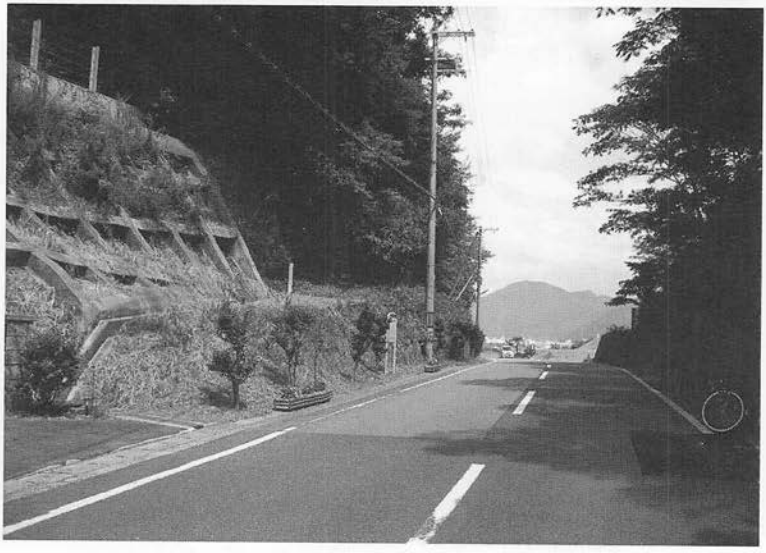


寛永時代の所領安堵状が旧家を見守る

丹波市内の坂：北山坂（柏原町北山・田路）

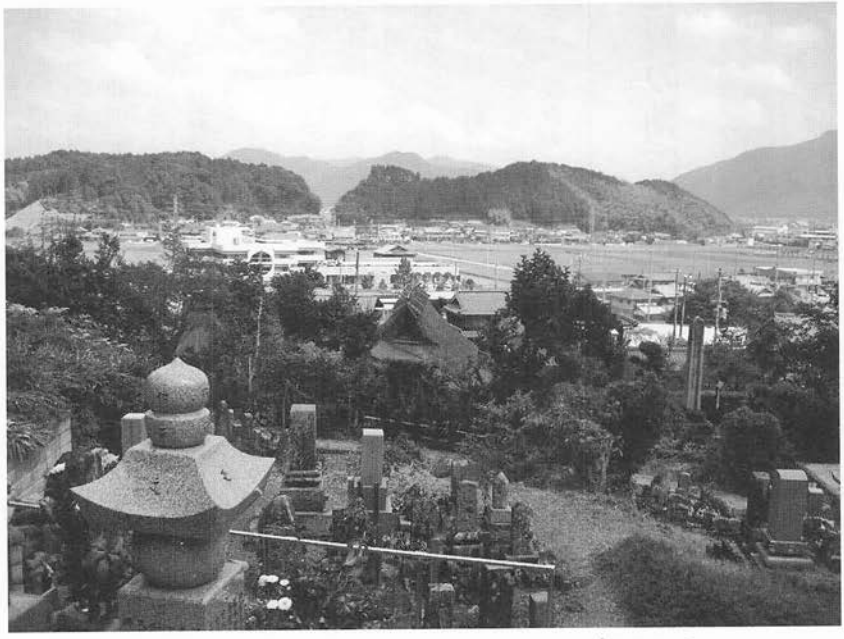
明治中期に新井村（後に柏原町と合併）が誕生したが、役場や小学校が設けられた北山部落へ北部の田路、母坪部落から、さらには成松や佐治から訪れるには高度差30mほどの丘陵を越さねばならなかった。大正時代に県道が整備され、この北山坂が開通したが、それから3回も掘り下げられて現在のような2車線、高度差10mほどの楽な坂に改良された。戦前は大塚医院のダットサンが度々立ち往生する難所であり、崖崩れも多かった。

北側の田路から見た北山坂



掘り下げる前の坂道の跡が崖に残されている。それ以前は、もっと高い坂だったといわれる。

この坂を北山側へ越しても、今は村役場も無くJA営業所も存続が危ぶまれている。だが新井小学校前に建設された特養「柏原けやき苑」は、大人気である。市内の老人ホームの大半が人里離れた場所にあるのに、これが小学校前という賑やかな（？）場所に建てられたので多くの入居者を集め、三田方面の老人ホームからの移住者も少なくなかった。デイサービスにも、周辺の町から多くの利用者がやってくる。



東鴨野の墓地から見た北山坂と北山の集落、そして石生の山々

特別養護老人ホーム
「柏原けやき苑」

私の職場

経済発展の軸に知的財産制度

定年後に設立した国際特許事務所

高田　守（柏原町）

電機会社を定年退職し、都内で特許事務所を設立して一〇年が経ちました。弁理士七人、弁理士受験中などの技術者九人、事務プロフェッショナル一〇人、合計二六人の事務所となりました。

◆知的財産の制度はなぜ必要？

企業の技術者は製品開発で新しいアイデアを出します。そのために企業は多額の研究費をかけます。苦労して得たアイデアは、自分がそれを製品に生かせてこそ、投資と苦労が報いられます。投資や苦労をしない第三者がそのアイデアをただで利用することは不公平です。そこで、そのアイデアを個人または企業のものとして一定期間独占使用を認めます。

一方、そのアイデアを公開して先ず情報として公共のものにし、一定期間後には誰でも使えるようにして、個人と社会とのバランスをとります。

こうして個人の創造を刺激するとともに、産業の活性化を図ろうとするのが知的財産の制度です。

◆仕事の中身はどんなもの？

技術者が興奮を覚えるような発明は素晴らしい発明です。その意外性、その波及効果などに夢がふくらむようです。

この発明を誰にも理解されるように客観化するには、図面を用いて文書に記載する必要があります。そして、何が発明かのエッセンスを「請求の範囲」として文章で定義しなければなりません。

これを書くプロが弁理士なのです。発明者の書いた主観的な発明メモを基に、これを論理的に再構

成し、説得力を持たせ、客観的な技術文書に仕上げるのです。その過程で、弁理士自身が発明者のアイデアを発展させたり、発明者の気がつかなかった発明の本質を見抜いたりすることがあります。餅は餅屋なのです。

◆商品には愛称をつける？

家庭用の商品などでは、愛称が大事です。その愛称を信頼して、消費者は商品を選びます。これは、その愛称に、その製造業者に対する、またその商品に対する信頼が蓄積されたのです。これが愛称（商標）の機能です。これを第三者の真似から保護するのも知的財産制度です。技術的創造を保護するのとは異なる別の機能です。

◆知的財産の制度に国境はない？

地方の企業で乳製品に独特の味わい、香りを持たせたものがあります。その材料の調合や、製造方法に独自の工夫があります。その発明についてヨーロッパで特許を取りました。ヨーロッパは畜産が盛んですし、乳製品に伝統があります。そのヨーロッパから、日本の地方企業が取ったヨーロッパ特許を使わせてほしいという話がくるのです。

私たちの事務所でも、日本企業からの依頼で、米、欧、中、台、韓などいろんな国へ特許を出願しています。仕事は国際的なのです。

◆職業としてのこの分野の魅力は？

国の経済発展の一つの軸に知的財産制度の活用が据えられています。昔は知られていなかったこの分野に、今では若い優秀な人が入ってきます。

何が魅力でしょうか。特許事務所の仕事、特に発明を説明する明細書の作成は常に新技術に触れています。個人の能力、適正が発揮しやすい仕事です。組織に縛られることを嫌う最近の若い人には好まれるようです。専門能力を身に着けたいというのも最近の若い人の傾向です。この仕事は国際的ですから、その方面の能力、指向をもっている人はそれを生かせます。

どの仕事でも同じでしょうが、特にこの仕事には、能力、性格の適、不適があるようです。性格的には、粘り強いこと、持続できること、技術を考えること、論理的であること、等々などです。勉強することが果てしなくありますから、向学心が強いことです。やってみて適正があれば、キャリアとして有意義と思います。

（高田・高橋国際特許事務所所長）

私の職場

SOHOをご存知ですか？

NPO法人「アジアの新しい風」

上　高　子（氷上町）

◆私の一日

朝起きるとまず、居間にあるパソコンのスイッチを入れる。それからカーテンを開け、朝食の支度にかかる。しばらくしてキッチンからパソコンを見るとウインドウズが立ち上がっているので、アウトルック・イクスプレスをクリックする。数通のメールを受信。これにざっと目を通して、食事にかかる。そのあと犬の散歩。家の周りを三〇分ほど歩きながら、メールの返信について考える。

散歩から帰ると、洗濯機を回しながら、食事の後片付けもそこそこに、メールの処理が始まる。夢中になってキーボードを叩いていると、洗濯機がブーブーと完了を知らせている。手を止めて洗濯物を干す。またパソコンに戻る。

そう、私の職場は我が家の居間。あるときはテレビを掛けっぱなしで、あるときはバックグラウンドミュージックを聴きながら、一日に二〇～三〇通のメールを処理し、自分のペースにあわせて仕事をする。こういう職場を「SOHO（Small Office Home Office）」と知ったのは、そう昔のことではない。

◆SOHOの実態

三年前、NPO法人「アジアの新しい風」を設立して、事務所を我が家の住所に登録した。事務所を借りるほどの資金がないのはもちろんのこと、これが一番節約の形だったから。現在事務局のスタッフは、アルバイトを含め役員の数名がNPOの仕事をしているが、我が家に集まるということは滅多にない。彼らは昼間仕事をもっているから、連絡はすべてパソコンを通しておこない、それぞれがSOHOで処理をする。

全員が同じ受信メールを見ることができる。ただ、重複を避けるため、私が中心にメールの転送や指示により処理をする。会員への連絡、会員名簿の保守、会計帳簿

の処理、ホームページの保守。もっとも多いのがこのNPOの中心的活動である「メール交流」のサポート。結構仕事量がある。

SOHOは家庭の主婦がパソコンで仕事をするのに適しているとか、また仕事の性質によってはラッシュアワーにもまれず在宅でできる、と一時もてはやされた。確かに便利でコストがかからない。が、すべて物事はコインの裏表。都合の悪いことも多々ある。その一番は「公私の区別がつかないこと」。プライベートな時間にいつも仕事が入り込んでいて気持ちが休まらない。我が家の場合、留守が多い夫と二人暮しだが、子育てをしているお母さんなどは、いつも仕事のことで頭が一杯で、家事・育児がおろそかになるのではないかと案じられる。次に困ることは、仕事仲間がその場に居ないからグチがこぼせず、いつも孤独であること。たまには電話で声を発してストレスを発散する必要がある。昔の職場では電話を切った後「聞いて、聞いて!」と同僚に愚痴ったことが懐かしい。

◆インターネットというしろもの

ユビキタスという言葉がはやっている。「いつでもどこでも」というキャッチフレーズで場所と時間を選ばないことをいう。コンビニ、携帯電話、インターネットに代表される便利な生活。ここ一〇年ほどの間に急速に我々の生活を変えている。便利なことこの上ない。しかし、このことで失っているものはとてつもなく大きいはず。ストレートに言えば、「抑制力」であろう。思うようにならないことを我慢すること。あちこちで起きている事件はユビキタスが一因であると思い、私は最近、機械文明批判の傾向にある。

しかし、SOHOはユビキタスの概念そのもの。私は瞬時に判断し返信する能力だけは伸びてきているが、落ち着いて深く考える能力と、頭を切り替えるという能力をだんだん失ってきたように思う。

ところが、私の仕事であるNPOは、メールでの異文化交流を活動の中心としており、インターネットなしでは始まらない。この自己矛盾にいかに対応するか、これが私の課題である。

ところ変われば人もいろいろ

堀　和　博（青垣町）

早いもので、社会人になってもう四十年ちかくが経ち、定年を間近に控える年齢に達しました。そんな折の、会誌「山ざる」からの投稿依頼。テーマについては悩みましたが、サラリーマン人生の三分の一を海外で暮らしています。しかもインドネシア、シンガポール、米国アトランタとシカゴの三か国に亘ります。各地での人々の気風や価値観を報告させて頂き、皆様の話題に供したいと思います。もちろん、どこにあっても人それぞれで、類型化するのはある種の独断と偏見が伴います。その点もあらかじめお許し下さい。

＊

ジャカルタには二十六年前、三年間勤務しました。ビジネスは華僑が相手でしたが、私生活はお手伝いや運転手に始まり、プリブミ（土着の人）と呼ばれる、いわゆるインドネシア人との付き合いが中心でした。

プリブミは基本的には農業の民です。我々が子供の頃、丹波におられたおじいさん、おばあさんを想いだして下さい。行動はゆっくりで、人と争わず、他人を傷つけないように思いやる、そのような人々です。粗暴を特に嫌い、議論しても面と向かって難詰せず、何時間・何日もかけて話し合います。意見がまとまらなければ長老或いは権威者が決断し、最終的には皆がそれに従う。とにかく時間がかかります。決定プロセスも曖昧で、およそビジネスには適合しません。また、思い切った変革も生まれません。農業は極端な変化を嫌います。失敗すると一年間作物が得られず、全滅するリスクがあるためです。そのかわり、同じことを継続してやり続ける力があります。どこか日本人と似ていませんか。私自身、日本人の基層部分はやっぱり南方系だとつくづく思います。また、いま話題のインドネシア・イスラム原理主義も、こういった風土に根ざしていますので、西欧文化とうまく折り合いをつけるには相当の時間がかかると思います。

＊

シンガポール勤務は二十年前の四年間。シンガポールは華僑の都市国家です。華僑は商業の民です。お金が最高の美徳で、きわめて現実的で合理的な決断をします。まさに経済学が想定する経済人がシンガポール人で、これほど理解しやすい人々はありません。

一方で、今はやりの拝金主義の謗りも免れません。たとえば、非常に優秀な私の二十年来のシンガポール人の部下に次の質問をしました。給料は安いが大学の名教授といわれる人と大財を成した娼館の主人を比較した場合、人生の成功者といえるのはどちらか。彼によると、自分を含めシンガポール人のほとんどの人が娼館主を選ぶと。お金が最大の評価基準であるシンガポール人の面目躍如たるところです。

もっとも、日本の場合も最近は自信がもてなくなりました。グローバル化に功罪あるとすれば罪の部分でしょうか。

＊

米国のアトランタ勤務は十四年前の三年間でした。南部はアフリカ系がマジョリティーを占めています。当初、米国は人種の坩堝（るつぼ）であり、文化的にはかなり融合しているものと思っていましたが、まったくの間違

いでした。アフリカ系はアフリカ系文化の中で生まれ、成長してもその文化を色濃く残している。すなわち、坩堝ではなく、思考も行動様式もばらばらなモザイク状態がアメリカだ。それゆえに何十年かに一回は国家の危機を声高に叫び、人種・貧富・地域を超えて再団結の必要があるのではないか。そんな印象です。

南部の人々にはもともとサウザーンホスピタリティーといわれる友好性があり、雇用に貢献する日系企業の進出もあって友好的でした。しかし、根っこのところでは、白人系の人々は大西洋を越えたヨーロッパに最大の関心をもっていました。彼らのルーツであり当然のことでもありましょう。

*

シカゴにはアトランタから転出して三年間在住しました。中西部は自動車をはじめとした製造業の拠点です。製造業としての質実剛健な風土が日本的なものに比較的近いためでしょうか、日本人や日系企業に対してある種の敬意を払ってくれていたように思えます。

さて、米国人（おもに白人系）の行動様式をどう形容すればよいのか。これは狩猟の民です。何か事件があると、ものすごい責任感と体力で集中力を発揮し大きな仕事をします。同時多発テロの処理を思い起こして下さい。この集中力とたたみかける攻撃力は狙った獲物は絶対に逃さないという狩猟民の執着力以外のなにものでもありません。ただ、平凡なことを繰り返し長く続けるのは苦手なようです。このあたりは農業の民とは異なるところです。

もうひとつ指摘しておきたいのは、彼らの価値基準の全ては生活の質（クオリティーオブライフ）にあります。どのような高給が与えられても、家族の生活の質を阻害するものであれば価値が低くなります。家族と過ごす時間がなければ、どんな意味もありません。このへんは農耕系や商業系と比較してみると面白いところです。

*

以上、三か国の人々の思考様式を私なりに概観しました。どの生き方が正しいとは決して言えませんが、もう少し自分の国の成り立ちや民族の生き様に敬意を払ったグローバル化があってもよいと思うのは私だけでしょうか。

ドライブ旅行を楽しむ

今田　二三夫（春日町）

旅にはいろいろな方法があるが、私はマイカーによるドライブ旅行が一番好きである。時間的に自由がきくし行きたい場所へ自在である。荷物もトランクに積み込み放題、これがツアーならそうもいかない。従って妻との旅行はマイカーによるものばかりである。もっとも北海道や九州などへは飛行機で行き、空港でレンタカーを借りることにしている。神経を集中して高速道路やハイウェーを走る時すべてのことを忘れ、ストレスを解消出来るのだ。又、大自然のすばらしい景観を眺めていると心が癒されるのである。妻は免許を持たないが、車に乗ることは好きだから、私達二人の旅はうまくいっているのかも知れない。しかし、助手席に座る妻に地図を見させて案内させるが、目標物を見過ごしてしまう場合があると、運転に神経を尖らせている時つい諍いになる。けれども妻が同乗してこそ楽しいドライブになるのだと思うとすぐ仲直りをしてしまう。二人にとって実に不思議な空間である。

長距離のドライブ旅行に出かける時、私は余裕をもった綿密な計画をたてる。これ自体も旅の興味を倍加させるものである。今頃は、カーナビが発達していて便利になったが、私は極力利用しないようにしている。自分が計画した通りに走りたいからだ。又、旅の記録として道路や地名、名所などなるべく脳裏に留めておきたいためである。そのほか運転は二時間以上続けないよう心掛けている。必ずSA（サービスエリア）や道の駅などで休憩する。眠気を防ぐことはもとより、瞬時の判断をにぶらせないようにすることは当然であるが、地方の名産品などを見つけてみやげにする喜びがあり、一石二鳥である。車に乗ることは危険と隣り合わせである。自分は安全運転を気をつけていても無法者の巻き添えを食うことがあるからだ。高速道路などでトラックやトレーラー車による悲惨な大事故が続発しているのを、私は許せない気持で平素一杯である。幸い私はこれ迄一度も事故に遭遇したことはないのは運がよかったと言うほかない。ただ、事故の現場は何度も見て通り過

ぎた。その都度安全運転をと身の引き締まる思いがした。

私は運転免許を取得するのが遅かった。五十一歳の時である。関連会社へ出向した年に土、日曜日のみを利用して教習所に通った。当時はマニュアル車だけでの教習しか受けることが出来ず、年輩者にとっては厄介なものだった。しかし五月から始めて九月に免許証取得となった。仮免許交付から卒業検定まで一発合格で最低の費用で終えることが出来た。免許証をもらえばうれしくなり、途端に車に乗りたい一心からドライブ旅行へと心がおどった。

元町の坂道で

翌年夏、初めての行き先は志賀高原を選んだ。現在の上信越自動車道はまだ開通しておらず、碓氷峠を越えて軽井沢へ入り浅間山のふもとを通る浅間火山ルートのハイウェーから志賀高原ルートへ入った。快適なコースで最高の気分を味わった。いつまでも忘れられない感動が残り、その後幾度も訪れた。標高三〇〇〇メートルを走る乗鞍スカイラインは、大雲海を走る快感に満喫した。現在は規制となりマイカーは通れないのは残念である。千姿万態、美の極致富士を仰ぎ見る伊豆、箱根、芦ノ湖スカイライン。ダイナミックな大自然を魅了する阿蘇パノラマライン。八幡平アスピーテラインの爽快さ、等々、絶景のハイウェーはあげればきりがない。手軽に行けて季節の移ろいを楽しませてくれる美ヶ原ビーナスラインは、通行料が無料となりマイカーにとって有難いハイウェーだ。尾道と今治を結ぶしまなみ海道は、日本の橋梁技術の粋を集めて造られた美しい橋と、青い海に浮かぶ島々がすばらしいコントラストを写し出していてみごとな景観であった。北の大地ではジャガイモ畑が果てしなく続く広大

な十勝平野を突っ走った時のこと、目的地までの道に迷い、尋ねる家らしいものは何もなく、不安な気持に陥ったことも忘れられない出来事だった。

高速道路は北海道から沖縄までほとんど走破したが、好きなのは中央高速道である。眺望もよくSAも充実している。その先には安曇野、上高地など景勝地があり、散策に絶好の場所である。梓川の清らかな冷水に触れると、身も心も洗われる。幾度となく訪れている好みの地である。東北自動車道は十和田湖まで一気に走るのも豪快だが、途中には名所、旧跡、温泉など多く、各ＩＣ（インターチェンジ）を降りて旅する魅力も大きく、最も利用してる高速道路である。今年は七月に五度目の北海道ドライブを楽しんだ。温泉と散策を中心とした四泊五日ののんびりプラン。函館空港でレンタカーを借り、大沼公園、ニセコ、洞爺湖、登別温泉を廻り、千歳空港で乗り捨てた。いつ訪れても最高の温泉と大自然は格別である。

遅蒔きの免許取得であったが、これ程便利で行動範囲を拡げてくれるものはなく、私達夫婦語らいの絶好の居所ともなっており役立っている。これからも体力が続く限り妻と楽しいドライブ旅行を続けたいと思っている。

かくも愛しき存在

岡田昌子（柏原町）

還暦を前に、二度目の公園デビューを果たしてから数年になる。（数年というのがミソ＝まだまだ若いつもりにつき年齢はカモフラージュ）〝公園デビュー〟なんぞというと、「お孫さんとお散歩？」と早合点されることだろう。なんのなんの、孫というか息子と呼んだ方がいいのか、いつも紹介する時に困る。「我が家の孫です」と言うと、娘からは「私が産んだの？」と突っ込みが入るし、「息子です」となると、超高齢出産したことになる。まあ、それほどに、勝手

に思い入れ、親バカ・祖母バカになっているのは、何のことはない我が家の愛犬である。ペットなんぞと軽く言いたくはない。家族の一員であり、若様でもある。

名前は愛里（あいり）。女の子と間違えられることが多いが、愛称は卓球やゴルフ界において世界に羽ばたくアイちゃん達と同じく〝愛ちゃん〟。ミニチュアダックスフントで、八月に五歳になった。人間で言えば三六歳とか。名前のとおり愛のオアシス役を果たしてくれている。

わが愛しき〝愛ちゃん〟のおすまし

今は愛ちゃんにメロメロ状態であるが、もともと犬好きだったわけではない。どちらかと言えば動物は好きではなく、触ったり抱いたりは、どのような事態にあろうとも勘弁して欲しいという部類であった。とにかく、神経質で恐がりキャラのため、手の中で皮膚を通して骨格が分かるあの感触が、どうしてもゾッゾォーとして気持悪かったし、小動物にまつわるトラウマもあった。

この歳になると、恐いものは天災、人災、犯罪くらい（かな?）なので、全てに図々しいオバサンになってしまった（お婆さんとは言わない）今では〝象に健康な蚊の一刺し〟くらいの一笑に付される思い出ではあるが、以下がそのトラウマである。

私が小学校低学年の頃、父がうさぎや鶏、モルモット、文鳥、金魚等の小動物を飼っていた。が、いつも、いつの間にか消えている。長く居続けてくれたのは金魚くらい。何故かいつの間にか次の動物に代わってい

る。母によれば、どうやら近くの山から狐やいたちがやって来るらしい。環境汚染、破壊が進む現代においてなら分かるが、半世紀以上も前、柏原の町中に餌を探しに下りてくるらしかった。屋内で飼っていた文鳥や金魚は、縁側から勝手に家宅侵入する野良猫の餌食になった。

実際に死骸を見た記憶はないのであるが、どうもそのイメージに怯えることになってしまった。更に、親友の家で何度も柴犬にじゃれて飛びつかれた時の恐怖や、溝の中でくたばっているねずみ、生まれたばかりで毛のないウジャウジャいる子ねずみの死骸、田舎道で見てしまう、かえる、蛇、カラス、すずめ、せみ、トンボ、ミミズ、イモリに至る類の死骸……。動物たちの自然界における営みを理解するより、その現象が恐怖であり、漆黒の闇の静けさを背景に軟弱な私のトラウマは育まれた。

そんな私が犬を買う気になったのは、家族が犬好きであり、住環境が整ったこともあるが、たぶん精神的子離れの必要性や、家族であっても適切な距離をとることの重要性を無意識に感じとったからではないかと思える。

さように、愛犬との関係はゆとりのある関係性を示唆してくれる。人間関係とは違う不思議なコミュニケーションは、余裕のある関わり方を教えてくれた。欲求は丸出しで本能だけで生きているかに見えるが、とても繊細で人間の感情や思惑を理解する知性がある。そして、人間の愛情を充分に受け止め応えてくれもする。喋らないし笑わないけれど、ボディランゲージで充分に思いは伝わる。日本の察する文化とは違って、無理しなくても自然体でいられるコミュニケーションがある。それが何とも心地よく楽なのだ。頑固で分からんちんの時もあるが、立派な心の治療医であり、癒される関係がそこに存在する。

ペットショップで、目と目が合い、頼りなげなとぼけた顔が気に入り、生活を共にすることになったが、我が愛ちゃんは様々な状況において、家族メンバーを癒すキーパーソンであり、それぞれのストレスを吸い取り、人生を潤してくれる愛しい存在である。

今日も暑い最中の散歩から、愛ちゃんとの一日が始まった。

卒寿を祝福されて

木村　つた江（市島町）

私は、今年（平成十八年）の八月十三日で九十歳の誕生日を迎えました。子供等が話し合って私のために卒寿の祝賀会をしてくれました。会場は京王相模原線の多摩センター駅前にある「京王プラザホテル多摩」で、八月二十日の日曜日に、四世代の計二十四名と、弟とその娘で合計二十六名が集いました。

内訳は、二人の娘家族と、四人の孫家族に曾孫十人、曾孫は年長が小学三年、年少は生後三か月です。そして、私の七人兄弟姉妹の内、一人生存している弟とその娘です。

このホテルの四階にある「南国」という中華料理店で、正午に宴会が始まりました。

司会は長女の息子（三十八歳）が引き受けてくれました。料理はフルコースでしたが、さっぱりしていて、とても美味しく、曾孫たちには子供向きの料理が出ました。賑やかな歓談のうちに、二時間余りが瞬く間に過ぎました。最後に九人の曾孫たちが、それぞれに白いバラの花を一輪ずつ持って、

「大きいおばあちゃん、おめでとう」

と言って手渡してくれました。私は思わず涙ぐんでしまいました。

二時半過ぎ、それぞれの家族は車で帰途に着きました。私は近くに住む次女の家族と一緒に車で無事帰宅しました。

＃

帰宅した私は、つくづく物思いに耽っていました。三人の子のうち長男（五十九歳）は独身、長女と次女は第二次世界大戦中に生まれ、長男は終戦二年後に生まれました。夫の出征、戦災で家屋焼失、丹波に疎開、復員した夫の事業の失敗。そして夫の胃穿孔の大手術。杉並に住んでいた二十年間は苦労の連続でした。調布に移ってから夫は清掃会社を設立、何とか人並みの生活が出来るようになりました。それから二人の娘が結婚し、四人の孫が生まれ、その孫たちも結婚して、いつの間にか十人の曾孫が生まれていました。

四世代が一堂に会して卒寿のお祝い

それぞれが皆健康で仲良く暮らしているのを、私は「幸せ者」と喜んでいるうちに九十歳になっていたのです。

一昨年、夫の二十三回忌を済ませました。夫が他界してからの私は、気儘な一人暮らしを楽しんできたように思います。しかし、九十歳だよ、と他から指摘されると、改めて心を引き締めないではいられなくなりました。今は曾孫たちの元気な様子を眺めながら幼い頃の田舎の家庭を思い出していました。

#

私の祖父は八十二歳の時、外孫の入隊祝いに出掛ける途中、隣村の神社の前で転んでそのまま亡くなりました。後で聞いた話しですが、祖父は一生の間に一度も医者にかかったことがなかったそうです。性格は几帳面で、「折目の篤兵衛さん」と呼ばれていたそうです。祖母は九十歳まで元気で生き、父も九十歳で他界しましたが、殆ど病気はしませんでした。

母は七十歳で亡くなりました。病名は肝臓癌でした。母は七人の子を育て、一町歩余りの田畑を耕し、養蚕もし、酒好きで気難しい舅にもよく仕え、姑とは実の

母娘のように仲がよく、村でも評判の和やかな家庭でした。

そんな中で私はのびのびと育ちました。唯、祖父にはよく叱られたものです。今となってはその小言が分かるようになりました。私は、これからも祖父に見習って規則正しい毎日を過ごしたいと思っております。私のように気儘な一人暮らしをしていると、時には怠惰な心が頭をもたげてきます。それを何とか宥めながら一日一日を生きて行かねばなりません。それが自分自身のためでもあり、ひいては子や孫たちのためだと思っております。

私は大切なお友達と「百歳まで生きます」と約束しましたが、果たせるかどうか心配になってきた今日この頃でございます。

毎朝のセレモニー

矢尾　鐵太郎（柏原町）

私の朝は五時に始まります。眼覚ましの助けを借りることもありますが、殆どは自分で起き出します。ここから七時頃までの二時間ほどが、私の言う「毎朝のセレモニー」の時間です。冬でも夏でも同じ時間帯ですから、冬ならまだ外は真っ暗、夏ならもう相当明るくなっています。私自身は季節に合わせて少しは時間帯を変更したいのですが、それは難しいのです。NHKのラジオ講座が一年中時間が変わらないからです。

*

五時から二〇分ほどは私流の体操の時間です。この体操は一〇工程ありますが、中味は自分流の寄せ集めです。青竹踏みから始まり、「真向法」とか言っていましたが、昔、会社の囲碁部の先輩が旅先の旅館で教えてくれた四工程のストレッチ体操、テニス仲間から教わった腰痛予防体操、腹筋、背筋、脚筋、腕筋等四工程のエクササイズで体操の時間は終わります。この体操をこの時間にやる理由は、朝一番にやっておかな

いと、後ではなかなか出来ないことが経験上わかったからです。

＊

体操が終わる頃には、愛犬のハルが散歩を待ち兼ねています。私が散歩着に着替え始めると、彼は嬉しさをどうにも出来ない、といった風にキューンと甘え鳴きをしたり、狭いマンションの中を駆け回ったりします。このハルとの散歩を、実は私も楽しみの一つにしています。特に昨年夏、現在のマンションに越してからは、散歩のための環境には大いに恵まれました。マンションの前を流れる新川に沿って、両岸が絶好の散歩道になっています。この川や葦の茂みや川の両岸に広がる野原には、多くの生物が住んでいます。

＊

中でも私が惹かれるのは、グォーンと腹に響くウシガエルの声や、キエッ、キエッという雉の声です。雉も啼かずば……と昔の人は言いましたが、今は声を聞いても捕まえよう、という人はあまりいないらしく、春から初夏にかけて、雉の声を聞かない日はありませんでした。何度か番（つがい）の姿を見かけたこともありました。水辺には朝早くから夕方暗くなるまで釣り人が水面を見ています。散歩の途中、ときどきザバッというような水音がして、水面に大きい波紋が広がりますが、魚の姿を見ることは稀です。水面を飛ぶ羽虫にでも飛びついてまた没したのでしょうか。

＊

最近の散歩で、たまたま魚が釣り上げられるところに出会いました。若い人でしたが、岸の石の上に魚を横たえ、巻尺を取り出して体長を計り、それから今度は携帯を取り出して魚の写真を何回か撮り、それで気が済んだというように魚を河に戻しました。魚は結構大きく、離れていて正確には分かりませんが、三〇センチ近かったでしょう。今は嫌われ者になりつつある外来魚のようでした。本当はリリースしてはいけなかったのかも知れませんが……。

歩いていくと、私と同じく犬を散歩させている人、夫婦でウォーキングをしている人、ラジオを聞きながら歩く人などと行き交います。この時間に会うのは殆ど年配の人達です。大抵の人達とは挨拶を交わします。つい先日は、荷物を運ぶ台車に大きな犬（チャウチャ

ウとのことでした）を載せて押して歩いていく老夫婦に会いました。近づいて「どうしたのですか？」と聞きました。年を取って歩けなくなった犬を喜ばせるためだそうです。その朝は何かしんみりした気分になりました。

＊

この散歩で殆ど毎朝会うおばあさんがいます。彼女は五年前に夫に先立たれ、それから一人暮らしをしています。一人息子は外国で結婚して、もう何年も日本に帰っていないそうです。彼女も最近まで犬を飼っていて、毎朝散歩をしていたのだそうですが、その犬も昨年死に、自分の年を考えると新しい犬を飼うわけにもいかない、と今は本当に一人ぼっちです。彼女はハルの顔を両手で包むようにして、「いい子だね。長生きするのよ」と言います。

＊

散歩は概ね一時間程度です。家に戻った後、もう一度マンションの一階まで朝刊を取りに下り、今度は八階まで歩いて上ります。階段登りが出来るのもマンション暮らしのメリットに数えています。シャワーを浴びるともう六時半過ぎ、ドイツ語のラジオ講座が六時四五分から二〇分間あります。今年の秋はドイツ旅行と決めていますので、このラジオ講座も何とか続いています。五〇年ほど前、大学でやった筈のドイツ語はきれいさっぱり頭の中から消えていて、全くの初歩から始めて三年目です。

＊

ラジオ講座が終わり朝刊を読んでいると漸く家内が起き出して朝食の準備を始めます。私の朝のセレモニーの時間は終わりです。また一日が始まります。

人と歯並びと―（揣摩臆測）

中村允也（氷上郡）

私は柏原町屋敷で呱々の声をあげ、のちに父の任地に伴われて、葛野（以下旧町名）、遠坂（父、小学校長三十六歳）、吉見―佐治―成松と転々とした幼少期を終戦まで過ごした（途中学徒動員で約一年半を尼崎）。

葛野での父の乗る自転車の荷台で〝おーい、のぶや寝るなよ〟という声の記憶、両親に無断で六歳になったばかりで登った遠坂峠（現在の峠と異なり、牧歌的な香りがあった）、その峠から覗き見た山陰線上を右から左へコトコトと走る貨物列車の光景、谷川駅から北へ父の生家へ向かって高架の下の県道を歩くと、行く夏を惜しむような、カナカナという蝉の声を列車がこれをかき消すように過ぎて行った。もうすぐ六歳（一九三五年）このことを思う。故郷の山河は忘れないで、その風土が幼少期に与える力は大きく尊い。

◇

人間は一本の葦に過ぎず、自然の中で最も弱いものであり、それは考える葦である（Rosean Pensant）。人間は思考する存在であると説かれているが、思考とは、感性的なものとは区別し、概念、判断、推理の作用である。感性的に獲得した雑多な材料を比較分別・分析した上で総合し、それぞれのつながりを全体的にとらえ、能動的・精神的な機能をさしているという。

長い間、歯科の仕事にたずさわっていると、学問的ではなく長い経験を積み上げたこと、その個人の動向を観察記録することによって歯科的な小さな現象の――それぞれの実像をとらえて、その個人の思考・発展・動向を推理することができるようになった――そう思っている。つまり私の独断と偏見である――しまおくそく（揣摩臆測）の類と思っている――それである。

大内山（一九五〇年代）の極度の下顎前突（下顎大臼歯がやっと上顎小臼歯に触れるというほどの）の手術による矯正（整形）を経験したのは、大学卒後（官立東京医科歯科大学―昭和二十八年）間もない頃であった。彼の師匠がどうやって大内山にすすめ、入院、手術に至ったか、その経緯の詳細についてはわからない

ままであった。時津風親方（元双葉山―三五代横綱・六九連勝、昭和七年入幕―二十年引退）は瞬間的動体視力が大切なのに、片方の眼が不自由であった。その彼が大記録を成し遂げたのであったから、瞬間力を発揮するには咬合力が最も大切なものの一つであることは充分に理解していたに違いない。実際、大内山から親方がそういったから来たと、訥々と語るが、下顎前突と開咬――つまりほとんど上・下顎の歯が接触していなかったから、発する言葉を、そう言ったと思うという推理に近かった。当時の大内山は、土俵の柵がなければ圧倒的に強いという評価であった。しかし現実はそうでなく、ある部分の欠落があり、曰く言い難いところでもあった。

個々の歯が正しい――運命づけられた位置に萌え、全体として凹凸のない歯列となり、その上で、上・下の関係がおよそ正しいところで咬合するという、いわゆる正常咬合の範疇に入るのは二〇―三〇パーセントではないかとされている。

次に述べることは一人一人調整したものでなく断定しえないが、例えばプロの野球の一軍選手や、大相撲幕内力士の大写しのテレビ画面から推測すると、いわゆる正常咬合に入っていそうな確率は高そうで、明らかな不正咬合の人は極めて少ないと思われる。逆に言えば高い運動能力を必要とされる場合には、不正咬合の人達は、これらの分野での多くの活躍を望むことは出来ないということになる。また、このところを修正しておけばもっともっと高い位置に進めたと考えることもある。

時には特例もあることは勿論で、例えば大リーガーで活躍した某投手などにみられる。彼は後でふれるように不正咬合の分だけの負のところを、これに特徴的な感性がすぐれており、彼の場合にはそれを補う思索にたけているように思う。推測でなく正常に近い咬合であれば、瞬間的な力が容易に強く働くはずであり、その咬合力の起点は十分に作動し、次の動作・刺戟につながる筈である。近時その働きは思考力にも強い影響力があることも示唆している報告もある。ただ偏見というだけではないように思えるのだが。

また小さな部分の歯列の異常に対する私の独断を披露すると、歯間空隙（歯と歯の間に隙がある）――物

事を丁寧に行なわない。犬歯の高位（低位）唇側転位（俗に言う八重歯、鬼歯—欧米では特にいやがる）——頑固で、協調性に乏しいが、ある種企画性感覚が豊かであるという一面を持っている。上顎前突（出っ歯）—好人物、だまされやすい。中切歯が中央部で（人中に一致する）やや回転し、垂直的に下方から観察すると、両方の歯が翼状に見える——気が強い一方で何でも頑固に守る。一本の歯だけが回転（九十度近く）している歯を持つ人——変わった人生航路を歩むなどである。また乳歯が永久歯と交代しない（永久歯の欠落を含む）—幼く社会性感覚の未熟、年齢の割に歯の磨耗が少ない——妥協性に富む、裏を返せば責任感に乏しいなどと数えればきりがない。歯並びが悪い人は総じて駄目という結論になりかねない。しかし、その一方で考える葦としての人間の感性の点から特筆すべきところがある筈である考えている。

感性とは、身体が受けた刺戟に反応する感覚器官の敏感度であろう。繊細な音の変化を捉える人は聴覚の感受性は鋭いといわれる。かつて大いに活躍した多くのアイドル歌手の歯列を思い出していただきたい。それらの人の大半の歯列は、判で押したように鬼歯を持ち、出鱈目に近いと言える歯列であった。

最近、古い日本映画のシリーズを観る機会があった。見るからに心の豊かさを思わせる歯の大きさを、外形、美しい歯並び、時を経て年輪を重ねた魅力を感じざるをえなかった。その人の名は原節子であり、古き良き時代の役者達であった。

独断と偏見に立って書いているようであるが、幼少期の成育のために心をくだき、先祖から贈られた個々の歯を大切にし、歯列を正しく整えるように努力し、やたらに人工歯によって置き換えられるべきではない。

先に述べたように人間は一本の葦であり、この葦に考える葦——Thinking reeds と感じる葦（Sensing reeds）の二面があって、これらと歯列との間に相関関係のあることを——ありそうなことと考えている。少なくとも血液型と性質などというようなものより、はるかに確度が高い、とそう思っている。

花で結ぶ地域の輪から

足立和子（柏原町）

関東暮らしなど予想もしていなかったのに、つれあいの東京本社転勤で昭和四十九年十月から関東で暮らすことになり、小学生や幼児が安心して過ごせるよう厚生設備（公園、広いグランドやプール、室内運動室等）の整った埼玉県大井町にあった大きな社宅に転居した。昭和五十二年からは社員分譲の土地にマイホームを建て、埼玉での生活にどっぷり漬かっている。

一九七〇年頃の高度経済に伴う人口の都市集中で、東京都のベッドタウンとして埼玉県人口が急増し、それに係る行政対応に追われて町民の文化活動は二の次の状態のように見えた。

他の地からの人口流入は、一面から見れば優れた人材の流入でもあり、知恵を集めた故郷つくりの芽も育ててきたように思える。幸い大井町は、埼玉県下でも注目された町民の自主活動が活発な所で、皆のアイデアを行政が協力しながら公民館を軸とした活動が展開されてきた。

兵庫県の保健所等の勤務から通算三十年間、保健師として「健康づくり」行政に従事し、無事定年を迎えたのを機に、これからは地域で健康や社会教育面でのお手伝いが出来たらと願っていた。

昨年十月の市町合併までの五年余、町の社会教育委員として、町民の生涯学習のすすめ方や青少年健全育成について検討する機会を与えられた。犯罪年齢が若年化し、凶悪な事件が毎日次々と報道されている昨今である。私の住む地域も開発が進み、だんだん緑が少なくなり、小鳥の囀りも小さくなってきている。自然に接する機会も乏しくなり、子どもが戸外で遊ぶ姿もあまり見なくなってきた。子どもの数も急減しているが、大人も子どもも家に、それも個室に閉じこもる傾向の時代では「孤独」が精神を不安定な状態にして、それを晴らそうとする非常識な行動が事件に繋がることも考えられる。

四年前、「花好きな人集まれ」との町広報で誘いかけの記事を見つけ、早速仲間入りした。国道２５４

（川越街道）中央分離帯緑地の美化活動「２５４花の会」は、こうして出発した。

歩きや車での通学、通勤、買い物などが日常生活で自然と触れ合う機会かと思える。街道に咲く「花」を通して家庭での会話が、そして更には「慈しみや愛」が芽生えることを願っている。一人暮らしの若者も多く住んでいる。

故郷を離れて暮らしている人はもとより、地域で暮らす人々が時に悩み、戸惑うとき街道の花が心を和ませるならば幸いである。そして排気ガスやアスファルトの照り返しから蒸れたり、高温になる等過酷な条件下で咲く「花」に感動したり励まされたり、今をどう生きるかを学んでほしいとも願っている。

また、今後予測される長寿社会の情勢に財源の確保や見直しを迫られている。民間活力の導入も言葉では理解していても実践行動はなかなかの状況と思える。私たち「２５４花の会」は県の道路管理支出の削減や効率的な道路管理をめざして行政とタイアップした方策も模索中である。

花の会活動四年余の体験から「行動して考える」という手法が意外と説得力と共感を得やすく社会教育の実践や民間活力の導入の一方法としても評価されている。

とはいえ、活動当初はゴミは交通渋滞の状況を示すバロメーターだと警察に知らせたいほど、車や通行人から投げ捨てられており、ごみ（特にたばこの吸殻）拾いに追われた。

国道の中央分離帯は石ころごろごろの荒れ地で、鍬やスコップを初めて持つ者も多く、固い土を掘り起こしたり、石ころを除く等の作業は困難を極め、二〇名足らずの、しかも高齢の会員だけでは果たしてどこまでやれるかと不安が先立ち、草花を根づかせるのはいつのことか、とくじけそうな時に一人、また一人と仲間が増え、若さ溢れるホンダ学園の寮生達の年数回の作業協力日も定着してきた。

また、街道に面した民家が花の水を提供してくださるようになり、道行くドライバーからも励ましを受けながら、根気強く季節の変わり目の花苗の植えかえをしていくうちに、固かった土もほぐれ、やたら根を広げていた邪魔な草も、その勢力を弱めてきた。花育て

のコツも次第に掴んできて、花への愛着が活動の励みや支えになっている。

川越街道亀久保交差点から川越市との境界までのわずか八〇〇メートルの短い（しかし作業する者にとっては長い）区間ではあるが、折りがあって通られるときには健気な高年仲間を思い出して下さい。

キューバと日本の関係

酒井重男（柏原町）

私は東京に出てきたのは昭和三十四年で、それまで六年間（現）神戸大学で助手をしておりましたが、本郷の水処理会社に就職しました。会社は平成三年に退職し、その後は㈳日本技術士会に所属し、コンサルタント業務で結構忙しい日々を過しております。

その一つを紹介しますと、平成十三年にカリブ海のキュウー共和国へ三か月間、ＪＩＣＡ（国際協力事業団）の要請でハバナ湾の油ヘドロの微生物処理の技術指導を行いました。

キューバの気候は年間平均気温二四℃で、年間を通じて温暖な島である。人口は約一一〇〇万人のカストロ政権が率いる共産国で、資源は砂糖、タバコ、ニッケルなどで経済的に苦しく、現在は欧州を中心とした観光客の収入でなんとか成り立っているのが現状です。教育と医療が無料であるため、最低の生活は保障されているが、貧富の差は大きい国です。国民性は至ってほがらかで、ホテルは勿論のこと町を歩いていても至る所からラテン音楽が聞えてくる。

キューバのハバナ市と日本とは深い関係があり、一九一三年、仙台藩主伊達正宗が家臣の支倉常長をスペインと同盟締結のため、メキシコ経由でスペイン及びローマに派遣した。スペインからの帰国の途中にハバナ市に立ち寄ったことから、その後、浅からぬ関係に

ある。そこで、平成一三年四月には仙台の育英学園の努力により、ハバナ湾に面した景勝明媚な所に日本庭園を完成させた。日本からの観光客も比較的多く、私の滞在中にもホテルに三回観光客団体が来られた。

私の技術指導の目的はハバナ湾に堆積している油ヘドロを微生物の力により処理することであった。ハバナ湾は五・二㎢、平均水深九mで、その周りは民家や火力発電所、石油製油所、種々の工場があり、下排水処理していない排水が湾に流れ込み、それが長年にわたり油ヘドロとなって堆積している。

試験は微生物の探索から開始し、ハバナ湾の五箇所からヘドロを採取し、この中の最強の分解力をもつ微生物を見出した。次いで、環境省の三箇所の研究機関で油ヘドロの分解の指導を行った。その後、このJICAのプロジェクトは他の技術士により続行され、成果が上ってきていると聞いている。

私の巡礼

徳義通夫（春日町）

娘が十七歳で逝ってしまった。

供養は、法要は。仏法で決められた仏事は形式的すぎる。僧侶の読経もむなしい。

私は四国八十八ヶ所霊場を巡ることに決めた。

その時、私は四十七歳。巡礼は長期間会社を休まなければならない。

六十五歳になったが、まだ勤務があった。これ以上歳を重ねると足腰は衰え厳しい巡礼に耐えられない。とりあえず休みを利用し、秩父三十四観音、坂東三十三観音、西国三十三観音を巡ることにした。最終の目標は四国霊場にあった。

バスツアーや乗用車で回ることもできるが、それはしたくなかった。あくまでも歩くことを基本とし、一人で巡ることに決めた。

まず秩父三十四観音から始めることにした。秩父は

他の霊場にくらべ範囲が狭く簡単だった。
ここは歩き遍路の姿は見かけなかった。寂れていた。人里離れた観音堂は荒れ果てていて、なかには納経所は街の中にある札所もあった。
七月から始めたため、真夏の巡礼はかなりきつかった。真っ黒に日焼けした。一ヶ月半で結願した。
次に、坂東三十三観音。関東一円広範囲に広がっているため、公共の交通機関を利用し最寄り駅より路線バスに乗り継ぐか、近ければ歩くことにした。効率よく回るためにはパソコンソフトが大いに役立った。
坂東の中でも一番の難所とい言われている八溝山日輪寺が最後まで残っていた。水郡線の常陸太田駅からのバスは、久慈川に沿って走るのどかな風景がつづいた。六キロの山道を二時間半かけてたどり着いた。ついに結願。一年かかった。
つぎは西国。南は紀伊半島から北は丹後半島にまで至っている。費用も日数も掛かることになる。関西への旅行もかねて少しづつ回ることになり現在十五ヵ寺を終えた。
最近会社の勤務が楽になったので少しづつ時間を作り平行して四国を巡っている。七番十樂寺の宿坊での夕食時、懐かしい方言が聞こえてきたので、聞いてみると郷里のとなり村氷上郡市島町のみなさんだった。なんと偶然なのかとえらく感動した。
秩父、坂東、西国を合わせ百観音霊場と言われている。結願のあかつきには長野の善光寺にお礼参りをする事になっているらしい。四国が終われば高野山にお参りするそうだ。
巡礼についての読み物は書店に山と積まれている。不透明な時代「いやし」や「やすらぎ」を求めてということになるのか。巡礼者のテレビなどのインタビューによるとみな何か不幸を背負っているかのように伝えられている。出会った同年輩たちは「定年後する事がないので四国を巡っている」という人も居た。毎日家にいることになった自分の居場所を探し求めているのかもしれない。
坂東の日輪寺では一日数本しかない帰りの路線バスを待つ間、関西から来たというひとは「病身の妻がいるので一泊しか出来ない」といっていた。つれあいの治癒を願っての巡礼か。また車で年老いた母親と回っ

ている人もいた。巡礼には様々な人生がある。みな善人であった。

四国八十八ヶ所を巡り終わったとき、亡き娘にどう報告するか。

中国の歴史に興味を抱いて

加賀山　次　郎（柏原町）

高校時代というのは知識欲が旺盛で、この頃に興味を持った分野については一生、興味を持ち続け、その後も深入りしていくもののようだ。この時代に生徒の好奇心に上手に火を付けてくれる先生があればその先生の思い出も一生ついて回る。この意味で高校一年の時漢文を習った石岡先生は今でも思い出に残る先生である。その時習った漢詩漢文、故事熟語のウンチク、歴史上の人物のエピソード等々その時はどこまで理解していたかはともかく、深遠な中国文化に対する強い好奇心が芽生えたことには間違いない。

去る六月初め、一五人程のグループで中国へ行った。北京での最初の昼食の時、テーブルの上にどんとチマキの大皿が出て来た。ウエイターの説明では、「今日は屈原が汨羅（べきら）に身を投じた記念日で中国ではチマキを食べます。日本のお客さんもお上がり下さい。ホテルからのサービスです」とのことである。

屈原は二三〇〇年も前の戦国時代の憂国の詩人で政治家でもあったが、政界の争いに嫌気がさして汨羅の水に身を投じた悲劇の主人公である。二三〇〇年も前の、高踏派詩人が今も市民の生活の中に生きているのかと感じ入ると共に、そういえば小生に初めて屈原の名前を教えてくれたのは先の石岡先生であったと思いだしたものだ。

昔から歴史に関心が強く、海外旅行も専ら歴史への関心から行先を選んでいる。本や人の話で下調べした所に出掛け現場を見る、又、興味を膨らまして勉強をすると言った具合である。このような観点から旅先は

長い歴史を持ち、現代にも何かと繋がっている中国とヨーロッパが多い。唯、ヨーロッパは何かと面倒に思えて来て、今では専ら中国に出掛けている。

ここでは現地で強い印象を受け、認識を新たにした事を二、三紹介したい。

(1) 古代史

中国の古代史は常に書き換えられている。次々現れる新発掘の遺跡から新しい遺物が見つかり、それによって従来の定説が覆されるからである。

西安、上海、鄭州など各地の博物館へ行くと紀元前一〇〇〇年とか一五〇〇年とかの大昔の甲骨文字や鼎などの精密な、あるいは巨大な青銅器、焼き物等が大量に展示されている。教科書などで見ただけのものが現物として目前に現れると毎度、毎度強い興奮と感激を覚える。聞けば未発掘の遺跡がそこら中にあって近年開発が進むにつれ次から次と遺跡が発見される。

この新しく発掘される資料と、放射性炭素測定法や古代天文学、甲骨文字の解読技術の発達で、従来不確かとされていた古代王朝、王の年代確定が科学的に進められている。その結果、例えば従来中国歴史の始まりは紀元前九世紀の商（殷）と言われていたのが、一二〇〇年遡って紀元前二〇七〇年の夏王朝が始まりと確定され、その各王の年代も引き続き確定されているという。つまりは司馬遷の『史記』以来伝説の王朝と言われてきた夏王朝が実在したと言うことだ。

又、四川省の三星堆という遺跡は紀元前三〇〇〇年から同一〇〇〇年のものとされているが、大量に発掘された遺物が独特の形状をしていることから、大方の漢文化とは全く別系統の文化とされている。つまり二〇〇〇年～三〇〇〇年前にはもう一つの別の中国があったということらしい。

このように中国古代については次々新知識が出現し、事実の全体的な整理がしょっちゅう変わる。歴史のストーリーが一〇年もすれば別のストーリーになると言うロマンあふれる話である。各地の遺跡や博物館を覗いて、今日の知識は従来の自分の知識のどこと符合するのか、今までの自分の持つ体系を変えねばならないのかと考え悩むのも楽しいことである。

(2) 周口店

周口店の北京原人と言う言葉は四〇万年前の人類の祖先として教科書にも出ている。その周口店は北京の南西五〇㎞程の所にあり、車を雇えば二時間足らずで行ける。現地には原人の骨を掘り出した洞窟跡が整備されており、さらに発掘された遺物を分かり易く展示する博物館がある。

但し、肝心の四〇万年前の原人の頭蓋骨は現物ではなく精密模型が展示されている。現物は日中戦争の時、日本軍の北京侵攻のどさくさで行方不明になったという。何しろ人類共有の貴重な文化遺産だから世界各国で行方探しが行われている。行方の推定には諸説あって定まっていない。その内、最近話題になっているのが戦争中、米海軍に撃沈された日本の病院船「阿波丸」に積まれていて、台湾バシー海峡に沈んでいるという説である。日本軍が日本に持ち帰るべく秦皇島の港から積み込んだというのである。このため何千メートルの海底から阿波丸を引き揚げる計画が進んでいると聞いた。原人の頭蓋骨もさることながら阿波丸には現代歴史の重要な資料が数多く積まれていたはずだから、引き揚げはぜひ成功してほしいものである。

(3) 万里の長城

長城は人工衛星から肉眼で見えるとも言われるほど巨大なものであるが、これが歴史上、実用性がどれだけあったかを調べてみると面白い。話はそれるが、筆者は丁度オイルショック後の大不況の頃、広島県にある当時世界最大規模の製鉄所に勤務していた。この工場、フル生産の時は最高の効率で動くが、不況で生産が減ると効率はガタ落ちになる。鶏頭を刎ねるに牛刀が邪魔になって動きがとれないのである。当時、「大きすぎて役に立たぬもの、万里の長城、戦艦大和、巨大製鉄所」とぶつぶつと嘆いたものだった。

長城は二三〇〇年も前から北方の異民族の侵入を防ぐために作られたものであるが、例えば唐が滅びた一〇世紀以降だけを見ても「遼」や「元」等、長城の外側の外敵民族が中国を支配した期間の方が長い。この期間は長城が国境ではないから長城は不要であった。又、漢民族政権でも宋代のように軍備に頼らず、外交と経済で北方民族との平和を保った時代もあって実際に役に立ったのは明代の三〇〇年程らしい。

それにしても二五〇〇㎞もの長さで、険阻な山谷、

広漠たる砂漠を越え、さらには整備されずに荒れた所もあったりして、探検好きには格好の対象らしい。中国地元の好事家の長城研究グループや長城ハイキンググループが数多く活動している。中でも強い関心を呼んでいるテーマが、材料と工事技術の秘密の解明とか。

我々から見ても、あの堅くて強い煉瓦とその接着剤はどのような技術によるものか。どのようにして馬の背のような峻険な尾根に重量物を運び上げ、高い建造物を建設したかとか、二〇〇〇年以上もの長い間にどのような発展をしてきたのかとか、実際に現場に立つと疑問は次々とわいてくる。

このように話には際限がなく、小生の中国への入れ込みは当分続きそうである。

尚、小生の中国紀行の拙文を下記ホームページに掲示しています。お暇の時に覗いて頂ければ幸いです。

（2006年8月7日記）

http://www.h4.dion.ne.jp/~jkgym09/

折々の記(3)

井本義一（柏原町）

○約二十年来故郷を偲んで拝見している丹波新聞で注目しているのは、新生丹波市の訃報欄「悲しみの庭」に見る八〇歳代、九〇歳代の逝去された方が多いこと。余りの多さに十七年三月十三日号から五月八日号の現在まで、前記両年代に七〇歳代と六〇歳代以下の四グループに分けて人数をメモさせていただいているが、八〇、九〇歳代をひとくくりにして三グループで見ると、八〇～九〇歳代の方のご逝去が圧倒的多数を占めて、最近特に七〇歳代以下の減少が目立っており、郷里にも人生八十年代と高齢化の波が急激に押し寄せていると実感している。

五月八日付の朝日新聞⑦面社会保障シリーズ「六〇歳以降も働きますか？」の記事中に、一九三五年（昭和十年）生まれの平均寿命の推計が夫八〇・三歳、妻八五・四歳とあった。

先月二十三日尼崎で銀行勤務時代の大阪松屋町（まっちゃまち）支店の勤務者同窓会に、昨春より紙上参加（出席せずに返信用ハガキで近況報告出状し、後日全員の近況報告を幹事さんが一覧報告表にして不参加者全員に郵送される）しているが、一覧表を送っていただいた幹事O氏への礼状添え書きに「七〇歳からの再スタート！気合を入れ直します」と自分の八十年代？を見据えて昨十日出状した。（17・5・11日）

○「今の自分が好きです」「楽しみは自分で作るもの」「楽しいとは身体が喜んでいること」。超高齢化時代でこの種の言葉を耳目から吸収し納得することが多い。「選択と集中」の時代と言われて随分久しいが、多情報氾濫の現代にあって、感性が鈍ってくると現在の自分に必要な何気ないごく普通の言葉を、それも著名人でないごく普通の方の含蓄ある言葉を、見逃し聞き逃すことが多いので留意したい。

それは無勤務者になってテレビ欄の見出しで今日見たい番組の取捨選択も、日常生活の流れの中で、時間の浪費にも繋がるので軽視できない。わたしの場合、①ニュース、天気予報の定番のほか、②「健康生活目標」に関連の有無ー飲食物やウォーキング番組から栄養と減量関連、③自分の読みたい作家の関連、④音楽関連、⑤イチロー、松井他メジャー選手関連、⑥見たい映画とドラマ、⑦各種スポーツ観戦など、赤ボールペンで上記該当番組個所を○で囲む毎早朝作業も、日々刻々の世相を反映して今日の切り口は？との期待で楽しい。これに妻の韓流ドラマが加わると赤丸印一杯で結局見られない番組も出てくる。それはそれでよしで何気ない些細な一事一事が楽しめれば「今の自分が好き」に繋がるのではないかと独り善がりのことを考えた。（17・6・7日）

○前回帰郷から七か月の六月十一日、両親の十七回忌で三十年ぶりになろうか阪急梅田より宝塚経由悲しく残念な事故現場を見ることなく帰郷。十二日～十四日（帰京日）の三日間連続で、山霧煙る早朝、丹波の森公園正面道路で後ろ向き歩きをした。「森の大橋」「ゆめのかけはし」からスタートして事務所入り口までの上り下りを、途中懐かしい先輩の方との立ち話時間を除き、一度も休むことなく、石畳上の歩きは初体験で緊張したがつまづくこともなく歩き終えた。約六年間

の実績を自己検証させていただき自信を深めるとともに、更なる元気をもらって「故郷よありがとう」の汗をかいた。

今日十五日早朝も自宅町内路上後ろ向きで、足腰の全方位筋肉を鍛えた。（17・6・15日）

○毎日淡々と繰り返し行う営み＝行動は物心両面ともに貧しい私には、それを飽くことなく継続出来る現在に感謝しつつ嬉しいこと。一〇〇％同じではないと思うが、僧籍にある方が行われる勤行にも合い通じるものを感じるのは間違いだろうか？

増加し続けるニート（約六四万人）やフリーター（二〇〇万人超）など主として若い人達の現状を見るとき、教育だ政治だ経済がと原因はいろいろあろうが、以前聖路加国際病院の理事長日野原重明先生（現在九十三歳）が、十五・一・十八日付朝日新聞のコラム「あるがまま行く」の冒頭に、アリストテレスの「習慣とは繰り返された運動である」を引用して、①習慣が人間の性格や品性を作る ②良い習慣が身につけば生活のリズムとなる ③よい習慣が身についた人とそうでない人との違いは将来大きなものとなるとして、論語（孔子）の「性は相近し、習いは相遠し」から、「自分自身の人生は、将来は自分で選び作り上げるもので、初めから決まった運命などない。本気で変えたいと思えば、人は自分の習慣や人生を変えられるのです。」と結ばれている。若い人達だけでなく、わたし＝裕次郎世代にも大切なことだと先生の話を思い出した。（17・7・12日）

○退職後スクラップブックに貼り付け編集をしようと前から計画し、新聞の該当ヶ所を切り抜き日付順に保管してきたのを、退職後七ヶ月の六月二十一日からやっと着手し毎日とはいかないが、時間を作っては作業をしてきたのが、今日やっと現時点分まで貼り付け編集を終えて、懸案で長年のささやかなライフワーク（自称）のスタートを切れたとほっとした。因みに、①朝日川柳、②朝日歌壇、③ｂｅ紙面の「いわせてもらお」の三種で、座右に置き毎日一年前、二年前、〇年前の作品はどんなのが？とニンマリしたいのだ。今回作業で①は十二年十一月二十六日分から、②は十二年十一月五日分から、③は十二年十一月五日分からで、整理済分三種合計で八冊、現在貼り付け進行中三冊（三種）

の計一一冊となりわたしにとっては宝物である。過去の社会情勢の投影や、世相のなかのこみあげる実相を味わい楽しみたい。引き続き作る能力のない自分には、他人の素晴らしい心情作品に接したいし、将来は長男か長女の関心のある方に譲りたい。（17・7・26日）

○最近路上約一キロの後ろ向き歩きに楽しみが増えた。これまで歩きながら（両手指はグー、チョキ、パーをしながら）両手を直線的に前後に振っていたのを、両腹部に沿うように曲線的に前後に振ると、腹部の左右が動いて腹筋（腸腰筋？）を鍛えることになるのではないかと、偶然の体験的発見に喜んでいる。それは普通の前向き歩きの両臀部を振るのと同じ感じだからだ。極端な例として競歩選手のお尻の動きが参考になる。皮下脂肪、内臓脂肪（総称して体脂肪）が気になる年頃で、毎朝のストレッチ運動で公園の鉄棒（逆上がり用）を利用して四五度角の、腕立て伏せを最低八〇回以上しているが、これに加えて上記腹筋運動は、体脂肪の減少につながるのと、わたしにはガス抜きと快便に効果あり嬉しい。要点は歩行の安全上からも「大きく　ゆったりと　まーるく」スローライフ・スタイルで両手を振ること、連動して両腹の筋肉が大きく左右に動くから効果がある。（17・8・15日）

○町田市より町会へ委託されている雑木林山地の下刈管理ボランティア活動に従事して、九か月目となったが、活動は月二回の土曜日実施で作業時間帯は九時から十一時三十分と、夏季はこの猛暑のなか、厳しく大変な重労働である。七月二十三日の作業日をもって八月中は夏休みに入った。因みに会員人数は総勢一四～一五名で二十、三十代の若い人は約三人（女子一名）で、残りのメンバーは男女半々で全員五十～八十代である。過去植樹した管理育成樹木のコナラ、クリノキ、クヌギなど、夏場の成長が早くて横へも冗長、徒長しているのが多く、その上はびこっている蔓の除去を兼ねて、この徒長枝の下枝落しの時期到来を、四十五年～五十年前にもなろうか？　実家で父母や弟と一緒のかすかな作業体験から思い出して、蔓や雑草、笹竹に押され苛められている育成樹木の身になって考えると、かわいそうで気が気でなく、単身、誰にも気がねせずに楽な作業時間帯に下枝落し作業を思い立ち、自前の庭木剪定用鋸と剪定鋏を道具に、七月は二十八日をス

タートに八月中三回、計四日間の早朝五時三十分から約二時間作業をした。

多数の蚊にたかられての作業で参ったが、全身汗まみれになる（首筋あたり余りの汗水の多さに蚊の方が敬遠するのか？）のと、意識して身体を動かしたので余り気にせずに、自分の思いのまま作業ができたことに自己満足し、伸び放題のこの時期、早くしなくてはと気になってしかたがなかったストレスを克服した。

（17・9・9日）

○「高齢者は不採用よ」と妻に言われながら挑戦した国勢調査員に採用され、全国八五万人の非常勤国家公務員の一人として、十か月ぶりで公務に集中した。九月二十日～十月十一日（十一日関係一件書類を市役所へ提出済）まで、お彼岸前後は残暑厳しい日もあり、二地区一四五世帯への皆訪問（各世帯へ最低三回）はきつい多摩丘陵の上り下りで、十年前から左足太腿外側の痛めている筋にはつらく苦しい日々もあったが、自分なりに計画的に進み得た仕事の楽しさと、緊張後の成し終えた仕事人としての充実感を久し振りで味わった。

（17・10・18日）

○今日送っていただいた36号を見て、改めて「一字の重み」を学習させていただいた。会員だより（八二ページ）わたしの苦言提示記事中、35号に関する「パート職務」と「パート職種」に、それぞれ「パート」のあとに「の」が挿入されていることでした。「の」が原稿になかった（35号の別表を見れば判ること）のに何故？と驚きでした。この表の上下関係を見れば「の」が当事者（井本）にとっては不要で書く筈がありません。

37号（今回）の会員便りに別記しておりますとおり、この会員誌をより良いものにする為に（36号の四一ページ下欄編集方針ご参照）編集部自体が謙虚に受け止めていただき、信頼回復のためにも「編集後記」を活用し、少なくとも①こうした常識で考えられないことが何故起きるのか？②今後の再発防止にかかる決意と具体策を述べて欲しかった。山ざる誌の今後のために敢えて本誌を微力ながら支える投稿者サイドから言えることは、この基本的重要ミス多発は編集部サイドの己に厳しく、かつ誠実な取り組み姿勢の欠如、具体的には「34号」のミスに対するわたしのクレーム記事が、

「35号」の「会員便り」に掲載されず無視された結果が再発、再々発を招いたと考えるが間違いだろうか。要は公私ともに過ちはある。それを問題にしているのではない。打てば響く誠意ある対応が肝要ということを誤解のないように指摘しておきたいのです。

（17・10・29日）

○十月二十二日西麻布で開催の新小岩会（本誌36号「折々の記(2)」16年11月20日付記事ご参照）時に、一年先輩で姫路から出席されたE氏から「この本いいよ」と言って戴いた本（本年四月新刊）を今日読み終えた。これまで常に健康管理には実践的に、また自分の心身の求めるままに直感的に実行してきたわたしには、素直に出来る軌道修正個所（マルチ断食の項など）もあり今後座右におき活用したい。

裕次郎世代のわたしには、先ず第七章外見のアンチエイジング―体内が若返れば外見も若返る②第三章日常生活でのアンチエイジング―今日からできる！老化を防ぐ「ちょっとした」習慣③第二章間違いだらけのアンチエイジング―健康にいい」と思い込んでいたこと、本当ですか？④第五章ストレス・マネジメントで老化を防ぐ―ストレスが多い人ほど早く老ける理由とは？の各章が特に参考になる。

書名は『一二五歳まで元気に生きる』著者　満尾正（小学館発行）

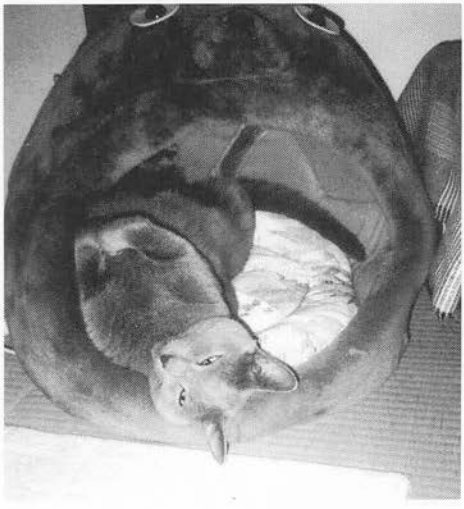
（17・11・7日）

○わたしと懐かしく愛する故郷との繋がりは、丹波新聞や本誌のほか知人、友人からの展覧会のご案内である。実家が同じ町内会の彫刻家磯尾隆司さんから毎年春秋に戴く上野の都美術館での日展等への招待状。また今回初めてアマチュア写真の春日町岡林弘司君（彼から十六年十一月中学校の古稀記念同窓会時写真展に毎年応募していることを聞いていた）から池袋サンシャインシティでの「総合写真展」への案内で、前者は二十四日までだが後者は十四日迄で、妻と予定がつかず単身後者の初日の今日見に行った。入選された磯尾さんの力作、岡林君は二点出していて優秀賞と佳作で、いずれも素人のわたしには専門的なことは判らないが、お二人とも他人にはわからない大変な忍耐とご努力の結果がこれらの作品となったのだと思った。

展覧会を地下鉄乗り継ぎで梯子して、秋と共に望郷の念が深まった日であった。

（17・11・11日）

○今年の内なる収穫は「楽しみについて」考えたことである。日々の営みを「楽しみたい」などと自分に対して書いているが、わたしは①工夫する＝考える喜びと②継続する喜びを併せたものを楽しみと捉えている。例えば筋トレ、ストレッチ運動で児童の逆上がり用鉄棒を使っての四五度角腕立て伏せの場合、両手での握り間隔を広めたり狭くしたり、踵を上げずに、腹部を突き出す②両手を回して腹部側面から背中を叩くように腰を五〇〇回しの場合、二五〇回は膝を曲げて落とした腰を空を見上げるように曲げてと、あと二五〇回は膝ヲ曲げずに腰を伸ばした普通の状態で、両横腹を前に突き出すように腰を回し腹部側面と背中を叩いている。③最後の整理体操時、公園ベンチに腰掛けて両手で両膝周辺から両足首まで筋肉周辺を押さえ、叩き、強くマッサージしているが手の力を抜かないように留意している。両手握力アップに毎日のことだから効果は大きい。④同じく立って両手前回し、後ろ回し、水泳のクロールのように左右の手の前回し、同背泳ぎのように左右の手の後ろ回し、そのあと最終整理体操として両肩の上げ下げ、これは特に両肩を前に囲い込むようにしてから天を仰ぎみて後ろに反り返るように、と要は前後に両肩の支点を移動させながら、両手をだらんだらんと力を抜くようにクールダウンする。また本項前半の後ろ回しの時も膝を曲げて反り返るように空を見て両手を回す。



⑤前記④の前半背泳ぎ流の後ろ回し時までだが、両手を上にまたは前に突き出した時に全両手指をパッと開くと（それぞれ回数は三〇回）厳寒時でも体が熱くなってくる。来る日来る日繰り返す喜びは、新しい工

夫発見と肉体改造？改磨（ま）と言うべきか、特に内蔵脂肪と体重の減少をスポーツジムと医療機関で検証できることが嬉しい。

閑話休題。もう一つ生活の変化は、まだ持たないと決めていた「ケータイ」を持ったこと。九月国勢調査員業務着手前日に妻分と購入した。公務現場が外なので業務中にわたしに万一の事故発生の場合、市（国）に迷惑をかけることを心配したのが直接の動機だった。以後すぐ持ち出しを忘れるので毎日外出前に妻から「携帯持った」と言われ続けている。二人と一匹暮しで安心感が増しており持って良かったと思っている。

（17・12・6日）

○出状する全年賀状に必ず自筆の添え書きを実行しているが、神戸の友人Y君からの二〇〇五年元旦年賀状の添え書きに、最近の読書からとして養老孟司『まともな人』の一節〝現代の日本に欠けるのは、もっとも単純な常識というイデオロギーである〟を引用後に「これから世の中どうなっていくのでしょうか？」を読み返した記憶が新たなところへ、元旦に読んだ文芸春秋二〇〇六年新年特別号に、前記養老氏が二〇〇五年のおぞましく、なげかわしく、悲しい様々な事件事象を回顧して「モラルハザード（倫理崩壊）の極致を見る思い」と記しておられるが、全くどうしてここまで落ち続けるのか？　と思った。

「物」でなく「心の時代」だと言われて久しいが、最近小学校の通学途上の複数児童に言葉をかけても「おはよう」との返し言葉が少なくなったと実感している。これだけ頻発する児童殺傷事件に対応して「知らないおじさんに声をかけられたら顔を見ないで、返事もしないこと」との学校の安全指導が徹底してきたのだと考えるとともに、一抹の淋しさを感じている。それは私の少年時代は、遊び等で出かける私に出会った近所のおばさんが「よっちゃん、どこへ行きよってん？」と声をかけてくださり、それが「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」に変わるか、挨拶につながっていたと記憶している。今は「少子高齢化」「夫婦共働核家族」で地域の連帯感の欠如からか、周りの不特定の大人の温かい児童を見つめる目が少なくなったのだろうか？

心を通わす窓は「言葉」であり、見詰め合う「目」

だと思う。自分にとって懐かしく古きよき時代は何処へと思ったり、寂しい世の中になったと嘆いていても前へ進めない。せめて自分の小さな周りだけでも「窓」を使って心を通わす努力、実行すること、それは空き巣、押し込み強盗急増下の地域の防犯活動にもつながることでもあり、住まわせていただいている町会へのささやかなお返しだと思う。（18・1・10日）

○緑を守り育てる地域活動に参加しているからか、山里を育てる新聞記事等に関心が。二月十九日付丹波新聞四面に、河合雅雄先生が丹波の森公苑にカシワとヤマザクラの成木を寄贈された記事を見て、昨年十月から十一月にかけてのＮＨＫ教育テレビ「知るを楽しむ」で、猿学から説き起こされて自然と人との交じり合い方までを教わったことを思い出した。その講演の中でも触れられていたのは「里山の復興」のことである。

先生が十七年七月二十七日付朝日夕刊一〇面「マサオとなおこの地球さんぽ道―里山を散歩」の対談中で、「―雑木林、広い意味での里山の自然を維持するには、人間の目配りが必要なんですね。自然保護というと、人手が入るのを嫌って、枝一本たりとも切るな、という人が出てくるけれど、そもそも田んぼも畑も人工の自然だからねえ」「人手の入った里山は、実は原生林よりもよほど豊かな生物環境ですね。それを日本は誇りにしていい。そこから自然との付き合い方を、定着させたいですね」丹波の否世界の賢人の目はやさしい言葉のなか的確で鋭い。

前記「知るを楽しむ」では十七年七月に横浜国立大学名誉教授の宮脇昭先生が、命を救う森について講演され、常緑の広葉照樹林の重要性などを勉強させていただいた。急激に進む地球温暖化による山林のバランス破壊から、高齢化の影響で里山や森林の担当管理者不足の諸情報を見聞きするいま、十七年十一月二十四日付丹波新聞一面「花咲き誇る里づくり」の記事で、―名所氷上町水分れにサクラ後継木植樹へ―氷上町大谷地区で梅の里へ夢広げる植樹―氷上町香良で県道や川沿いにアジサイ植樹―。同新聞一面十八年一月二十九日付市島町梶原などで―ミニ里山整備進む―など郷里のあとに続く人達へ緑花木のバトンタッチ配慮行動は嬉しい。（18・2・21日）

猫の日・福寿草開花の十八年二月二十二日・記

ニュージーランドの旅

川端教子（青垣町）

ニュージーランドの自然に魅せられ、四度目となる今回の旅は、途中四泊五日のエイベルタスマンガイド付きウオークを挟み、B&Bに泊まったり、ユースホステル（YH）で自炊生活をしながらの一人旅でした。

出発前夜に風邪の症状が現れ、午前中診察を受けるというおまけが付きましたが、何とか無事出国。前回はオークランドで「大抵の日本人は団体で来ることが多いのに、どうして一人なの」と、入国審査官の質問攻めに遭い、国内便への乗り換え時間は迫るし、どう言ったら解って貰えるのか、パニック状態に陥りながら必死になって説明したのが嘘のように、この度はすんなりと入国でき一安心。

とりあえず、バスでYHまで移動。YHの会員証を見せると、バス代や各施設等の入場料が割り引かれ、学生時代に戻ったような気分になり嬉しかった。

二十三日夕方、昨年のグランド・トラバースで知り合ったポーラとほぼ一年ぶりの再会を喜び合い、彼女の車で郊外をドライブしたり、海岸ぶちのレストランで夕食を食べた後、クリスマスの飾り付けをした通りを散策した。

二十四日、オークランドから首都ウエリントンへ十二時間の列車の旅。人の数よりヒツジの数の方が多いというお国柄ゆえ、車窓からは草をはむ羊や牛の姿が眺められる。途中、上りと下りの列車がすれ違う駅では三十分余りも停車し、駅舎内のレストランでは軽食を楽しむ乗客もいた。私は駅から外に出て、山をバックにシャッターを押して貰った。

二十五日、フェリーで北島から南島に渡り、バスでネルソンへ移動。2日間B&Bに泊まり市内を歩いて回る。

二十七日から三十一日まではエイベルタスマンガイド付きウオーク。ロッジに二泊ずつしながら砂浜を歩

いたり、山道を歩いたり、海岸線に沿ってシーカヤックを漕ぐなど、希望したものに参加できる。もちろん、ロッジでノンビリ過ごすという選択肢もある。家族連れや単独参加の人もあり、国際色豊かであった。私のルームメイトはオークランド在住のカッシイ。食事の時はカナダ人のキャロルやイギリス人親子のテッドとマークスと一緒に同じテーブルを囲み、食後のおしゃべりやゲーム、次のロッジへ移動するときなども一緒で、日を追うごとに親しさが増していった。

エイベルタスマンガイド付きウオーク

三十一日、ネルソンへ戻り、B&B泊。

新しい年になった。今日はネルソンからカイコウラへバスで移動。ピクトンまでは山中を走り、カイコウラまでは海岸線に沿って南下する。カイコウラに近づくにつれて、あちこちの岩場の上で寝そべっているアザラシが目についた。三時過ぎにバス停に着いたのだが、YHは町外れにあり、振り分け荷物ならぬ、ザックを前後に背負って三十分余り歩き、ようやく到着。二泊三日の予定でチェックインしたものの、周囲にはお店やレストランはなし。食料品を買いに街まで行こうとしたら、このYHに泊まっている同胞の方が街の更に先にある大きなスーパーへ片道だけ車で送って下さった。帰りはザックに三日分の食料品を入れ、約一時間かけて歩いて帰ってきた。急いで夕食を作り、もう一人の同宿の方とも一緒におしゃべりをしたり、旅

の情報交換ができ、とても有意義な時間が過ごせた。

二日、今日は風が強く海が荒れており、道路にまで海水が上がってくる。楽しみにしていた「ホエール・ウオッチング」は諦め、お昼過ぎからアザラシの群生地へ行ってみることにした。ちょうど干潮の時刻で、潮が遠くまで引いている。群生地では、アザラシが波打ち際に寝そべっていたり、駐車場近くの草地にまで歩いてきて、そのままごろりと寝っ転がって昼寝（？）をする姿には全く驚かされた。

子どもを見守る母親

岩に寝そべるアザラシ

三日、朝食を済ませ、昨日の群生地へ行ったみた。しかし、干潮には時間が早く、丘の上の牧草地に登っていったら、二歳半の男の子を連れたスコットランド人家族に会い暫く一緒に歩き、その方から「先週、日本で大雪が降った」と知らされびっくり。

遊歩道は牧草地を抜けて続いているが、所々有刺鉄線で遮られ、人間は木の階段を跨がねば通過できない。日本人ならば大人が抱いて越えるのに、自分で登れる所まで辛抱強く見守り、子どもの力では乗り越えられない所のみ助ける、という姿勢には感心させられた。

この家族連れと分かれて海岸に下り、アザラシの群生地の中を歩いていった。岩の陰に寝そべっているのを知らず通過して威嚇されたり、森林だけでなく海岸もまた自然保護がなされているのを見て、益々この国が好きになった。

クライストチャーチ、オークランドを経由して六日に日本に戻ったが、時間が許せばＹＨに滞在しながら全島くまなく歩ければどんなに幸せかと。次のシーズンもニュージーランドの自然と触れ合えることを願っている。

旅のエッセイ

ハワイ周遊 クルーズ四島巡りの旅

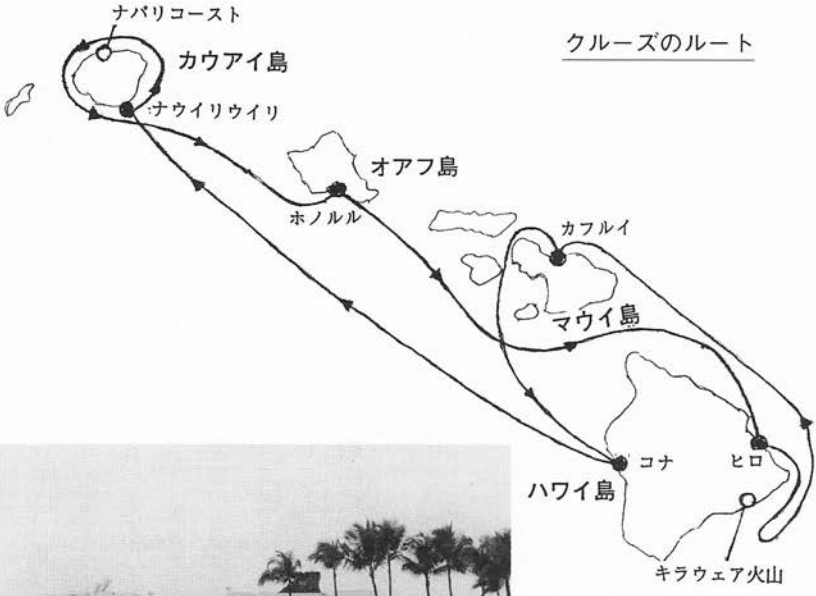
生田清弘（柏原町）

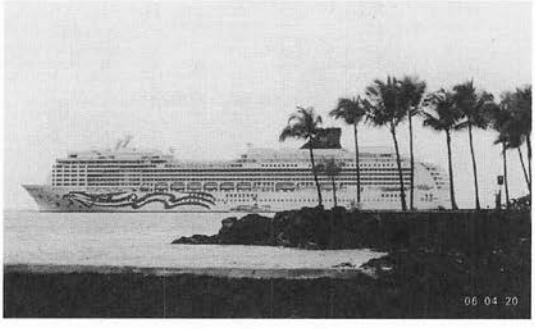
ここ数年ヨーロッパには出かけているものの、アメリカはご無沙汰していた。ニューヨークのテロ事件以来、何となくアメリカのイメージが私自身変わったようで躊躇していたからだと思う。そこで、アメリカといっても50番目の州、ハワイを訪れることにした。まずは、旅行会社の資料を見て驚いた。矢張り旅行事情が大きく変わっているようだ。ハワイへの出発（成田空港）、入国（ホノルル空港）のセキュリティ・チェックが厳しくなっている。スーツケースの鍵をかけないで・・・、刃物類は小さな鋏も持ち込まないで・・・等の警告が気になる。スーツケースは、透視検査の結果、不審物があれば、合い鍵で開けるのが普通だが、それができない場合は、職権でロックを壊して調べるという。また、状況によっては靴の中や裏側までチェックしたり、所持品の一つ一つを調べることもあるようだ。

所変わってホノルル空港では、入国審査時、一人一人指紋スキャンと、顔写真撮影が行われていたが、八十才以上は免除されパスポートの提示のみで済んだ。

このような状況で最近はテロ対策の強化により、出入国時の審査が厳重になっていることを実感した。

予め選んだ旅程はハワイ諸島をめぐる超大型客船のクルージング。今までのハワイの旅はホノルルのあるオアフ島に限られたものが多かったと思うが、それは離島に行ってみたくても、飛行機の乗り継ぎなどがあって待ち合わせ時間のロスや、煩雑さがあったためだ。今、話題の最新鋭の超大型客船「プライド・オブ・アメリカ」は昨年七月に就航したばかり。オアフ島を拠点にハワイ、マウイ、カウアイの諸島を巡る七泊八日のクルーズ。これこそ移動の手間が省け、寝ている間に島から島へ移り、のんびり寛げる高齢者向きにはぴったりのものと考えた。クルージング・コースは七泊八





超大型客船「プライド・オブ・アメリカ」

日のスタンダードのほか三泊四日や四泊五日のショート・クルーズもある。

因みに船は、総トン数八一〇〇〇トン、全長二八〇・七メートル、全幅三二・二メートル、客室数一〇七三キャビン、乗客定員二一四四人、乗組員数八〇〇名。全長二八〇メートルといえば、横浜のランドマークタワーを横に寝かせたのとほぼ同じと考えればその巨大さが理解し易い。

また、船内には八つのレストランがあり、それぞれテーマを異にし、席数も一〇〇席から六〇〇席のものまであって、時間帯により一時的に混むことはあっても、各階に分散していることや、アメリカン、フレンチ、イタリアン、アジア料理と好みに応じて食事の種類も違うので、思う程、船内通路もレストラン内も混雑する様子はない。各レストランの空席状況を示すモニター画面が船内ところどころに設置してある。矢張り船客はアメリカ本土からの人々が最も多いようなので、アメリカ料理を扱うレス

トランが混んでいるようだ。

この船の特長として、何事も格式張らずに、カジュアルに、リラックスして楽しみ新しいフリースタイル・クルージングをめざしていることだ。これは乗客にとって、徒に気をつかうこともなく嬉しいことだ。ディナー・タイムはフォーマルウエアの着用は不要で、男性は長ズボン、襟付きシャツ、女性はドレスやスカートなど堅苦しくないリゾートウエアが基本。レストランの利用時間やテーブルも概ね自由であり、船内には一〇を数えるバー・ラウンジもある。食事代やチップは予め料金に含まれている。ただし特食の利用や、酒類は別勘定。ショッピング、写真撮影や電話、ファックスなどは、すべて乗船時登録した各個人のクレジットカード決済となっている。

また、毎日演目が変わるショーが楽しめるシアター、各種スパ、フィットネス・センター、大小プールなどの娯楽施設やスポーツ施設も充実しており、ショッピング街にはアートギャラリーもあり洋画のオークションが開催中だった。

チェック・インして乗船したら後はすべて完全なフレータイムだから、自分で計画をたて、自分のしたいことを、自分のしたい時に、自分の状況に合わせて思う存分楽しむことができる。この「プライド・オブ・アメリカ」(PRIDE OF AMERICA)は、ノルウェージャンクルーズライン(NORWEGIAN CRUISE LINE NCL)の客船だ。

○

本船には各停泊地の島毎に予定したショアーエクスカーション(Shore Excursion 陸地周遊遠足)があり、船内でチケットを予約することができる。私達は全行程中、三つのエクスカーションを選んだので、ここに紹介し、合わせて、船上からの二カ所の遊覧クルーズの様子を記しておく。

(一) ハワイ火山国立公園・虹の滝コース

ハワイ島はビッグアイランドと呼ばれ、我が国の四国の半分よりやや大きいが、よく知られているオアフ島の七倍の面積で、北部にマウナ・ケア(標高四二〇五メートル)、南部にマウナ・ロア(標高四一七〇メートル)の高山がありいずれも四〇〇〇メートルを超え、常夏の島だが雪が降り六月頃まで残雪を見ることもあ

るという。マウナ・ロアの南東にはキラウエアがあり、今なお活動中の火山で、太古の昔から噴火口は転々と変わり、最新の噴火口は一九八三年にできた。流出した溶岩は海岸道路を遮断し、今でも周辺では真っ赤な溶岩を見ることができるという。このキラウエアとマウナ・ロアを管理しているのがハワイ火山国立公園(Hawaii Volcanoes National Park)である。

キラウエア火口

黒く固まった溶岩上につくられた環状道路をクレーター・リム・ドライブ(Crater Rim Drive)といい、キラウエア・カルデラ(Kilauea Caldera)を一周する形で囲んでいる。まず資料室に立ち寄り、火山の模型や地図などの資料や、火山活動の実態を時間毎に記録している様子や映像による噴火や溶岩流の凄まじい状況などを見学した。資料によると、一九五九年一一月、キラウエア火口の東側に大噴火が起こり、地上約六〇〇〇メートルまで灼熱の溶岩を噴き上げ空を真っ赤に焦がしたという。

ハレマウマウ展望台に向かう途中、白煙の立ちのぼる風景に出合った。ガイドの説明によれば、熱い溶岩は草の根を溶かすので、雨が降ると水は地下まで浸透し易くなり溶岩に触れると忽ち水蒸気となって蒸発するという。この直下に溶岩があるという認識と火山活動の生々しさを実感した。マグマが活動し雨の多い地方ならではの現象かも。

クレーター・リム・ドライブを進むと、ハレマウマ

ウ・クレーターから程近い一周道路の南西隅に当たるところに、サウスウエスト・リフトという大きな地表の割れ目がある。　マグマにより発生する地震が原因で荒々しく大地が割れたもの。このリフトゾーンは、ハレマウマウ・クレーターから三〇キロメートル以上にわたり海へと続く。リフトゾーン沿いにはいくつものクレーターを見ることができる。

ハレマウマウ展望台へ行くため入口で下車して一〇分位歩くと、一九七四年に噴火した直径約九〇〇メートル、深さ約八五メートルの火口を一望できる展望台がある。このクレーターはキラウエア・カルデラの一部であるが、全体のスケールの大きさは勿論のこと、遠く空にも届くばかりの見晴らし、美しさは、暫し火山活動の凄まじさ、荒々しさを忘れてこのパノラマに見入ったことだった。このクレーターを囲む絶壁からは湯気が立ちのぼり、正にペレの女神が住むという聖なる火口の雰囲気は十分。

◆ペレの女神

ペレの女神は火を掌り火山を支配する神であり、ギリシャ神話の火の神は男だが、ハワイの火の神は女。そのせいか、移り気で、気ままで、短気という。このような性格からハワイの原住民たちにとっては、恐ろしい存在だった。伝説によると、女神はポリネシアから海を渡ってニイハウ島に上陸し、ハワイの島々を転々とし現在はハワイ島に住んでいるという。ハワイ島に来た時は、ちょうど戦争中だったが、火山を爆発させ溶岩を流してカメハメハ軍を助け、島民の人気を得たという。しかし、気まぐれな性格が災いしてか何回か理由もなく火山の大爆発を起こし、すっかり島民たちに恐れられるようになってしまった。女神の移住は、ほぼ北の島から南の島へとなり、これがハワイ諸島の火山活動の実態に一致しているという。また、ハワイの人々は言う。「火の神ペレが怒り狂った跡だ。最も大きな島が度重なる噴火でますます大きくなる」と。

（『ハワイの旅』実業之日本社より要約、引用）

ハワイ島の下で、太平洋プレートの源であるマグマが動いており、次の噴火が話題を呼んでいる昨今、一九八三年に始まったキラウエア火山の噴火活動や海中

のロイヒ海山などは地球上で最も活発な火山といわれ注目すべきである。火山地帯の溶岩上に立ち、ビッグアイランドのマグマの鼓動と迫力を感じた体験は忘れることができない。

◆虹の滝

ヒロ湾に注ぐワイルク川の火口から二・五キロほどのところにこの滝がある。高さ二四メートルで水量は豊か。もうもうと水煙をあげ陽ざしのよい時には綺麗な虹が立ち美事な滝の姿を見せるが、あいにくの薄曇りで残念。

(二) ハワイ島コナ歴史散策コース

コナでは大型客船は沖合で停泊し、テンダーボートで港へ渡る。コナはヒロと並ぶハワイ島の観光拠点である。有名なコナコーヒーは、温暖な気候に恵まれたアメリカ唯一の生産州で、ブルーマウンテン、キリマンジャロと共に高原産の高品質コーヒーとして知られている。島の西部ファラライ山の西側斜面のベルト地帯にコーヒー農園が集まり、一般向けに農園を開放しているところも多く、生産や焙煎などの見学、試飲をさせてくれる。　その中の一つ、コナ・ロイヤルコーヒーの見学を行った。売店で、コナ一〇〇%ものを豆、粉それぞれ買ったが、豆は大きさ、色、艶がよく揃っていて立派だったが、それなりの値段だった。

このコーヒーの栽培、生産事業の発展の陰には多くの日系人の多大の貢献の歴史があったことを知り感銘をうけた。

この地区には由緒ある教会が多く、日本式寺院も点在している。セント・ベネディクト教会を訪れた。田舎風の教会で素朴な佇まいながらも歴史を感じ、人々の厚い信仰心が伝わってくるようだった。

◆歴史国立公園（プウホヌア・オ・ホナウナウ）

プウホヌアとはハワイ語で「逃れ場」、「聖域」という意味。一五世紀頃のハワイ原住民にとり生活の一部分だったシティ・オブ・リフュージ（逃避場City Of Refuge）を復元したのが歴史国立公園（National Historical Park）である。統一前のハワイの島々では争いが絶えず、戦争中は逃れ場に避難した非戦闘員

（戦闘に加わらない老人、子供たち）や罪を犯した者を一時期ここで労務につかせ懺悔させたりしたのがこの場所だった。高さ四メートル、幅五メートルの石垣に囲まれた広さ約七三アールの場所で、神が無力者を守り、罪人の汚れを清める聖域だった。

大きな石垣の手前には、原住民の草葺きの家や、カヌー小屋、養魚池や、日本の碁を思わせる石作りのゲーム盤などがある。海側の石垣の中にはヘイアウと呼ぶ原住民が諸儀式を行い神聖な場所としていたところがあり、当時の社会の一端がうかがえる。

（三）カウアイ島ワイルア川とシダの洞窟

ワイルアマリーナから観光船に乗り約二〇分間、うっそうとした密林が両岸に迫る川を上って行く。周辺には古代の住居跡などもある。この観光船コースは、ハワイで唯一のもので、なかなか人気があってポリネシア系の男女がウクレレのメロデーの中、ハワイアンダンスやソングを披露してくれる。乗船者全員がダンスの手ほどきを受けながらハワイアンを楽しむ一時だ。川を行き交う船の乗客は互いに手を振り合いながら交歓して行く。桟橋に着き、ハワイの植物や花に囲まれた山道を五分ばかり登ると、全面シダでおおわれた絶壁が聳え、その中腹に洞窟が舞台のように口を開けている。雨量の多い場所柄（年間雨量は神山ワイアレアレで一三〇〇〇ミリ超）、山から流れ出る水により断崖の上から小さな滝が落ちている。この地はかつて原住民たちの王族が結婚式を挙げた場所といわれ、現在でもそれにあやかって結婚式場として一般に開放されている。洞窟をバックに奏でる音楽とともにハワイの結婚式の歌を聴いたが、ここで挙式した人々は、一生の思い出として強く心に残るに違いない。珍しい場所だけに、ここまで足を運ぶ人も多く、遠く日本から来る人もいるという。

（四）海上からキラウエア火山を見るイブニングクルーズ

昼間、キラウエア火山を巡るエクスカーションに参加したばかりだが、今夕は船上から赤味を帯びたオレンジ色の光を見た。一九時にヒロ港を出て二一時頃より観光。船から相当離れて遠い夜のことだから確かさに欠けるが、裾の部分では溶岩の流れらしい靄の中の

ナ・パリ・コースト

光がぼやけて映る。間断なく光る部分と瞬間的に光って消える光、そんな中で高く飛び上がる光、散る光などが交錯して夜空を照らしていた。昼間見た火山を思い出しながら、溶岩の流れ先はこんなにも活発なのかと改めて認識し遠くからの眺めを楽しんだ。

（五）海上から見るナ・パリ・コースト遊覧クルーズ

カウアイ島の北西岸は古いハワイアンたちにより開拓された最初の土地と考えられているという。船から見る限り、連綿と続く海岸線の山々は襞だらけ、断崖絶壁だらけだ。この荒々しい急斜面の崖は、海沿いの崖で途切れている。これは海の波が地表から引いて行くより早く、溶岩石を砕く際に形成されるからという。船は海岸寄りに速度を落としながらゆっくり進むが船体が巨大なだけに一般船のようには接近できない。でも近くで見る連山の色合いは、太陽の光の動きと共に変化して美しく、際立つ山肌だけに明暗がはっきりして見応えがあった。ここに差し掛かった頃には空には暗雲がかかり、気を削がれたが、間もなく次第に晴れ間も多くなり幸いだった。

（二〇〇六・記）

いなか暮らしを求める人々

小田晋作
（丹波新聞社社長）

「たんば・田舎暮らしフォーラム実行委員会」という団体が今年初め発足しました。

代表は昨年篠山市内に家を建て、神戸から引越した小森星児・神戸商大名誉教授。そのほか阪神間から丹波市、篠山市にIターンして来た人ら二十人近いメンバーです。私もUターン組の一人として加わっています。

この八月と九月、大阪と神戸で、都会の人たちに田舎暮らしを勧めると共に、ノウハウや心構えをアドバイスするフォーラムを、メンバー自らが出演して開いたところ、百人から二百人が聴きに来てくださるという、予想以上の盛況ぶりでした。来年一月十四日には、宝塚のソリオホールで第三回目を開く予定です。

その土地の出身者が、家業を継いだり親の面倒を見るために帰って来るのが「Uターン」ですが、特に縁があったわけではないが何らかのきっかけでその土地に住みつくようになるケースを「Iターン」と呼びます。今、この「Iターン」が全国的に増えています。

「住みつく」度合いは、別荘のように気が向いた時だけ、月に一度、週末だけ、あるいは都会の家と行ったり来たり、こちらを本拠に、そしてさらには、全く住みついてしまう、等々様々です。定かな統計はありませんが、その数は私の感覚では丹波市、篠山市合わせて、おそらく二千人は下らないのではないかと思われます。

年齢では、リタイアして余生をという人が中心ですが、中にはまだまだ現役で、一時間、二時間かかって阪神間の職場に通う人も。あるいは二、三十代でこちらに職場を見つけて定住する人もいます。

心強いのは、かなりの人が畑仕事などに興味を持ち自ら手がける、そのうち周囲の人たちと交わり、地域の活動にも関わるようになるということです。

兵庫県民会館（神戸市）を満席にした「たんば田舎暮らしフォーラムin神戸」

これまでの自分の経験を生かして色々な分野で活躍したり、この地で新たに起業する人も少なくありません。

民間ボランティア組織である「フォーラム実行委員会」を立ち上げたのも、そうした人たちで、学者、元アナウンサー、陶芸家、著述業、英語講師、専業農家（Iターン後の）、木材専門家等々、多士済々の人たちです。

丹波地域を初め、一足早く人口減少に向かい始めた地方を活性化させるうえで、たとえ完全な住民でなくても、田舎暮らし志向者が増えるのは、プラス要因です。

無論、新しい土地に溶け込むには、土地の気候風土や地域社会、しきたりなどに馴染むことが必要です。そうしたこととは隔絶して暮らす、また思惑がはずれて継続を断念する人も確かにいるでしょう。ですから、「きれいな空気を吸いたい」、「野菜を作りたい」と望む人たちに、事前にある程度の心構えをしておいてもらうことが大切です。

フォーラム実行委員会は、こうした点についてP

Rし、地域に溶け込みながら定住する人を増やしていくことをめざしています。とりあえず今年度はフォーラムを三回開き、これを足場に、移住希望者を情報面で支援したり、ネットワークを構築することなどを考えています。まず地元の空気に触れることが入り口ですから、すでに都会との交流に取り組んでいる様々なグループとも連携するようにしています。

いわゆる〝団塊の世代〟が定年を迎えようとする今、ある調査によると、田舎暮らしを志向する人は全国で三百万人いるそうです。希望の定住先として、兵庫県は沖縄や北海道に次いで高順位とのことです。

良さに気付いていない地元の人たち

このように丹波地域に関心が集まっていることについて、地元の人たちに話しますと、多くが「ほんまかいな」という反応を示します。自分たちが住んでいる所の良さについて、鈍感なのです。丹波出身の人たちも、さほど興味を持ってはくれません。しかしながら、フォーラムがあれだけの人を集めるのを目の当たりにし、私自身も確信が持てるようになりました。

場内では「自分で食べるものを作りたい」という声が随分ありました。ちょっと大げさに、文明論的に考察しますと、都市の人々はやがて来る食糧危機を予知し始めたのかもしれません。ソ連崩壊の混乱期、ロシアで大都市の人たちが飢餓を切り抜けられたのも、郊外に持つ家庭菜園で収穫するジャガイモに負うところが大だったといいます。

「私ら年寄りが行ってもじゃまにならないか」といった質問も出ましたが、決してそんなことはありません。丹波の方では、人口減に危機感を持つ集落ほど、新しく来る人を受け入れようという機運が強くなっているのが事実です。

「山ざる」読者の方々も、ご自身のUターンも無論歓迎ですが、周辺で田舎暮らしの話題が出ました際は、是非「たんば田舎暮らしフォーラム」実行委員会のことを知らせてあげてください。一度ホームページ（下記）をのぞいてくだされば、幸いです。

http://info.inaka.tv/

市内で中国人が急増、製造業を支える

丹波市

丹波市内に居住する全外国人は七九二名だが、中国人はその三八パーセントを占め、国籍別でトップ。そのうち七四パーセントに当たる二二二名の入国資格は、企業での研修となっていて、市内の企業が若年労働者の労働力不足を中国人に求めていることがわかる。彼らの大半は二〇歳台で、一般的に「3K」と呼ばれる、縫製、機械加工、電気部品組み立て、包装などの業種で働き、市内の製造業を支えている。ある雇用者は、「安価な労働力というだけではなく、労働市場が流動的になっている現状では、外国人は比較的安定した雇用が確保できるということもメリットである」とコメントしている。

（平18・2・16日付）

柏原病院パンク寸前、医師不足が深刻化

柏原町

一昨年から始まった新臨床研修医制度の影響で、県立柏原病院が深刻な医師不足に陥り、パンク寸前の危機を迎えている。もとは四一名だった医師が一年間に九人も減少し、今後も医師不足は続くと見られ、緊急対策が必要とされている。

そこで同病院と丹波市医師会は、軽症患者には、「まずかかりつけ医で受診」を啓発することにした。実際、本来同病院が果たすべき高度な医療を提供するという役割―緊急医療や入院―は全体の五パーセントにしかなく「まずかかりつけの医者の受診、それから病院」という意識を市民に周知徹底してもらうことになった。（平18・3・19日付）

これに関連した記事が（平18年・9・17日付）の一面に「柏原病院の医師不足―影響じわり」と掲載されている。丹波市消防本部の救急搬送の実績から、前年のデータと比較して、柏原病院への搬送が減り（五八％→四六％）、市外への救急患者の搬送数が増加（一〇・四％→一五・六％）していることで、柏原病院の緊急事態がうかがわれる。

全国高校野球、丹波出身の球児が活躍

丹波市

夏の甲子園では、春日中学出身で福知山成美（京都）の駒谷謙君（三年生・投手）と、山南中学出身で東洋大姫路（兵庫）の柏原大樹君（三年生・センター、5番打者）が大活躍した。両校は準々決勝のベスト8に進出し、惜しくも4強はならなかったが、福知山成美は鹿児島工（鹿児島）に延長10回で惜敗、東洋大姫路は駒大苫小牧（南北海道）に終盤での逆転負け、といずれも完全燃焼したすばらしい試合振り。地元から駆けつけた応援団や郷里の友人たちは「夢を与えてもらった」と感動を隠せなかった。

（平18・8・20日付）

村上信夫さんのエッセイが副読本に掲載

春日町

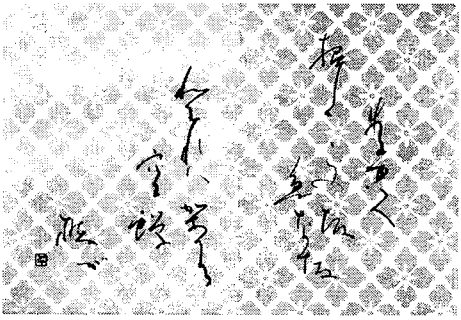
春日町出身のNHKのアナウンサー・村上信夫さんのエッセイが、新年度発行の中学一年生の道徳副読本（学研発行）に掲載された。俳優の森繁久弥さんをはじめ、著名人による三五編のエッセイのうちの一編として納められている。NHK入局間もない頃、赴任先へ訪ねきた父親が、新聞紙に残した「元気でナ」というメモについて書かれている。

■会員が書いた本

原谷洋美著『一陽来復』

短歌研究社 発行／定価2000円

洋美さんとの再会は、三十七年ぶりに第一歌集『馬を遣はす』のお土産付きで実現した。彼女に備わった天賦の才は、高校時代すでに『蛍雪時代』等の誌上で遺憾なく発揮され、皆の憧憬の的であった。二物を与えられた元美少女のアイドルぶりは未だ健在で輝いて見えた。そんな彼女に神は「病」という試練を与え給う。そして、第二歌集『一陽来復』は上梓される。彼女は優れた脚本家であり、演出家、監督、その上主役でもあり続ける。第一幕「馬を遣はす」の舞台には身近な動植物や少年、娘、空……あらゆる配役が登場しては、主人公の心の内を各々が見事に演じ切る。そこには無邪気な乙女の弾んだ心、茶目っ気たっぷりな遊び心が介在し、全体を通してどこか夢見心地な主人公が投影される。観客は自分の身に重ね合わせては、その言葉の響きの心地よさに酔いしれる。



青空へ招くこの坂急な坂登れば架かる
空蝉橋が
（歌集『一陽来復』より／藤原ひさ子筆）

ところが、第一幕も下りようとする頃、第二幕「一陽来復」を予見する場面も演出され、舞台は移る。病を得た主人公は、現実と対峙し、落胆し、皆に支えられ、遂に病を克服、希望を抱いて歩き出す。この重いテーマの舞台を救ったのは紛れもないこの期に及んでも衰えることのない旺盛な好奇心、遊び心が一層注ぎ込まれた脚本、配役、演出の妙にある。最後に主人公自身による、静かで、病を克服した者のみが持つ力漲る声で流れるナレーション＝病をみつめ、自分を考え、日々を送る手段としての短歌がありました。どれほどの思いの丈をはき出したことか。世に言う魂振りであり、魂鎮めであったと実感しています。＝今まさに大地を踏みしめ、次の舞台へと翔び立ちました。またしても、涙し陶酔する観客が送る鳴り止まぬ拍手を背に。―幕―（注）著者自身の手になる舞台装置（装画―切り絵）も楽しめる。

（藤原ひさ子）

■郷里について書かれた本――

芦田史朗編『森と水と人のふれあいの径水分れ』

地球の温暖化により、極地の氷が溶けて海面が百米上昇すると丹波市氷上町石生の「水分れ」のあたりから南北に海峡となって本州は二分される。丹波市出身者とくに氷上、青垣、春日町にゆかりのある人なら、水分橋はご存知だろう。ここには、本州で一番低い分水界が東西に走っている。もっとも低いところは、福知山線の踏み切りの近く宿畑で標高九五・四五米、水分橋で一〇一米である。つまり、降った雨は、ここを境にして、南北に分かれて流れるのである。南に流れて加古川から瀬戸内海（太平洋側）へ、北に流れた水は由良川から日本海に入る。

この本は、日本の中でも地理的に特別の意味を持つ本州最低の分水界「水分れ」についての多彩な解説書である。執筆者は、細見末雄、里久彦、小森貢、開田齋、永井壮一郎、徳田八郎衛、編者が芦田史朗の各氏、郷土の教育界において、地歴博物の研究において多大の功績のある方々である。中で異色は、元防衛大教授の徳田氏。関東の郷友会員で独り丹波在住ではないが愛郷心の強さでは誰にも負けない人。昭和三十年頃、柏原高校生時代のことである。当時豪腕をもって鳴る岐阜出身政治家大野伴睦氏は、琵琶湖を利用しその南北を切り開き太平洋と日本海を結ぶ運河をつくろうと大真面目で運動していた。徳田氏は、大野氏に手紙を書き、丹波を走る一七五号線沿いに運河を掘った方が賢いと進言したという。大野氏は「そんな低い分水界があったとは知らなかった。貴重な意見をありがとう」と、徳田氏の名前入りの万年筆を贈ってくれたという。江戸時代、物資は北前船で北陸から日本海、瀬戸内海経由で運ばれていたが、宝永七年（一七一〇年）ごろ、大阪天満の岡村善八は加古川と由良川を連絡して距離を短縮しようという壮大な計画をしたという。

今から二万年ほど前、石生付近は平坦な湿原で、竹田川は今の由良川ではなく逆に加古川に注入していたという。この影響が魚の分布にも及び、本来日本海側型のヤマメと太平洋側型のアマゴが佐治川に混生する。本州の真ん中、背骨に位置するにも拘わらず低湿地、沼地であったから沼貫（ぬぬぎ）といった地名も残ったのであろう。

「水分れ」は、「身分れ」に通じ、縁起が悪いので婚礼の車は、水分橋を避け迂回するのが慣わしだという。

この本の「特別寄稿」で、辻重五郎丹波市長は、「『水分れ』は丹波市の宝物であり、丹波市を象徴するもの」という。河合雅雄丹波の森公苑名誉館長は『国の天然記念物になってもよい学術的にも貴重な自然財』だと推奨する。

（上野重喜）

■郷里について書かれた本――

兵庫県の歴史散歩編集委員会編
『兵庫県の歴史散歩―東播磨・西播磨・丹有・但馬』
山川出版社 発行／定価1200円

有馬温泉で有名な有馬郡が三田市の誕生で消滅したため、「丹有地区」という伝統的な地域名称も絶滅したかと悲しんでいたが、本書には「丹有」が健在なのでホッとした。それもそのはず、本書は、「新全国散歩シリーズ」の一環として一九九〇年に上梓された兵庫県高等学校教育研究会歴史部会編「兵庫県の歴史散歩」の改訂版であり、執筆者はいずれも県下高校のベテラン歴史教員である。教育行政の世界では、今なお「丹有」は現役の用語なのだ。

歳月が経っても歴史遺産は変らないが、アクセスする道路や遺産周辺の環境、市町村名などが大きく変ったから改訂する必要はあったのだ。二〇〇〇年には篠山城の大書院も復元されたこと、和田の岩尾城の登山道も、本来の親縁寺口よりも和田小学校裏口の方が整備されてよくなったなどの新情報が記されている。

本書の特徴は、「福知山線に沿って播丹国境の町山南から、織田家一〇代の城下町柏原の史跡を訪ねる（『丹有』第四節『山南町から柏原町へ』）」や「水分かれの町氷上から、但馬街道の宿場町青垣の史跡を訪ねる（同上第六節『氷上町から青垣町へ』）」のように地理的、交通的な考察と歴史的な考察が、よく行き届いていることである。評者も旧氷上郡の観光ガイドマップをかなり集めたが、山南町を播丹国境の町と捉え、青垣町を但馬街道の宿場町として紹介する観光案内書など稀であった。そして訪ねてくる旅人の目線ではなく、そこの住民の感覚で氷上郡を六つの町に切り分け、町ごとに遺跡や新しい観光名所を並べたものが大半で、市島町白毫寺と春日町黒井城主との親密な関係など記したものは見たことがない。

また、どの県内行政案内、観光案内でも、三田市は摂津地域として西宮や宝塚と同類に扱われている。最近はベッドタウン、ニュータウンとしての性格を強めているから、この区分も妥当性はあるのだが、歴史的には、むしろ丹波に近い。本書の「摂丹を結ぶ町三田」という表現は味わい深い。

県作成の行政・観光ガイドでは丹波地域への鉄道、高速道路によるアクセスポイントとして篠山と柏原が併記されていたが、今では篠山だけとなった。そんな丹波市落ち目の時代にも本書は分け隔てなく篠山市と丹波市の歴史遺産を記述している。車で丹波市を訪れる来客に進呈したい本である。

（徳田）

■郷里について書かれた本――

石井正紀著
『技術中将の日米戦争
陸軍の俊才テクノクラート
秋山徳三郎』
光人社 発行／定価686円円

春日町黒井に生まれ、柏原中学第八回生として陸軍士官学校へ進み、工兵将校として任官後、その優れた理数系学科の才能を買われ、員外学生として東京帝大工科大学土木工学科に学んだ陸軍のテクノクラート秋山徳三郎中将の伝記である。世界各地で石油プラント建設に携わった著者は、戦前の陸軍の燃料行政や研究が戦後の石油企業に大きな遺産となったのを知り、仕事の合間に研究した成果を「陸軍燃料廠（光人社）」として上梓するが、その際、興味を抱いたのが、最後の燃料廠長を務め戦後は道路関連企業で活躍する、この丹波の俊才であった。

まずは黒井の生家と柏原高校へ飛び、続けて故人が関係した企業や士官学校同期生の追悼録、技術戦史関連資料、さらには敗戦直後に成松出身の妻を喪った後、再婚した元子の残した貴重な資料にアクセスし、わずか一年後に本書を上梓する。評者は、秋山の生い立ちや業績だけでなく、ブルドーザーのように走り回って、それらを短期間で掘り起こした著者の集中力に先ず圧倒された。

工兵から陸軍航空、鉄道、通信、船舶工兵などが分科していく前から幅広い技術将校として現場や行政で活躍した秋山は、日米戦争の前夜には将官として築城本部で土木機械の導入を図り、航空本部では燃料廠の設立と高オクタン価ガソリン製造に向けた研究部の充実に奔走する。京都帝大工学部の福井謙一講師が応召しそうだという知らせにいち早く短期現役士官として燃料廠技術研究所へ引っ張り、大学と研究所を行き来させて文部教官と現役士官を兼任させたのも秋山の手腕として描かれている。

だが評者が興味を持ったのは、この二つのエピソードである。柏中で一年後輩の大西瀧治郎や吾が父、徳田冨二が、わざわざ一年余分に高等小学校へ行き、満十三歳で入学したように、秋山も明治三十七年に満十三歳で入学している。篠山や姫路には見られない、柏原だけの謙虚な（?）慣習である。

鉄道は開通しているのに秋山は八キロ歩いて柏中へ通学する。しかし現在のスポーツカーのような存在だった自転車を買ってもらい、夏休みには福知山へ遠乗りもした。郷里についても色々と知ることの多い良書である。ちなみに評者がこの大先輩の存在を知ったのは、柏原高校へ入学して孫の浩一郎君と机を並べた時、今から半世紀前であった。（徳田）

◆足立　正さん

この夏、脳梗塞をやり、ゴルフはさっぱりです。幸い脳1cm程度で割りと軽かったので、碁の方は大丈夫でした。毎日近所の仲間とウロ（烏鷺）を闘わせています。（平17・11・5）

◆井口　剛さん（柏原高校長）

歴史と伝統ある「ふるさとの会」に出席したく思いますが、当日管内の県立学校の周年式典に代表として出席しなければなりません。残念ですが欠席させていただきます。ご盛会をお祈り申し上げ、今後も益々「ふるさとの会」のご発展をお祈り申し上げます。（平17・10・31）

◆石田勝彦さん

去る10月30日、旧大路村小中学の同窓会（昭23卒業）に出かけ、旧交を温めてきました。（平17・11・4）

◆井出恭子さん

秋深し人恋しくもありなつかしくもあり　故郷は遠きにありて思うもの
時には近く語りたくもあり
（平17・11・1）

◆伊藤富士子さん

ふるさとも丹波市となり、ますます発展することと思います。ご案内をいただきつつ、出席できず残念です。（平17・11・4）

◆井本義一さん

今回も36号を見て、結果的にこの通信欄に3年連続で苦言を呈することになり、驚いています。詳しくは、「折々の記3」にて、この会誌をより良いものにするために、敢えて記述させていただきます。

6～7年以上前（日本橋千疋屋在職時に）会費を前払いした記憶あり、その後当年度分は完納しており、現時点で事務局サイド会計帳簿上で前払いはいくらしているか、電話か葉書でお知らせください。次年度支払い時に、調整させていただきますので。

誠に恐縮ですが、「36号」2冊を別送ねがいます。（平17・10・31）

◆岩槻邦男さん

原則、毎週三田へ通っています。ときどき丹波へ行ったり、人々と会ったりしています。バタバタしており、今年も出席できませんが、盛会を祈念いたします。（平17・11・1）

◆岩村丈子さん

9、10月の2か月間に、部屋内で計6回も転倒し、外出もできず、おとなしくいたしております。丈夫な折の日々がなつかしく思われます。とにかくがんばります。（平17・11・2）

◆植田憲雄さん

昨年は市長選挙前で欠礼しました。その時の約束どおり、今年は市長を連

れて初見参と参りたく存じます。よろしくお願い致します。（平17・11・1）

◆上村愛子さん

身体に支障のない間にと、昨年は嫁と台北台南へ1週間、故宮美術館も3日間かけてみてきました。今年は6～7月にノルウェーへ。そしてルーテル教会の本部へ。色々の経験をしてきました。「ふるさとの会」は京都へ出かける予定が入っていますので欠席です。

（平17・11・12）

◆大垣忠男さん

年会費2千円は、昨日振り替え用紙にて振り込みました。（平17・11・2）

◆大木千里さん

「生き過ぎて　我も寒いぞ　冬の蠅」は柏原出身の田捨女の句であったように記憶していますが。当年81歳、まだその境地に達したくない今日この頃ですが、名簿から知った人の名前が少なくなってゆくことが寂しいかぎりです。

（平17・11・2）

◆大久保和也・士子さん

5月に転勤のため転居しました。長い間「山ざる」を送っていただきまして、ありがとうございました。

〒665－0812宝塚市口谷東1丁目5－15－308　電話0797－80－3919

（平17・11・1）

◆大地富美子さん

毎年「山ざる」誌をご送付いただき、感謝申し上げます。隅から隅まで拝読、楽しませてもらっています。歩行困難のため、欠席させていただきます。

（平17・11・7）

◆大野善三さん

定年退職して毎日が日曜日ですが、医学ジャーナリスト協会会長として、忙しくボランティアを行っています。

（平17・11・1）

丹波の風景

◆桂　照子さん

暮らしよい季節になってまいりました。郷友会に多くの方々ご出席になりますように……。（平17・11・1）

◆可部美智子さん

46回目の個展が終わり、ほっとしています。（平17・11・1）

◆岸部正巳さん

足が悪く車椅子を使わないと田舎へも帰省できません。一度行ってみようと思っています。（平17・11・1）

◆久保良雄さん

今回都合により出席できませんが、何らかの方法で当日平成18年「神宮暦」をお届けしようと思っています。

（平17・11・15）

◆河野征美さん

住居表示が変更になました。

（旧）横浜市金沢区六浦2170—34

（新）横浜市金沢区六浦5—14—28

（平17・11・9）

◆河本幸子さん

お蔭様で元気に致しております。郷土の様子もよく判り、いつも楽しく拝見しております。（平17・11・1）

◆小谷　崇さん

7月に旧制柏中44期生の卒業60周年の同窓会にでるために、久しぶりに「丹波市」へ行きました。折りしも、丹波市立植野記念美術館で、戦没学生の「無言館　遺された絵画展」を開催していて、みんなで見学しました。私たちは終戦時、17～18歳でしたが、はやくも予科練へ行き、特攻隊になって戦死した級友がいます。平和憲法を守り抜きたいというのが、肌身に感ずる実感です。（平17・11・2）

◆小林忠雄さん

住所が変わりました。

〒320—0048　宇都宮市北一の沢町21—8ラワール201号　電話028—621—4738

（平17・11・7）

◆小林和子さん

ダンスの会の行事が入っていますので、欠席します。（平17・11・5）

◆近藤　剛さん

勤務のため、大阪へ移転しております。関東氷上郷友会の益々の発展を祈念しております。

〒526—0004　箕面市牧落3—16—2ルミエール牧落201　電話072—724—8057

（平17・11・7）

◆笹倉良正さん

定年までは「動」が趣味でしたが、腰の手術後（4年前）は「静」の趣味を楽しんでいます。（平17・11・1）

◆篠原よね子さん

実は11月4～8日まで銀座「かねまつ」にて作品展をいたしました。そのあといろいろ忙しくて……。今回は欠席させていただきます。皆様によろしくお伝えくださいませ。

（平17・11・11）

◆滝　勝康さん

移転しました。よろしくお願いいた

します。

〒359－1111　所沢市緑町2－10－8－113　電話042－923－1048

（平17・11・1）

◆祐安夏恵さん

78歳を過ぎ、まだ仕事ができることを嬉しく思っています。年をとるごとに、ふるさとがなつかしく、せめて同郷の方々にお目にかかりたく思っています。

（平17・11・3）

◆高田美佐子さん

「山ざる」を楽しみにしています。遠く離れて唯一＝郷里のことを＝知る情報誌です。

（平17・11・8）

◆竹内博子さん

会誌36号ありがとうございました。左手のひどいしびれでも、一人暮らしは雑用に追われています。年末までに雑用は片付けておきたいとあせっても、年齢の限界を感じている年になってしまいました。

（平17・11・11）

◆竹下秋子さん

「山ざる」送っていただきましてありがとうございます。ふる里の風景をただただなつかしく見入りました。

（平17・11・5）

◆宅見　宏さん（県立氷上高等学校校長）

丹波市も少子化の波が押し寄せております。平成17～19の3か年で25億弱の莫大なお金をかけて、校舎の耐震化工事と一般改修を進めているところです。

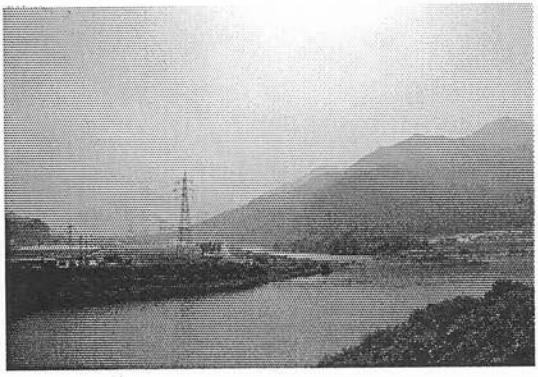
（平17・11・2）

◆龍見　豊さん

7月に静岡県より富山県上市町に移転しました。

〒930－0362　富山県中新川郡上市町稗田74－1－402　電話076－473－1746

（平17・11・3）



丹波の風景

◆谷垣美代さん

孫六人、ひ孫九人にかこまれ余生を楽しんでおります。（平17・11・6）

◆出町京子さん

昭和27年柏原中学校卒業164名のうち、41名が古稀を記念して湯村温泉に行きました。大きな幸せを感謝しました。

（平17・11・12）

◆千葉淳子さん

いつも大変お世話様になっております。みなさまには、ごきげんよろしくお過ごしのこととお喜び申しあげます。是非この機会に皆様との出逢いを楽しみにしていましたが、目下病院通いで残念ではございますが、欠席させていただきます。皆様によろしくお伝えくださいませ。立冬も過ぎました。日増しの寒さくれぐれもご自愛くださいますよう、お祈り申し上げます。

（平17・11・13）

◆出町京子さん

昭和27年柏原中学校卒業164名のうち、41名が古稀を記念して湯村温泉に行きました。大きな幸せを感謝しました。

（平17・11・12）

◆田　敏夫さん

毎日元気で健康維持のため、45分ぐらい歩行しています。

（平17・11・12）

◆田　晴通さん（丹波市郷友会会長）

丹波新聞小田社長にすすめられて、東京の催しに参加させていただくことになりました。家内とともにまいります。

（平17・10・23）

◆中村允也さん

私は東京に来て60年を経ています。この間、若いときに一度、新年会に出席しました。代議士（私の極めて近い人もいましたが）の後援会のようでありました。身近な人もいませんでしたので、なんの感慨も得られませんでした。よって以後の会には出席していませんし、本を頂くのも勿体なく考えています。

◆長澤　剛さん

秋田から仙台に移転しました。

（旧）秋田市新尾割山町5－45

（新）〒989－3125　仙台市青葉区下愛子字原前11－2　電話022－391－7704

（平17・11・8）

◆西川宣孝さん　氷上ゴルフ100回大会に初参加し、楽しい一日を過ごさせていただきました。今後もよろしくお願いいたします。

（平17・11・14）

◆抜井祐代さん

平成17年12月23日より左記住所になります。

〒261－0013　千葉市美浜区村瀬1－6－4　ファーストウィングD302

（平17・11・2）

◆蓮沼秀明・よし子さん

このたび左記のところに転居いたしましたのでお知らせします。こちらの方面にお出向きの節はぜひお立ち寄り下さるよう御待ち申しあげます。

〒230－0046　横浜市鶴見区小野町43－3－901　電話045－502－6371

（平17・10・21）

◆林田孝子さん

満105歳になりましたが、お蔭様で元気に暮らしております。歩けませんがゴロ寝で、食欲も旺盛。一人で箸を持って食べています。（長男侃代筆）

（平17・11・12）

◆東田　実さん

父も10年前までは、楽しみに九段会館まで行っておりましたが、昨年10月に倒れ、右半身マヒがのこり、現在老人施設でお世話になっております。早速「山ざる」を持って行きましたら、なつかしそうに見入っておりました。常岡様の個展には、母と二人で伺っております。（娘佐藤幸子）

（平17・11・七）

◆平元富美子さん

遠方のため出席できません。（利尻島在住）

（平17・11・7）

◆藤田典明さん

住所が変わりました。

〒666－0016　川西市中央町8－14－505　電話072－758－1016

（平17・11・8）

◆藤原知徳さん

馬齢を重ねること80年―早いものです。だんだん足腰が弱くなり、耳が遠くなり、目もかすみ。やはり年はとりたくないものです。でもまだまだ頑張りだと思っています。（平17・11・12）

◆堀井隆川さん

いつも欠席ばかりで申し訳ありません。立場上土曜日・日曜日は家（寺）をあけることができず、ご寛恕ください。御盛会を祈ります。

（平17・10・30）

◆前田和秀さん

平成17年11月1日付けで勤務先がかわりました。

〒356－0014　ふじみ野市福岡新田4－1　医療法人恵雄会介護老人施設「さくらの里」施設長。電話049－269－6600　ファックス049－669－6601

なお、現住所も市町村合併で変わりました。〒356－0008　ふじみ野市元福岡3－12－11　電話049－264－6300

（平17・11・14）

丹波の風景

◆三宅良夫さん

10月12日、権太会＝柏高29年卒業生ゴルフコンペ（京都グランベール）に参加、14、15日、丹波へ墓参に帰ってきました。仕事をやめて暫く落ち着きませんでしたが、（今年5月勤め人生活を終えました）まずは健康に暮らしています。

（平17・11・1）

◆八木信行さん

お誘いありがとうございます。あいにく当日は職場の旅行会と重なっており、（ふるさとの会に）出席できないのです。盛会を祈ります。幹事お疲れ様です。

（平17・11・12）

◆山口和久・恵理子さん

11月2日に初孫が生まれました。凪人（なぎと）と命名しました。皆元気にしております。

（平17・11・12）

◆山本明男さん

私自身も色々なことがある昨今ですが、元気にやっております。店（りんごの絆）での丹波のすごさもかなり浸透してきました。誇りに思っています。

（平17・11・17）

◆山本一志・八重子さん

夫婦元気で過ごしています。今年も旅行と重なり残念ながら出席できません。

（平17・10・30）

◆若森敏郎さん

CO_2の排出削減、アスベストの問題など緊急の課題が多くなりましたので、これからも元気でボランティア活動を続けます。……来年は小生も傘寿を迎えます。いまのところ達者でおりますので、来年の「ふるさとの会」では、皆様にお目にかかれるのを楽しみにしています。

（平17・10・30～11・5）

◆渡辺則幸さん

今春（平成17年）すこし早めの定年扱いで、32年間勤務の松下電器を退職しました。母が満90歳となり認知症もかなりひどくなり、時々市島町に帰省しております。今回こそ出席を楽しみにしていたのですが、次回は必ず……。よろしくお願いいたします。

（平17・11・10）

◆訃報

平成17年9月から同18年8月末日までに事務局に届いた訃報です。こころよりご冥福をお祈りします。

安藤　英二殿　平成14年3月
永井　　勇殿　平成16年3月1日
藤田タカ子殿　平成17年3月27日
桑谷　暁円殿　平成17年7月8日
田中　茂雄殿　平成17年8月4日
臼井　猛史殿　平成17年8月26日
清水　正男殿　平成17年9月2日
黒田　　守殿　平成17年9月20日
波多　洋三殿　平成17年10月10日
田中　篤郎殿　平成18年8月
森田　節子殿

◉寄附者芳名

清水　貞子殿　二〇、〇〇〇円
田　晴通殿　二〇、〇〇〇円
（関西丹波市郷友会長）
氷上ゴルフ会殿　一四、一五〇円
植田　憲雄殿　一〇、〇〇〇円
（柏陵同窓会長）
進藤昇・西山信彦殿　一〇、〇〇〇円
（兵庫県東京事務所）
辻　重五郎殿　一〇、〇〇〇円
（丹波市長）
中居　篤子殿　一〇、〇〇〇円
池上　忠志殿　八、〇〇〇円
上田　正文殿　八、〇〇〇円
坂上　勝朗殿　六、〇〇〇円
足立　吉雄殿　五、〇〇〇円
荻野　武殿　五、〇〇〇円
金出　一郎殿　五、〇〇〇円
谷口　捷殿　五、〇〇〇円
谷口　浩章殿　五、〇〇〇円
渡辺　則幸殿　五、〇〇〇円
足立　和孝殿　三、〇〇〇円
生田　清弘殿　三、〇〇〇円

大野　義昭殿　三、〇〇〇円
木下　真理殿　三、〇〇〇円
坂上　明殿　三、〇〇〇円
高見　秀史殿　三、〇〇〇円
永井　博見殿　三、〇〇〇円
村上　久夫殿　三、〇〇〇円
山口　和久殿　三、〇〇〇円
山本　喜則殿　三、〇〇〇円
山口　泰男殿　二、〇〇〇円
池田　忍殿　一、〇〇〇円
稲岡　俊一殿　一、〇〇〇円

大地富美子殿　一、〇〇〇円
岸本　勲殿　一、〇〇〇円
木呂子恵美子殿　一、〇〇〇円
直田　正殿　一、〇〇〇円
鈴木　和栄殿　一、〇〇〇円
千種　倫幸殿　一、〇〇〇円
藤田　純殿　一、〇〇〇円
本城　英明殿　一、〇〇〇円
吉竹　覚殿　一、〇〇〇円
塩見みつゑ殿　五〇〇円
千葉　淳子殿　五〇〇円

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。

◉

テーマ：①ふるさと随想
②近況エッセイ
③会員だより（短信）
④催し（個展・同窓会など）
⑤丹波を撮る（写真）など

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成19年8月20日です。

原稿枚数：400字詰4～5枚程度

送付先：〒247-0005 横浜市栄区
桂町1－1－1－101
㈱ホンゴー出版内
『山ざる』編集部
TEL 045－895－2712
FAX 045－895－4338
Eメール hongo@mocha.ocn.ne.jp

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

公演

◉西崎祥さんの丹波舞踊公演

西崎　祥さんは去る7月2日、丹波の森公苑ホールで「西崎　祥舞踊公演」を開催しました。「恵まれない世界の子どもたちに贈る」チャリティ公演で、11回目に当たる丹波公演でした。今回は、第一部が「柏原おどり」や「谷村新発意おどり」などの「郷土芸能」、第二部が「民謡お国めぐり」で全国各地の民謡を、西崎さんが振り付け構成した24演目の踊りが熱演され、若者たちに人気の「ストリートダンス」の異色の演目も加わって、会場いっぱいを埋めた観客で人気を博しました。

長唄「石橋」

展覧会

◉常岡画伯の親子展、3月に丹波で開催

柏原町出身の日本画家、故常岡文亀画伯と、ご長男の幹彦画伯の「親子展」が、去る3月11日から4月16日まで、丹波市立植野記念美術館で開かれました。この「親子展」には、同館に寄贈された文亀氏の作品5点のほか第3回帝展（21年）で初入選した屏風「百日紅」、第10回同展（29年）で特選を受賞した屏風「鶏頭花」など文亀氏の作品19点、また昨年、紺綬褒賞を受賞された幹彦氏が「玄舞」などの大作17点が出品され、人気を呼びました。

初日の11日には、幹彦氏がそれぞれの作品を解説する「ギャラリートーク」が行われました。

同窓会

◉平成18年度柏陵同窓会東京支部総会開く

平成18年6月25日(日)、千代田区の九段会館において開催されました。幹事学年12回生の皆様の運営で今年も盛会裏に開催できました。恒例の柏陵セミナーは氷上町市辺出身の和歌山大学教授、足立正喜氏を講師にお迎えし「少子高齢社会と年金・税制」というたいへん身近な講話を頂戴しました。

今年は役員改選の年にあたり、2期連続で会のためにご尽力いただきました上野重喜支部長から高見秀史支部長にバトンタッチされました（主な役員改選については後記いたします）。

また同窓会本部におきましても、10余年にわたり会の発展に尽くされました植田憲雄会長が退任され、副会長であられた田中洋行氏が会長に就任されました。

来年は本校百十周年にあたります。本校の発展とともに、会の今後について新役員の方々に期待が寄せられます。そんな中において、永年の懸案でありました東京支部ホームページの立ち上げがようやく着手されることになりました。後輩先輩のつながりと、郷里と東京のつながりをメインテーマに、岡吉明氏を中心に月一～二回の会合を持っております（自由参加）。www.max.hi-ho.ne.jp/hakuryo-ts/にサンプリングを開いております。掲示板も設けておりますので内容に関するご意見やご提案をお寄せ下さい。

柏陵同窓会懇親会風景

まずは腹ごしらえのバイキング

「新役員」支部長：高見秀史（市島）副支部長：久保春雄（山南）岡吉明（柏原）上田道代（氷上）上高子（氷上）谷口浩章（氷上）幹事：塚口智（氷上）足立知佳子（春日）

（事務局・藤田）

◉柏高8回生古稀記念旅行

今年3月28、29日、第8回生卒業50周年古稀記念旅行があり、行く先は北陸加賀山代温泉だった。総勢90余名、関東方面からの参加者は6名。バスは柏原から出発の1号車と新大阪から2号車で、私は新大阪集合の2号車だった。大津で2台のバスが最初に合流、懐かしい人達とご対面。丹波弁も飛びかって、50年振りに会った人もいた。

キリンビアパーク見学等の後、山代温泉「ゆのくに天祥」に到着。関東から直接現地参加の人4名。大広間でご馳走、おしゃべりも弾んで和気藹々の宴会だった。最後に柏高校歌で折角盛

上下の写真、別々の同窓会ではありません。一枚に収まらず二組に別れての記念撮影でした。

り上がったのに、応援歌の時、作詩者ということで前に出された私は、曲をしっかり覚えておらず、まともらなくて申し訳なかった。昨年の福知山線の事故の頃に、いつも皆の面倒を見て、関東から行く私達を暖かく迎えて下さった岡林（克）さんが亡くなり、もう会えないのは寂しいことだった。

2日目は、ガラス館やお菓子の加賀藩に寄り、東尋坊に行く途中、まだ道端に雪が残っている所で、急に雪模様になり、ひととき吹雪の舞う中をバスが通るという、何とも趣深（おもむきぶか）い経験をさせてもらった。新潟から関東の3人が帰り、私と足立さんは多賀で1号車の人達と名残りを惜しみ、2号車で新大阪経由で帰った。

いつも同窓会の度に和服姿が素敵で、私が憧れにも似た気持で遠くから眺めていたOさんとバスで隣り合わせになり、親しくお話しできた。この方や、何人もの人の50年来の越し方や今の生き方に、感銘受けることも多く、春日部中学出身のお仲間も6名居て、懐かしく楽しくて本当に有意義な2日間だった。もう全体としての同窓会はこれで最後だろうとのことだったが、今度の会では昨年から準備万端。いろいろとお世話下さった方々に、心から感謝している。

この年になると大事な人達との別れが多くなってきた。自分も故障が多い身体なので、参加出来たことの幸せをしみじみ思う。

（木呂子）

同好会

◉氷上ゴルフ同好会
ますます盛況です

昨年9月に100回の節目を迎えました氷上ゴルフ同好会も、当会誌が出る頃には104回目を数えます。100回大会を期に渡辺隆男会長が勇退され、水船隆昌氏が会長に就任されました。渡辺会長の洒脱なスピーチはパーティーの一つの風物詩でもありました。水船新会長のもと、岡吉明世話役のスピーディな、お手配も相俟ってますます盛況になっております。

高齢化という現実はありますが、ますますレベルアップしておりますのは道具の進化というべきか、丹波人の意気軒昂というべきでしょうか。毎回ベストグロスが80台というのはすばらしいものがあります。丹波出身のお若い衆（あるいはその知己の方）のご参加をお待ちしております。会のホームページ http://www.pcc-taiyo.co.jp/ をご覧下さい。

〈この一年の成績〉

○第101回（日本CC）
1・矢持　信行（87）
2・大野富士夫（92）
3・荻野喜久雄（103）

○第102回（取出国際GC）
1・松下　文雄（90）
2・三宅　良夫（96）
3・岡林　逸男（90）

○第103回（ザ・ゴルフクラブ竜ヶ崎）
1・岡　吉明（94）
2・大石佐代子（100）
3・足立　謙悟（102）

（藤田徹・記）

本誌発行にご協力有難うございました◆

猿友会

井田悦子
喜田綾子
長尾貴美代
大石佐代子
小糸イキ
安原三智子
小田明子
笹倉郁子
塩見みつえ
可部美智子
篠原よね子
渡邊貴美子
岸本昌子
千葉淳子

ビル・マンションの総合管理

株式会社 長友
ちょう ゆう

代表取締役 谷口浩章
(氷上町出身)

本社 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2－6
TEL 03 (3257) 9611 FAX 03 (3257) 9619
E-mail h. taniguchi@mx4. ttcn. ne. jp

大阪支店 〒541-0048 大阪市中央区瓦町3－5－7
TEL 06 (6222) 5076 FAX 06 (6222) 5025

akeland

エクステリア専門商社

株式会社 トコナメエプコス

会長 松下文雄 (柏原町)

代表取締役 広瀬寿和 (山南町)

〒160-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル
TEL 03－3354－0211 FAX 03－3354－7767

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木　村　つ　た　江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘2－39－5
電話 03－3300－6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状　第2-319号
技術士（電気部門）登録証　第15810号
エネルギー管理士（電気）免状　第 2857号
エネルギー管理士（熱）　免状　第 5191号

若森技術士事務所

所長　若　森　敏　郎

〒302-0023　茨城県取手市白山5－4－13
TEL・FAX 0297－72－0907

◆本誌発行にご協力有難うございました

関東とふるさとをつなぐ“グローカル”な紙面

創刊1924年

週2回(日・木)発行
1ヶ月 1,220円(郵送料200円)

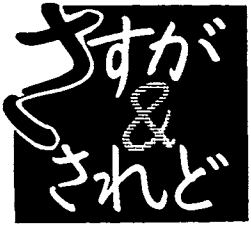
丹波新聞

代表取締役社長 小田晋作

丹波新聞社

〒669-3309
兵庫県丹波市柏原町柏原201
tel 0795-72-0530
fax 0795-72-1956

http://tanba.jp



60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌［さすが＆されど］好評発売中

本誌は読者投稿を主体に編集するユニークな雑誌です／日々の暮らしから世直しまで知恵と体験を交流し合います／年間購読料 3,500円（税・送料込み）下記へ。

時代と共にあなたの歴史
自分史年表
一家に一冊／書く・読む・調べる記入式
歴史年表／定価1,800円（税・送込み）

これから書きつぐ生活ノート
メモリー50
1年2ページ、50年間書ける気軽なメモ帳／定価1,800円（税・送込み）

記念の年に贈る同時代シリーズ▶［昭和10年生まれ］（昭和8・16年生れは売切れました。）
既刊▶［昭和4・5・6・7・9年／昭和13・14・15・17年］■各巻3500円

株式会社ホンゴー出版
代表取締役 池田 忍
〒247-0005 横浜市栄区桂町 1-1-1
☎045 (895) 2712／FAX 045 (895) 4338
Eメール：hongo@mocha.ocn.ne.jp

本誌発行にご協力有難うございました◆

人と技術で社会に貢献する

株式会社 ユー・ティー・ケー

代表取締役
会　　長　水船　隆昌

本　　社：〒102-0081　東京都千代田区四番町六番地　パレブランビル
Tel 03（3556）4070　Fax 03（3556）9577

東海営業所：〒319-1111　茨城県那珂郡東海村舟石川764-10　東成ビル3F
Tel 029（283）0460　Fax 029（283）0469

業務内容：・原子力関連事業　・人材派遣事業
・節水工事業　・食品等の卸及び販売

コンピュータ・データ処理　－少量でもお任せください－

株式会社　**サイモン・デジタル・センター**

仕事内容：入力代行（名刺、ハガキ、アンケート、エクセルシート　ほか）
出　　力（宛名ラベル、直接印字、帳票出力　ほか）
そ の 他　データ管理・メンテナンス・事務局代行

専務取締役　塚口　智（氷上町油利）

営業部長　藤田　徹（市島町今中）

〒103-0014　中央区日本橋蛎殻町１－14－10
アナリティカビル５Ｆ
TEL 03-5659-3081

◆本誌発行にご協力有難うございました

春日大路の山里
春花・夏花の香りいっぱい。
美味しい山里の花密が採れています。

蜂の蜜

御贈答に！産地直送!!

健康食品

プロポリス（丹波春日産）

樹木の若芽が出て蜜蜂が一生懸命働いてプロポリスを集めました。ストレス解消・健康管理に大好評！

プロポリス

代表　山内秀樹（柏高 第11回生）

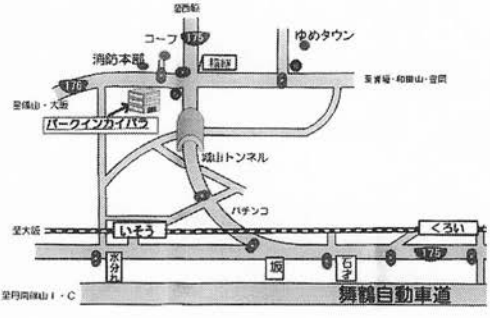
秀 やまひで猪肉店 養蜂部

丹波市春日町栢野1064　TEL.0795-75-1773　FAX.0795-75-0958

パークイン Park inn KAIBARA

(株)柏原ビジネスホテル
TEL. 0795-72-3525
FAX. 0795-72-3495
〒669-3311 兵庫県氷上郡柏原町母坪380

ご宴会・帰省の際のご宿泊に



・会議室、宴会場完備
・駐車場（50台、大型バス駐車可）

ＪＲ福知山線柏原駅よりタクシー5分
近畿自動車舞鶴道春日インター7分

●お食事は

蔵出し料理 あじくら

TEL. 0795-72-3715

本誌発行にご協力有難うございました◆

あだち眼科院長／医学博士
順天堂大学眼科　非常勤講師

足立和孝

〒347－0015　加須市南大桑字下鳩山一六二〇－一
TEL　〇四八〇－六五－五九八八
FAX　〇四八〇－六五－六〇九七
E-mail:kazu358@pastel.ocn.ne.jp

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルダークラブ幹事
広範な国民連合・東京世話人
EMネット埼京理事

足立和巳

〒183－0051　東京都府中市栄町一－一五－二七
TEL・FAX　〇四二－三六四－七二二七

足立かをる

株式会社　トレンタ

足立真一

〒211－0005　川崎市中原区新丸子町七〇一
電話　〇四四－七二二－六三七一
自宅電話　〇四四－八五四－六三四〇

株式会社　ナレッジリンク
足立国際会計事務所
代表取締役
税理士・米国公認会計士（Certificate）

足立知佳子

〒152－0035　東京都目黒区自由が丘一－一三－四　藤タワービル六〇二
TEL　〇三－三七一八－八〇四七　FAX　〇三－三七一八－八一四七
E-mail:cadachi@aia.gr.jp

足立静雄

◆本誌発行にご協力有難うございました

飯田光雄
〒285－0045
千葉県佐倉市白銀三－八－十一
電話 〇四三－四八五－〇五〇三
FAX 〇四三－四八五－〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶
株式会社 明日香園
代表取締役 池畑廣士郎
本社 東京都豊島区南池袋二－二六－五
電話 〇三－三九八〇－三七四一

生田清弘
東京都世田谷区成城一－七－七
電話 〇三－三四一五－一八九三

井本義一

上野重喜
〒234－0054
横浜市港南区港南台三－一七－二二
TEL・FAX 〇四五－八三二－七三三一

有限会社 PCC大洋
岡吉明
〒351－0014
朝霞市膝折町三－七－五
TEL 〇四八－四六〇－一六〇一
FAX 〇四八－四六〇－二三九七
http://www.pcc-taiyo.co.jp

本誌発行にご協力有難うございました◆

岡林逸男

〒177-0051 東京都練馬区関町北二-七-一七

荻野武

小田富士夫

梶原清

やす子

株式会社 アイ・ケイ・アイ
株式会社 ホームワールド
代表取締役 岸田勇

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町三-七-一〇
電話 〇三-三二四九-五二一六一

木呂子恵美子

◆本誌発行にご協力有難うございました

久保春雄

〒300-0031 土浦市東崎町十三-二-六〇四
電話 〇二九八-二二-二九七八

栗田功

坂上明

坂上勝朗

坂上登
山口泰男
仲一聰
仙台市在住

坂上豊

本誌発行にご協力有難うございました◆

合唱指揮者
笹倉　強
〒352－0014
新座市栄四－五－一一五
TEL・FAX〇四八－四七七－五六四〇

高見嘉都司
〒173－0025
東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話　〇三－三九五六－〇六〇〇

高見秀史
株式会社ディノス　顧問
自宅　E-mail:hidetakami@aol.com

株式会社　シードコーポレーション
代表取締役　千種倫幸
東京都中央区銀座一丁目二一－九
電話　〇三－三五六七－九七〇〇

鶴田　宏

日本舞踊　西崎祥
端唄　根岸妙
〒224－0027
横浜市都筑区大棚町五〇〇－八
電話　〇四五－五九一－六六五五

◆本誌発行にご協力有難うございました

青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑（都営八王子霊園隣り 第二期墓地分譲案内中）
住職 堀井隆川
〒193－0821 東京都八王子市川町四九三－二
電話 〇四二－六五二－二〇一一

村上末吉

村上久夫
〒168－0072 東京都杉並区高井戸東三－四－十二
電話 〇三－三三三二－七一三四

山口和久
恵理子・藤吉郎秀吉・由佳
賢一・寧々・愛々・茶々・凪人
〒196－0031 東京都昭島市福島町二－一〇－二七
電話 〇四二－五四四－八八六一
http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi 0330/

PHP文化フォーラム 埴生の宿
代表 吉住自由造
〒216－0033 川崎市宮前区宮崎五－五－三五
電話 〇四四－八六六－三六一一

渡邊隆男

編集後記

★当誌の表紙は創刊時から著名な常岡文亀画伯が繊細で滋味溢れる日本画をご執筆くださいました。画伯没後はご子息の幹彦画伯が代わって豪胆かつ重厚強靭な迫力に満ちた絶品をご提供いただきました。この機にこの場を借りて常岡父子のご厚意に改めて深甚な感謝の念を捧げたいと思います。常岡父子の高い格調があればこそ郷土誌にはない高い評価も得ることができたのです。

今号から可部美智子さんが手塩にかけた陶彫〝わらべ唄〟なる人形が表紙に登場します。於小田急新宿店本館・第11回可部美智子陶展より、写真のタイトルは〝おまつりだ！〟高46㎝、信楽の土から生まれたこの子はさて何を語るのか、うぶな眼ざしをみつめてやって　（渡邊）

★先日、編集会議の時、今回から表紙の絵が代わると聞き、今までの三十余冊を、床の絨毯の上に並べて、座ったまま暫く鑑賞しました。

丹波の秋、田園風景、雪の高源寺、心から良いなあと思う絵が沢山あって、至福の一刻を過ごしました。三十年以上前から郷友会の縁で常岡先生の絵に会い、毎回見せて頂くだけですが、大ファンです。つくづく思いました。「山ざる」は、何と贅沢な表紙の会誌だったのだろうかと、素晴らしい絵を長い間、有り難うございました。　（木呂子）

★丹波市発足の利点として、町ごとに囲い込んだ史跡紹介から有機的に結びついた市内史跡紹介への飛躍に期待してきたが、大いなる失望となった。阪神間からの軽登山客は増える一方なのに、貸し自転車も自転車用通路もなく、自動車利用者への便宜向上ばかりが続く。これでは福知山線の複線電化も永久に篠山止まりであろう。　（徳田）

★NPOの事務局をしているが、会報の原稿締め切りが「山ざる」と重なり、出稿が遅れてしまった。毎日何かひとつの原稿を書いているという、粗製乱造である。パソコンの調子が悪いと、私の機嫌も悪くなる。でもこれがないと何ひとつできない状態、パソコン依存症にかかっている。どうしたらいい？突然システムダウンになる恐怖に脅えながら…。（上）

★毎号百名ほどを無作為に選んで原稿依頼を出すのですが、本号は多数の応募を得て、分厚いものとなりました。ありがとうございました。　（池田）

山ざる　第37号

平成十八年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄　池田　忍　井徳正吾
上　高子　岡　吉明　木呂子恵美子
坂上勝朗　常岡幹彦　鶴田ゆき子
徳田八郎衛　原谷弘美　本城英明

発行者　関東氷上郷友会会長　渡邊　隆男
〒174-0064　東京都板橋区中台3－27－I－401
坂上勝朗方・関東氷上郷友会事務局
☎〇三（三九三六）二四〇一
振替〇〇一一〇－三－一二三二三〇
製　作　株式会社二玄社
編集協力　株式会社ホンゴー出版

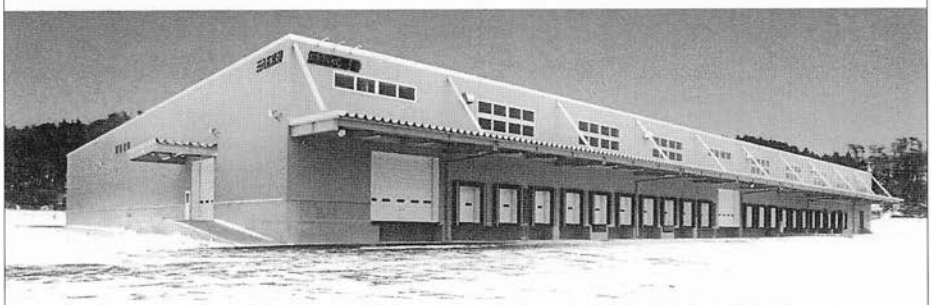
人材募集!! 関東地区、関西地区

(1) 倉庫管理者　(2) 大型、中型トラック乗務員

※年齢を問わず活躍して下さる方を求めます。

当社は三井化学(株)、大日本印刷(株)、アサヒビール(株)、ダイキン工業(株)、沖電気工業(株)、三菱商事(株) などを主力荷主に持つ総合物流会社です。東京、名古屋、大阪に主要倉庫を持ち、関東・関西圏の物流をつなぎます。

日本で一番大きなトレーラーが毎日、東海道を走っています。



敷地７０００坪、建物３０００坪　平成１９年１０月竣工予定の物流センター

三協運輸 株式会社

代表取締役社長　岸本　勲（氷上町出身）

本　　社	東京都足立区保木間１－１－３	TEL. 03 (3860) 8112
大阪支店	大阪府大東市新田中町３－３	TEL. 072 (806) 2821
埼玉支店	埼玉県桶川市加納峯３－７－９	TEL. 048 (728) 9380

物流倉庫所在地　　東京　埼玉　神奈川　名古屋　大阪

夢中になれるもの、何かありますか？ 時のたつのも忘れて没頭できる書道は、充実した余暇と豊かな毎日を約束します。

レッスンビデオ＋テキスト［特別セット］

通常価格：各2,940円（税込） ➡ **郷友会々員特別価格：各2,352円**（税込）

いずれのビデオも、筆の鋒先に焦点を当て、多方向のカメラアングルやスローなども交えて、鋒先の動きを繰り返し克明に再現しています。手本には、筆の動きを分析し組織的に編集した、定評ある入門テキスト「レッスンシリーズ」を採用しました。

楷書のレッスン［特別セット］

監修指導：樽本樹邨

【内容】

ビデオ「楷書のレッスン」 VHS・カラー60分
テキスト「楷書のレッスン1」入門編／B5判・56頁

行書のレッスン［特別セット］

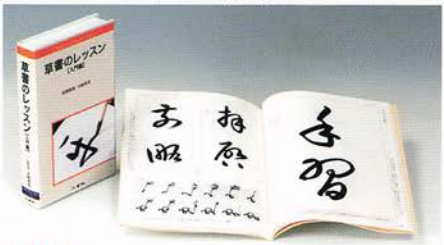
監修指導：吉川蕉仙

【内容】

ビデオ「行書のレッスン」 VHS・カラー60分
テキスト「行書のレッスン1」入門編／B5判・56頁

草書のレッスン［特別セット］

監修指導：宮崎葵光



【内容】

ビデオ「草書のレッスン」 VHS・カラー46分
テキスト「草書のレッスン1」入門編／B5判・56頁

かなのレッスン［特別セット］

監修指導：村上翠亭

【内容】

ビデオ「かなのレッスン」 VHS・カラー50分
テキスト「かなのレッスン1」入門編／B5判・56頁

二玄社 会長 渡邊隆男

〒101-8419 東京都千代田区神田神保町2-2 Tel.03-5210-4733 Fax.03-5210-4723 http://nigensha.co.jp